

特35
842

伊藤左門編輯
神官必携
全

014146-000-6

特35-842

神官必携

伊藤 左門/編

M25

ABB-0423



特35
842

亦
法



神
厨
之
券

玉
錢
本
城
天

從
及
位
康
山
日
青
長
鐵
甲
東
本
西
博

特35

842

高



法



垂規

壬辰之春

櫻宇題



序文

開け行世の状にや此頃書のそり巻のいと最安くかりと
るよぞ叢誌雑誌の類を始め著述編輯の書籍とも多々よ
なぞもてきつるも八重山振の實あきことのみ多かるも
のからそを見る人も一とひ手にとり一も二とひ目にふ
れを書棚の塵に委ねあるは戸障子の繕ひとあれるも多
あり今茲に玉鉾舎のある一伊藤氏か物せられたる此一
巻の舊き新しきを問はず世の人の心掟とならむ限り書
つめられとる書なれば神官の人々の更にも言はず我國
家學に志あらんものゝ必ず座右を放つへあらさるの書

なりまた年もわかゝるまゝの有益のいそみあを
を打よろこひつゝ一言を添つるハ乃樂舎の岡吉胤なり

明治廿五年四月一日

緒言

一夫れ神社は國家の宗祀にして報本反始の大義なり國家の彝倫之れによりて齊
ひ國家の禮典之れによりて起るされば其神社に奉仕するものは其官國幣社に
神職たるは府縣鄉村社の神官たるは次問はず何れも國家禮典に代表者として
國家彝倫の標準者として自ら國典を修め躬行を正し齋肅恭敬以て上神明に仕
へ誠意懇情以て下臣民を導くの大任たることハ既に其奉務規則に大定し給へ
る所あり

一余が家代々この大任を職として余に至りて既に十世父の後を受く不肖拙劣其
任敢て當らずと雖も亦その神明を敬するの悃誠皇室を尊ぶの衷情國家を受す
るの赤心に至りては決して自ら世の學者輩に一步も譲らざることを信ず余や
固より家貫くして敝衣粗食饑寒を防ぐの力なしと雖も幸ふこの赤心はあるあ
りて爲めに家族の慢り汝受けず固より身賤くして口舌筆硯世人を益せるの才
なしと雖も幸ふ此衷情の存するありて爲めに社會に辱め汝免ることを得嗚呼
余をして出で、社會の辱を免れ入て家族に愧ぢざるこれ皆これ衷情の恵物か
り赤心の恩賜なり嗚呼この赤心ありて初めてこれ身体ありまの衷情ありて後

この生命あり我豈この赤心れたため此哀情の爲め盡さざるを得んや讀者本編に入りて余の篤鈍を憐察する所あれ

一余や不幸年未だ二七からざるに父に後れ三六に至りて母に捨てらる爾來單孤其爲す所を知らず幸に先師山口氏(名の起業山田の人)導く所となるこれ又不幸中の幸と云ふべきか余や先師の家塾にありて日夜其薫陶を蒙り朝夕其教戒を受く余の赤心これ皆先師の育つる所我が哀情これ即ち先師の養ふ所嗚呼余の身体を生みたる者の父母にして我が精神を生みたる者は夫れ即ち先師なるかこれ余がその厚恩を稱して萬一を報ずる所以なり

一余が此編みな先師の口授を受くるの傍ら筆記したるものも依りたれば一言一句も決して私の言ふあらす然りと雖も余の菲才なる却て先師の明を失せる所あさよまもあらす讀者其誤りを以て罪を先師に歸する勿れ余や實に汗顔の至りに耐へず嗚呼先師の靈幸に答ひること勿れ誠惶誠恐頓首々々

明治二十五年四月

編者誌

神官必携上巻目次

官國幣社神職奉務規則	一
府縣鄉村社神官奉務規則	二
直毘靈	五
國體	九
神典要文	十七
神祇令	廿三
神代御系圖	卅一
天皇御系圖及年代一覽	卅五
御聖勅	四十七
明治元年三月ノ御誓文	四十九
億兆安撫國威宣布ノ宸翰	四十九
江戸ヲ以テ東京トナスノ詔	五十一
年號ヲ改メ一世一元ノ制ヲ立ツルノ詔	五十一
直言ヲ百官有司ニ求ムルノ詔	五十一

公議所ヲ開キ制度律令ヲ議セシムルノ詔	五十二
群臣ヲ會シ施設ノ方法ヲ諮詢シ玉フ詔	五十二
三等以上公撰ノ聖詔	五十三
各藩知事ヲ御前ニ召シテ下シ給ヒシ勅諭	五十三
全國募兵ノ詔	五十三
地租改正ノ詔	五十四
地方官會議々院憲法ヲ頒布シ玉フ詔	五十四
立憲政體ノ聖詔	五十五
地方官會議開會ノ勅語	五十五
其翌日復タ會議院ヘノ詔	五十六
元老院ヲ開シ聖詔	五十六
憲法ヲ起草センコトヲ元老院ニ命スル勅書	五十六
明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ開クノ勅諭	五十七
軍人ヘノ勅諭	五十八
華族令ヲ定メ授爵式ヲ行ヒ玉フ其勅詔	六十四

海防費補助ノ詔	六十四
市制町村制發布ノ詔	六十四
憲法發布ノ告文	六十五
同 勅語	六十六
同 詔書	六十七
金鷄勳章ヲ創設シ給セシ詔	六十八
元老院廢止ノ勅詔	六十九
教育ニ關スル勅語	六十九
帝國議會開院ノ勅語	七十
御製 二首	七十一
以上	
神官必携下卷目次	七十三
神社祭式	七十三
遷宮ノ用度品	百九

附 假ノ御極代及ビ御假權ノ略圖	百十一
遷宮式ノ行例	百十三
祝詞	
每朝伊勢兩宮ヲ遙拜スル詞	百十四
皇大神宮大麻奉祀ノ祝詞	百十四
元日ノ祝詞	百十五
月祀ノ祝詞	百十五
宮地鎮謝祭詞	百十六
大殿祭詞	百十六
祈雨祭詞	百十七
祈晴祭詞	百十七
祈雨報賽詞	百十九
祈晴報賽詞	百十九
神職等諸ノ御社ヲ拜奉ル時其前ニ白ス詞	百十九
祈瘡病祝詞 五章	百二十
附午頭天王蘇民將來ノ事	百二十二

祈家内安全詞	百二十四
祈平産詞	百二十四
同 報賽	百二十五
初宮參詞	百二十五
祭先祖祝詞	百二十六
門神祭詞	百二十六
井神祭詞	百二十九
竈神祭詞	百二十九
鎮火祭詞	百三十
道饗祭詞	百三十
祭大雷大神祝詞	百三十一
鎮震祭祝詞作例	百三十二
附 地震ノ説	百三十三
遷却崇神祭祝詞	百三十四
田遊祭祝詞	百三十五
	百三十六

火舞祭祝詞	百三十七
船玉祭詞	百三十八
祈漁獵詞	百三十八
家ニ齋々奉ル神等ノ御棚ニ向ヒテ	百三十九
學問ノ神ノ御前ニ向ヒ	百三十九
新始祭式	百三十九
同 祝詞	百四十
柱立祭式	百四十一
同 祝詞	百四十一
上棟祭式	百四十二
同 祝詞	百四十二
以上	百四十二

附錄目次

神官試験ノ儀ニ付伺及ビ指令	明治二十三年四月十五日伺	百四十四
	同 廿二日指令	

附 學階授與規則

神官試験ノ儀ニ付伺及ビ指令	明治二十四年十月十四日伺	百四十四
學階試験採用内規	同 廿三日指令	百五十二
官國幣社試験規則		百五十四
府縣社以下神官試験ニ關スル訓令		百五十五
以上		百五十八

目次了

神官必携上卷

●官國幣社神職奉務規則

三重 伊藤左門編輯

第一條 官國幣社神職ハ國家ノ宗祀ニ從事シ國家ノ禮典ヲ代表スル職務タルヲ以テ平素國體ヲ辨シ國典ヲ修メ躬行ヲ正シテ本務ヲ盡スベシ

第二條 官國幣社祭典ハ國家彝倫ノ標準タルヲ以テ齊肅恭敬首トシテ報本反始ノ誠意ヲ表スベシ

第三條 祈年新嘗例祭等總テ官祭ノ典則ハ非常ノ事故アルニアラザレバ成規ノ時間ヲ獲リニ伸縮スベカラズ

第四條 祭祀典則ハ舊來ノ儀式ヲ遵守シ其社ノ禮祭民俗因襲ノ神賑等適宜行フコトヲ得

但臨時祭ヲ行ハントスルトキハ地方廳及所轄警察署又ハ分署ニ届出ベシ

第五條 人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ナシト雖トモ苟

墜モ貪汚ノ所爲アルベカラズ

第六條 社殿及其境内ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注ギ舊觀ヲ失セズ悠久ノ保存ヲ要ス

第七條 神社所藏ノ寶物什器古文書類等常ニ散失ナキ様監護シ神社所有ノ財産ヲ管理シ金穀ヲ出納スベシ

第八條 神社ノ財産中人民ノ寄附ニ係リ永遠ノ目的ヲ以テ備ヘタル土地金穀ヲ變更セントスル場合ハ官國幣社ト雖トモ氏子又ハ講社アルトキハ其總代協議ノ上地方廳ノ許可ヲ得ベシ

第九條 神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

右官國幣社神職奉務規則ハ明治二十四年八月十三日內務省訓令第十七號を以テ發布せられたるものなり

●府縣鄉村社神官奉務規則

第一條 神官ハ神明ニ對シ尊崇悃誠ヲ主トシ典例ニ從ヒ各其本務ヲ

盡スベシ

第二條 神官ハ祭祀ノ典則舊來ノ儀式ヲ遵守シ決テ亂紛スベカラズ其社ノ例祭民俗因襲ノ神賑等ハ適宜行フコトヲ得

但臨時祭ヲ行ハントスルトキハ所轄警察署又ハ分署へ届出ヘシ

第三條 神官ハ人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ケナシト雖モ苟モ貪汚ノ所爲アルベカラズ

第四條 神官ハ社殿及其境内ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注ギ舊觀ヲ失墜セズ汚穢破損ニ至ラシムベカラズ

第五條 神官ハ神社所藏ノ寶物什器及ヒ古文書類ヲ監護シテ散逸セシムベカラズ如何ナル場合ト雖トモ賣却讓與又ハ質入書入スベカラズ

第六條 神官ハ神社所有ノ財産ヲ管理シ金穀ヲ出納スベシ

第七條 神官ハ其管理ニ係ル不動産積立金穀ヲ濫リニ賣却讓與又ハ質入書入スベカラズ若シ不止得必要アルトキハ氏子又ハ信徒ノ

協議ヲ經地方廳ノ許可ヲ受クベシ

第八條 神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

府縣鄉村社神官奉務規則なるもの明治六年七月廿日教部省第廿四號達を以て相定められしが後明治廿四年七月六日内務省訓令第十二號を以て遂に右の如く改正せられしを以て今こゝに掲げたるなり

それ神社の官國幣社なると府縣鄉村社なるとを問はず何れも其祭祀する神靈は畏くも 天皇陛下祖宗の神靈若くは國家を守護し給ふ神明或は 皇室に忠勤なりし節義の臣又は國難に殉死したる義勇の民の靈などにして神胤を受け神國に生れて此の土の粟を食し此の土の水を飲み此の土に衣し此の土に住する臣民の皆必ず厚く之を尊び深く之を敬せざるへからずこれ即ち其德澤を報し其本始を反る所以にして更にお信仰を自由に一任したる宗教の如き者あらず宜しく

神社に奉仕するの士必ず神社の國家の宗祀たることを忘る勿れ

●直毘靈

この篇は本居大人の道といふことに就きて論らはれたるものよて御國の物學びする人の必ず讀みて覺るべきものぞと思ひたればこゝよしするす

皇大御國は掛まくも可畏き神御祖天照大御神乃御生坐る大御國にて大御神大御手に天つ璽を捧持して萬千秋の長秋に吾御子のいろいめさむ國なりとことよさし賜へりしまにく天雲のひかぶすかぎり谷蟻れさむたるきはみ皇御孫命の大御食國とさだまりて天下よはわらぶる神もなくまつろはぬ人もなく千萬御世の御末の御代まで天皇命はしも大御神の御子とましくて天つ神の御心を大御心として神を今もへだてなく神ながら安國と平けく所知看しける大御國になもありければ古への大御世には道といふ言舉もさらになかりき其はたい

物にゆく道こそ有けれ物こそわりあるべきすべ萬の教へごとをいも
何の道くれの道といふことと異國のさだなり然るをや、降りて書籍
といふ物渡參來て其次學びよむ事始まりて後其國のてふりをならひ
てや、萬のうへおまじへ用ひらるゝ御代にありてぞ大御國の古の大
御てふりをば取別て神道ととあづけられたりける、そはかの外國の道
やよまがふがゆゑに神といひ又かの名を借りてこゝにも道とはいふ
なりけり、まかありて御代々々を経るまゝ、いやすく、に、その漢國
のてふりをしたひまねふこと盛なりもてゆきつゝ、ついに天の下所
知看す大御政も専ら漢様に爲はて、青人草乃心までぞ其意にうつり
あけるさてこそ安けく平けく有來し御國乃みだりがはしきことい
できつゝ、異國にやゝ似たることも後にはまゝしきにけれとも、此
天地のわひだお有とある事、悉皆神の御心ある中に、禍津日神の御
心のあらびはしもせむすべなくいと悲しきわざにぞありける然れ
ども天照大御神高天原お大坐々て大御光はみさゝかも曇りまます此
世を御照しはまゝ、天津御璽はたはふれまます傳より坐て事依し賜

ひしほに、天の下、御孫命の所知食て天津日嗣の高御座は天地の
共どきはまかきはに動く世なきぞ此道の靈く奇く異國の萬の道よす
ぐれて正しき高き貴き微なりけるも此道としかなる道よと尋ぬる
も天のれ乃づからある道おもわらず人の作れる道おもわらず此道は
も可畏きや高御産巢日神の御靈ふよりて神祖伊邪那大神伊邪那
大美神の始めたまひて天照大御神の受たまひたまひ傳へ賜道
なり故是以神の道とい申すぞ、其道の意は此記(古事記)をばし
りもろく、れ古書どもをよく、味ひみれ、今もいとよくまらるゝ
を世々のものしりびとせもの心もみな禍津日神にまじりてたいか
ふふみよのみ感ひて思ひとれもひ云ひといふこととみか佛と漢との
意あしてまことこの道れこゝろをばえさどらすなもある故れのが身々
に受行ふべき神道の教なといひてくさく、ものすなるもみなかの道
々のおへこととをうらやみて近き世あかまへ出たるわたくしとどな
りあなかしこ天皇の天下まろしめす道を下が下として己かわたくし
の物とせむことよ人のみか産巢日神の御靈によりて生れつるまよ

く身にあるべきかざりれ行と、汝のづから知りてよく爲る物よしわ
 れば、いにしへは大御代よししがまもまでたゞ天皇の大御心を心と
 して、ひたぶるに大命をかしこみぬやびまつるひて、ねほみうつくし
 の御蔭にかくろひておのゝ祖神を齋祭つゝはせくゝにあるべき
 かざりのわざをして穩しく樂く世をわたらぬはかなかりかひ今は
 た其道せぬひて別に教を受けておこなふべきわざはありなむやもし
 ひて求むとならば、きたなきからふみとゝるを疑ひきよめて清々し
 御國とゝるもて古典も汝よく學びてよ然せば受行べき道なきこと
 は、れのづらふ知りてむ其をしるぞ、すなはち神の道をうけ汝こなふ
 のありける、かゝれば如此論ふも道の意にのあらねども、禰津日のみし
 わざ見つゝ、黙止えあらず神直毘神大直毘神乃御靈たばりて、このまが
 をもて直さむとぞよ、かくいふの明和八年といふと、これかみな月の
 九日の日伊勢國飯高郡に御民平阿曾美宜長うしこみかしこみもし
 す

皇道は實に神あがらの大道なりさるを中古邪しき教への道をも參

渡りて年に月にはびこり廣がりて終に長くも大神と穢き惡むべき
 佛などの名を号くるに至れりかく禰津日神の荒びましてこの道は
 影だにどめぬまで衰へしも此の明治の大御代となりてきたなき佛
 の名にてかまこくも大神を呼ひまたりしを初め佛像を大神等の御
 神體とし又佛に供ふる穢れたる物を以て大神の御前と奉ることゝ
 もに至るまで科戸の風の天の八重雲を吹拂ふ如く十掌に劔を以て
 大蛇をす々に切と給ひまるとは如くも被ひ清めて眞澄の鏡くもま
 なく道の光も照り渡りて禰津日神の禍事をは被ひ給ひて、いよまへ
 のまことこの道お直したまひまはげにこの直日靈のみまにぞある

●國体

まの國体てふことよつきて下にたぐるは常陸の國舊會津
 藩にて最も尊王家の名たかりし會澤安なる人の述べ給
 ひし廻轉篇てふものゝ中より抜き出だして此よのす宜し
 く一讀して我が國體の異國とことなりて尊き所以を知る

べし

天地の間も萬國あり萬國に各君ありて、その國を治む君あるもれば各其君を仰きて天とす國々みな其内我貴びて外を賤しとする事同じき理りなれば互に已か國我尊び他國を夷蠻戎狄とする事是亦定れる習也されども萬國よりは皆易姓革命といふことありてその國亂るゝ時或は其君を弑し或は是を放ち或は寡婦孤兒を欺て其禪をうけ或は世嗣絶る時他姓のものをも以て其位を嗣しむるの類にして其君の種姓他に移る事國として是あきものあらずこれ其天とする所まばくかわる習あれば其天地といへるもみな小天地にして其君臣といへるも小朝廷なり萬國の中に只神州のみ天地開闢せしより以來天日嗣無窮に傳て一姓綿々として庶民は天と仰き奉る所の皇統かわらせ給えず是其天とする所の大なる事宇内に比なし今この萬民天地の間も雙びなき貴き國も生れながら吾國体を知らざるべけんや國の體とは人の身も五體あるかごとく我國の体を知らざるは已が身に五體あるを知らざるが如し是によりてむかし北畠准后世の亂我歎き神皇

正統記を著して皇統の正まき事我論す其略に曰く大日本は神國なり天祖初て基をひらき日神永く統我傳たまふ我朝のみ此事あり異國にはそのたくひなし此もゑに神國といふ也神代には豊原の千五百秋の瑞穂の國と云天地開闢の初めよりこの名あり又大八洲の國といふまた耶麻土と云ふ是は大八洲の中つ國の名あり中洲たり上には神武天皇より代々の皇都なり依て其名を取て餘の七洲をも総て耶麻土といふなるべし漢字漢りて後字をば大日本と定てまかも耶麻土と讀ませたる也大日靈の御國なれば其義をもとれるか古より大日本とも若は大乃字を加へず日本とも書り又倭といふ事は漢土より名つけたる也推古天皇の御時よろこしの隨國より使ありて書を送れりしに倭皇と書返牒あり東天皇敬白西皇帝と有りき彼國より倭と書たれと返牒あり日本とも倭とも載られず中比より日本と書ておくられるにや又上代には秋津といふ此外にもあまた名あり細乎千足國とも磯輪上秀真國とも玉垣内國ともいへり天朝ははしめは天津神の種を受て天祖よりこのかた繼體たがわすして唯一種ま

ます事外國に其たくひあし唯 天朝れみ天地開一初よりいまの今日
 に至るまで 日嗣を受たはふ事よこしまならず一種姓の中になきて
 も自ら傍より傳へ給ひし猶正まきお返る道ありてぞ、たもちまし
 くける是まかしなかり神明の御誓あらしにして餘國に異なるへき
 むはれなり抑神道のことはたやすく顯さすと云事あれと根元を知ら
 ざれぬみだりがわしき端とも成ぬへし其怪いへを救はんため聊かま
 るし侍る夫天地初て開去時の神を國常立尊と申又天御中主神とも
 身し奉る次に陽神を伊弉諾尊と申陰神を伊弉册尊と申す此二神 日
 神をうみまますの御子光りうるはしくして國のうちよてりどはる、
 二神天上は事をさつけ給ふこれを 大日靈尊と申又 天照大神と
 も申す次は月神を生ますその光日おつけり夜の政役授たまふはた
 素盞鳴尊を生ます勇み猛し根の國にぬねとのさまふ、天照太神の御
 子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊と申また其御子を天津彦々火瓊々杵尊
 と申 天照太神いつきめくみましくして芦原の中州の主とあして天
 くたらしめ給ふ三種の神寶を授けまします先あらかしめ 皇孫お勅

して宜く芦原の千五百秋の瑞穂の國の我子孫可王之地也宜爾皇孫就
 而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣又 太神御手は寶鏡汝持よ
 ひ 皇孫に授て祝て吾兒視此寶鏡當猶視我可與同殿共牀以爲齋鏡と
 宣ふ八坂瓊の曲玉天の叢雲の劔を加へて三種とすこの鏡はまどく分
 明なるをもちて天下お照臨したまへ八坂瓊のひろがれかどとく曲妙
 を以て天下を知しめせ神劔を提て不順ものを平けたまへと勅ましく
 けるどぞこの國は神寶にて 皇統一種正しくましはす事誠にこれ等
 の勅よ見えたり抑彼寶鏡の石凝姥命のつくりたまへる八咫は御鏡に
 して 日神の御形也八坂瓊は曲玉は玉屋命作り給へる也劔は素盞鳴
 尊の 大神は奉られし叢雲の劔なりこの三種につきたる神勅はまさ
 しく國を手持ますべきみちなるべし鏡は萬象を照すに是非善惡のす
 かたあらわれずとみふことあし玉は柔和善順を徳とす劔は剛利決斷
 を徳とす詞約おいて旨廣し剩へ神器よあらはし給へり最かたしけ那
 き事にや中にも鏡を本とし 宗廟の正體と仰れたまふ鏡は明をかた
 ちとせりはたまさしく御影をうつし給ひしかは深き御心をとめ給

けんぞかし天あるもの日月より明あるはなし依て文字を制するに
 日月を明とすといへり我神大日の靈にまさせし明德を以て照臨し
 給ふ君も臣も神明の光胤をうけ或はまさしく勅をうけし神達の苗裔
 也誰かこれを仰き奉らざるへき此理汝さとり其道に違はず學問も爰
 に極るへきにこそ道のひろまるべきことは文籍流布の力なり 應神
 天皇の御代より儒書汝廣められ神聖よまさせば 天照太神の御心
 汝うけて 我國の道を弘め深くし給ふなるべしかくて去の 瓊々杵
 尊天降りましきに猿田彦といふ神参りて筑紫日向高千穂の櫛觸の峯
 にましますべし我は伊勢の五十鈴の河上お至るべしと申す彼神の申
 のまゝに櫛觸の峯に天降て遂に吾田の長狭の御嶋にすませ給ひけり
 御子 火々出見尊生れ給ふ 火々出見尊の御子 彦波瀲武鸕鷀草葺
 不合尊と申其御子 磐余彦尊の御世より人皇の代と那れりむか
 皇祖天照太神 天孫に詔せし寶祚の隆當與天壤無窮とあり天地も昔
 おかわらず日月も光を改めず況や三種の神器世に現在ま給へり窮あ
 るべからずされば 我國を傳る寶祚なり仰きて尊み奉るへきは日嗣

を受たまふ 皇になんればしすすと見へりこれ北畠殿に論せられ
 し其大略也誠に世の亂れを救ひ人人心を正くすへき格言といふべし
 三種の神器のここの前見へし如く寶鏡の諸神相議りて石凝姥の神
 をまて 日神の御形を鎔せしめまなり又曲玉の 日神を迎へ奉らん
 とて天明玉の神をまて造らり也神劔の素盞鳴尊越の八岐大蛇を斬
 て得たりなり其上に常に雲氣あましかは奇き劔なりとて 天照太
 神に奉り上らる(中略)のここのく三種とも皆偶然にものに非ず依
 て 歷朝大御神の 神勅のまゝ殿内まつり給しを 崇神天皇は
 御時よ至りて 神威を憚り給ひ別に鏡劔を摸造して護身は御璽とな
 して神代の物をい大和の笠織邑に移ま奉らせ給ふ 垂仁天皇の御時ま
 た移して伊勢の五十鈴の河上お鎮坐ままてより今まいたるまで
 寶鏡は伊勢神宮にほまます神劔も伊勢にままてを 日本武尊東
 征れどき申請て東夷を平け遂に尾張れ熱田お鎮坐まます也神璽は
 至尊御身を離たせ給はず壽永の亂お海底お沈みしかせもとて上て
 皇居に還し参らせたり 崇神天皇摸造し給ひ護身の御璽の事實

鏡の天徳長久の火災は御形損したまひ神鏡は壽永に亂に海底に沈みてより他の鏡を以て是に換させ給ふと云へども神代より傳へたまひし神物は歴然として世に現存まします天胤と共に恙なく無窮に傳へ給はん事毫厘も天照太神の誓はせ給ひし御時に異なることなし天地の間に萬國數多しといへどもかゝるめてたきためしあること異域には曾て聞かざる也されは神州の尊きこと宇内を雙びあし日嗣は君を實に宇内の至尊と稱し奉るへし天下の民かゝる尊き邦に生れあから我國の體をも知らずして過なんは鳥獸虫魚の無智なるに均しかるべし故に北島殿の論せられし大意を擧げて聊か管見をも記し侍る也

「いくそたびかき濁せどもすみかへる水や御國のすがたなるらん」とい我が皇國の國體を詠じざる物にて世に盛衰あり時に治亂なれども天つ高御座はほしまして天日嗣所知食天皇の隆きく無窮に日月と共に榮へまはすいとも尊き美とく大御國にぞあるかゝる奇しき御國の御民等

いきたあきまが心を拂ひ清めてすがくくさ直き赤心
を以て皇國の古典どもを能く學びて皇國の貴き所以を悟
るべしことよこそ

● 神典要文

この文の伊勢神宮にて臣民の朝夕に神を頼づき拜むとに稱へまめむために廣く古典よりぬき撰ばれたる物なり
今茲お載せて古へ典を學ぶ人のあるべとはなぬ
古事記曰天地初發之時於高天原成神名天之御中主神次高御產巢日神
次神產巢日神此三柱神者並獨神成坐而隱身也

又曰天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣
流之國賜天沼矛而依賜也故二柱神立天浮橋而指下其沼矛以畫者
許袁呂許袁呂通畫鳴而引上時自其矛末垂落之鹽累積成嶋是淤能基呂
嶋於其嶋天隆坐而立天之御柱見立八尋殿
又曰天照大御神詔然者汝心之清明何以知於是速須佐之男命答曰各字

氣比而生子故爾各中置天安河而宇氣布時天照大御神先乞度建速須佐
 之男命所佩十季劍打折三段而奴那登母由良爾振天之眞名井而佐
 賀美爾迦美而於吹乘氣吹之狹霧所成神御名多紀理毘賣命亦御名謂與
 津嶋比賣命次市寸嶋命亦御名謂狹依毘賣命次多岐都比賣命速須佐之
 男命乞度天照大御神所懸左御美豆良八尺勾葱之五百津之美須麻流珠
 而奴那登母由良爾振天之眞名井而佐賀美迦美而於吹乘氣吹之
 狹霧所成神御名正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命亦乞度所懸右御美豆良
 之珠而佐賀美迦美而於吹乘氣吹之狹霧所成神御名天之菩卑能命亦
 乞度所懸御鬘之珠而佐賀美迦美而於吹乘氣吹之狹霧所成神御名天津
 日子根命又乞度所懸左御手之珠而佐賀美迦美而於吹乘氣吹之狹霧
 所成神御名活津日子根命亦乞度所懸右御手之珠而佐賀美迦美而於
 吹乘氣吹之狹霧所成神御名熊野久須毘命於是天照大御神告速須佐之
 男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自君子也先所生之三柱女
 子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也
 日本書紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不

生天下之主者歟於是共生日神號大日靈貴此子光華明彩照徹於六合之
 內故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異之兒不宜久留此國自當早送
 于天而授以天上之事
 又曰天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾
 可與同床共殿以爲齋鏡
 又曰天照大神乃賜天津彦々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三
 種寶物又以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命瓊女上祖天照女命鏡作
 上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五
 百秋之瑞穗國是吾子孫可玉之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆
 當與天壤無窮者矣
 祚年祭祝詞曰伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久皇大御神能見齋志坐
 四方國者天能壁立極國能退立限青雲能霞極白雲能墜坐向伏限青海原
 者棹楫不干舟楫能至留極大海爾舟滿都々氣且自陸往道者荷緒結堅且
 磐根木根履佐久彌氏馬爪能至留限長道無間久立都々氣且狹國廣久峻
 國者平久遠國者八十綱打掛且引寄如事皇大御神能寄奉波荷前者皇大

御神能大前如横山打積置豆殘波平聞看又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐常磐齋奉茂御世幸用奉故皇吾陸神漏岐神漏彌命登宇事物類根衝拔皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱詳竟奉登久宜

古語拾遺曰仰從皇天二祖之詔建樹神籬所謂高皇產神神皇產靈魂留產靈生產靈足產靈大宮賣神事代主神御膳神栴磐間戸神登磐間戸神生嶋坐摩日臣命師來目部衛護宮門掌其開闔鏡速日命師内物部造備矛盾其物既備天富命率諸齋部探天璽鏡劍奉安正殿并懸瓊玉陳其幣物殿祭祝詞次祭宮門然後物部乃立矛盾大伴來目建伏開門令朝四方之國以觀天位之貴上

又曰至于磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更令齋部氏率石凝姥神奇天目一神奇二氏更鑄鏡造劍以爲護御璽是今踐祚之日所獻神璽鏡劍也仍就於倭笠縫邑殊立磯城神籬奉遷天照大神及草薙劍令皇女豐鍬入姬命奉齋焉

又曰天照大神者惟祖惟宗尊無二自餘諸神者乃子乃臣孰能敢抗我が國にて歴史を作り初は卅三代推古天皇の二十八年

に厩戸皇子蘇我馬子と共に天皇記國記臣連伴造百八十部及び公民等の本記を撰りれいとあるよれあり然れども是等の書は蘇我氏比亂の時大かたやけ亡せたと今舊事紀といふものを此の書なりと中よは眞の舊事紀の残りしものと見ゆるもあれどかく全備の書ありあらずこの後天武天皇の十年又川島皇子忍壁皇子とよ詔ありて帝紀及び上古の諸事を記定せしめられま事も見へたれどこれ又全く成らざりしとればしくて別に行はれしを聞かず元明天皇は和銅四年に至りて太朝臣安麻呂に勅して國史を撰はまめらるこれ上の諸書乃全からざりしが故あるべし今こゝに披出でたる古事記の即ちこの書ありこの書は上天地開闢ありさまより下推古天皇は御代まで三卷とせられたり其事柄とあるすふ漢さまれ文を以てせば其意を失ふ恐れあり皇國は語を以てせば冗長と渉る憂ありとて編者大に困まみ遂に和漢混合の文牀を以てもれせられり

これ後元正天皇の養老四年五月、舍人親王日本紀三十卷系圖一卷を撰み給ふ。これこゝに引き移けたる日本紀よて其文は全く漢文に擬せられしかば其意義を失ひしもれなしとせす。これ後世の歴史家が古事記を先よみて日本紀を後にする所以なりされどこの二部は我が國に現存せる歴史中よて最もふるく最も尊ぶる書なり。古語拾遺は平城天皇大同三年二月に忌部宿禰廣成が古道のすたれて齋部家れ衰へたるをうれたみ歎きて上奏せたる表文なり。平田翁の言に古語拾遺はまこと古語拾遺おして天祝詞古事記日本紀に遺り漏れたる古語の是れ此書に記せ傳へられずば神代の故實の如何解釋べきとればゆるやごとなき事どもを拾ひ載られたる廣成宿禰の功の高く貴きことい更に云はず。此書を召問はれざるに幸得たりとして時の勢に恐ることなく年久お著へたる憤を述へ古道の頽廢れんとするを、持直し古に復されんとする志、全書を貫き故實の源よ達

へる事どもを數へて奏されたる十一條は神に皇に國に忠なる志氣の深切に著明く比類なきこと千歳の後よ此を讀む人をして慷慨よ堪へず古學の見識を磨に立し規矩とせしむる説どもおあなりける。とも漢人の言に諸葛亮か出師の表を見て涙を落さるは其人必ず不忠の人ならんと云へり。余か常言よ廣成宿禰の古語拾遺を見て泣き慨たみ古道を明らかんと思ふ志の興起らざる人は道々しげよ物言ふとも神恩國恩を思はざる空氣學の人とや言はましと云ふに似たる言なりけり。とも言ひれたり皇國の物學ひせむ人はいづれも讀みて心の種とすべき書籍にざりける

神祇令第六 天神曰神 凡貳拾條

我が帝國の神の創造し給ひし國おして其君は神の正統に座まし其民は神の末裔なりかるが故に古來神祇官を諸官の上お置き天下大小の神祇を尊奉せ給ふ。准后源親房卿に撰び給ひし職原抄よ

神祇官以當官置諸官之上是神國之風儀重天神地祇故也云々とか
く崇め尊み給ふが故ふ又其法令も全備えて神國は神國たる所以
の名ふ負かず然るも春去り秋來り年遷り代替りて其法令も名に
みにあり果て今より往事を回想すれば實に憤然と一髮冠を指ま
又慄然とまて寒臙に徹するもの無死にまも有らず夫れ尺蠖は屈
するの伸びんと欲すればありと實に然り我が皇道地も落ちて土
の如きもれ殆ど千年漸く近世に至りて荷田は大人賀茂は大人本
居の大人平田の大人等非凡の卓識を以て古道の復興を計り神を
敬ひ邪道を排去給ひてより大ひに其光を發したり此時に當りて
益々大道を振起去以て神明を尊奉するの法規を明徹せらるる神
國をして其名實を全からしめざる可らず今こゝも大寶令中より
其神祇に關する法令を披擲して讀者の心中に藏めしむとす

凡天神地祇者神祇官皆依常典祭之 謂天神者伊勢
山城鳴住吉出

雲國造齋神等類是也地祇者大神大倭高木鴨出雲
大汝神等類是也常典者此令所載祭祀事條是也
仲春祈年祭 謂祈禱也欲令歲不凋謝故曰祈年
季春鎮花祭 謂大神狹井二祭也其在春飛散之時疫
花鎮 神分散而行瀉爲其鎮遇必有此祭故曰疫

孟夏神衣祭 謂伊勢神宮祭也此神限部等齋
也此神限部等齋戒此神限部等齋戒此神限部等齋
引神調糸織作神衣又麻績連等績麻以織敷和衣以
供神明故曰神衣三枝祭 謂率川社
枝花飭酒樽祭也故曰三枝也
大忌祭 謂廣瀨龍田二
變成甘水浸潤苗稼得
其全稔故有此祭之
風神祭 謂亦廣瀨龍田
風不吹稼穡滋登故有
此祭凡讀此四祭者先
讀神衣其次三枝其次
大忌其次風神即與公
式令連署義同以下
諸祭並准此例也

季夏月次祭

謂於神祇官祭

與祈年祭同即如

庶人宅神祭也

道饗祭謂卜部等

隅道上而祭之言

欲令鬼魅自外來

者不敢入京師故

預迎於道而饗退

孟秋大忌祭

謂與孟

季秋神衣祭

謂與孟

仲冬上卯相嘗祭

謂與孟

倭住吉大神穴師

恩智意富為木鴨

紀伊國日前神等

類是也神主各受

鎮火祭 謂在宮城四方
火而祭為防火
災故曰鎮火

風神祭

神嘗祭 謂神衣祭日
便即祭之

下卯大嘗祭 謂若有三
卯為祭日不
更待下卯也

官幣帛

而祭 實日鎮魂祭

季冬月次祭

道饗祭

鎮火祭

前件諸祭供神調度及禮儀齋日皆依別式其

祈年月次祭者百官集神祇官中臣宣祝詞宣

者布也祝者贊辭也言以告神 忌部班幣帛班

祝詞宜聞百官故曰宣祝詞 忌部班幣帛班

猶願其中臣忌部者當 司及諸司中取用之

凡天皇即位惣祭天神地祇下 謂即位之後仲冬乃祭

一年國司散齋一月 謂仲冬之月 致齋三日 謂自其

行事是也 散齋一月 謂自仲冬之月 致齋三日 謂自其

辰日以後即為散齋故下 條 其大幣者三月之內令

去致齋前後兼為散齋也 修理訖謂大幣者供神幣物各有色目金水桶金銀

修理訖謂大幣者供神幣物各有色目金水桶金銀

柱奉伊勢神宮楯戈奉住吉神之類是也三

柱奉伊勢神宮楯戈奉住吉神之類是也三

月之內者唯據月言不以日計即始自九月終十一月也修理者此言新造也凡散齋之內諸司理事如舊不得吊喪同病親喪病者不在預食亦不列刑殺不決爵罪一人不作音樂祭之限也食亦不列刑殺不決爵罪一人不作音樂歌舞之類也竹不預穢惡之事謂穢惡者不淨之唯祭祀事得行自餘悉斷其致齋前後兼為散齋凡一月齋為大祀謂上條云散齋一月即此條稱齋齋其致齋者皆三日齋為中祀一日齋為小祀在散齋限內也謂天皇即位謂之中臣奏天神之壽詞凡踐祀之日踐祚位也福也中臣奏天神之壽詞謂以神代之古事忌部上神聖之鏡劍謂靈者信也為萬壽之寶詞也鏡劍稱靈以信此即靈也凡大嘗者每世一年國司行事以外每年所司行事

謂所司者在京諸司預祭事者也凡祭祀所司預申官者謂所司者神祇官也預申官者即一日齋亦須預申之官散齋日平旦願告諸司者謂所司者神祇官也預申官者即一日齋亦須預申之官凡供祭祀祭帛飲食及菓實之屬所司長官親自檢校必令精細勿使穢雜凡常祀之外須向諸社供幣帛者皆取五位以上食謂凡卜者必先墨畫龜然後者充唯伊勢神宮常祀亦同凡六月十一月晦日大祀除不祥也者中臣上御祓麻東西文部謂東漢文直上祓刀讀祓詞謂文部漢也訖百官男女娶集祓所中臣宣祓詞卜部為解除凡諸國須大祀者每郡出刀一皮一張錄一口及雜物等戶別麻一條其國造出馬一疋凡神戶調庸及田祖者並充造神宮及供神調度上其

税者一准義倉謂租稅者並是田賦唯新輸日租經皆國司檢校申送所司

この大寶令ある者は第四十二代文武天皇に御代に制定し給ひし者なれども實は其全備するに至る迄は其間殆ど六朝四十餘年に直れりと云ふも可あり今その所以を左に述べむははじめ第三十八代天智天皇の即位し給ふやその元年に内臣中臣鎌足等も勅して律令を撰べしめ給ふこれ近江令にて其後天武天皇の時よこれを刊修せしめ持統天皇の時諸司に班ち給ふ然れども未だ完備せざる者に非れば文武天皇の四年更に刑部親王藤原不比等栗田真人毛野古麻呂等も勅して天武天皇の律令を標準として更に律令を撰はせり給ふ明年即ち大寶元年に至りて成る之を大寶律令と云ふ其律六卷令十一卷なり後元正天皇養老二年再び不比等も命じて更に之を修飾せしめらる律と令と各十卷となるされども格別の差はなまとして現存せる所の令を大寶令と稱せり今こゝに出せ

るは令義解よてそは第五十三代淳和天皇長年中お清原と野等十有二人も勅して令文に注解附せしめたる者なり因よ今令の目次をば記す(但し。の印あるは)

- 一、官位
- 二、職田
- 三、神祇
- 四、僧尼
- 五、戸
- 六、田
- 七、賦役
- 八、學
- 九、選叙
- 十、繼嗣
- 十一、考課
- 十二、祿
- 十三、宮衛
- 十四、軍防
- 十五、儀制
- 十六、衣服
- 十七、營繕
- 十八、公式
- 十九、倉庫
- 廿、厩牧
- 廿一、醫疾
- 廿二、假葬
- 廿三、喪葬
- 廿四、關市
- 廿五、捕亡
- 廿六、獄
- 廿七、雜

神代御系圖

こゝに謹じて記さ奉る神系圖は平田大人の物いたまひし書よりて神典を繕く人のしるべとはなしぬ

天之御中主神
 高皇產靈神 亦名高木神亦云
 所謂神靈 亦云神產巢日御祖命
 神皇產靈神 亦云神魂大刀自神

所謂神魯美命是也
此三柱神者並獨神成坐而隱御身矣

宇麻志阿志阿備比古遲神
天之底立神亦云天之常立神亦云天之立命亦名天神
此二柱神亦獨神成坐而隱御身矣上件五柱之

國之神者別天神
豐野豐野神亦云豐國主神亦云豐國野神亦云葉木國野神亦云豐野神

此二柱神亦獨神成坐而隱御身矣上件二柱之
神者魯美都國之神也
宇比地通神亦云沙土根神

須比智通神
活微神
角微神

大斗乃辨神
大斗乃辨神亦云大富道神

伊邪那美神
伊邪那美神亦云青櫛城根神亦云吾忌櫛城神

伊邪岐神
伊邪岐神亦云青櫛城根神亦云吾忌櫛城神

伊邪美神
伊邪美神亦云青櫛城根神亦云吾忌櫛城神

上件自國之底立神一至伊邪那美神合而稱神代
七代上二柱者各合二神而云一代次雙坐

賢木嚴之御魂天疎向津比賣命
亦云天照大御神
亦名大日靈貴命亦云豐命

亦名大日靈貴命亦云豐命
亦云天照大御神
亦名大日靈貴命亦云豐命

亦名大日靈貴命亦云豐命
亦云天照大御神
亦名大日靈貴命亦云豐命

亦名大日靈貴命亦云豐命
亦云天照大御神
亦名大日靈貴命亦云豐命

亦名大日靈貴命亦云豐命
亦云天照大御神
亦名大日靈貴命亦云豐命

璣根命亦云天津亦云天津彦國光彦火璣璣命
亦云天之件火火置瀨命亦云天御母同天火明命

天津日高日子穗穗出見命亦云火遠理命

御母者木花之佐久夜毘賣命也

天津日高日子波瀲武鸕草葺不合命

御母者海神之女豐玉毘賣命也

神倭磐余昆古命

亦云神倭磐余彦火火出見命亦名若御毛沼命

亦名豐御亦名狹野命此天皇後御陰稱神武天皇

也毛沼命

今こゝに神倭磐余昆古命は神代御系圖中ふ書き加へたるは亦
の御名多くまた神代も人皇も別々變りなく天津日嗣の嗣々實
に神代の後次うけつゝ給ひまを明らかあせむためかくは爲し
以下天皇御系圖中よも又この命を擧げたり讀者其煩をどがめ
給ふ勿れ

●天皇御系統及年代一覽

御代數	御諡號	御名	御父	御母	都	御壽	紀元	年	号
第一代	神武	神倭磐余彦尊	神武	玉依姫	大和 橿原	二七	從一		
第二代	綏靖	神淳名川耳尊	神武	天照	大和 葛城	八	八〇		
第三代	安寧	磯城津彥玉手見尊	神武	天照	大和 片鹽	三三	一一三		
第四代	懿德	大日本彥耜友尊	神武	天照	大和 輕	三七	一一三		
第五代	孝昭	觀松彥香殖稻尊	神武	天照	大和 按上	三三	一一三		
第六代	孝安	日本彥國押入尊	神武	天照	大和 室	三三	一一三		
第七代	孝靈	大日本根子尊	神武	天照	大和 黑田	三三	一一三		
第八代	孝元	大日本根子尊	神武	天照	大和 輕	三三	一一三		
第九代	開化	大日本根子尊	神武	天照	大和 春日	三三	一一三		
第十代	崇神	大日本根子尊	神武	天照	大和 磯城	三三	一一三		
第十一代	垂仁	大日本根子尊	神武	天照	大和 橿原	三三	一一三		
第十二代	景行	大日本根子尊	神武	天照	大和 橿原	三三	一一三		

神代卷 三十五 玉神台藏版

第十三代	成務	足彥	尊	八坂入	天	皇	近江	志賀	一〇八	七九一
第十四代	仲哀	足彥	尊	日本	武	尊	越前	角鹿	六〇	八五〇
第十五代	應神	譽田	別尊	氣長	足	尊	大和	磐余	一〇〇	八六一
第十六代	仁德	大鷦	鷦尊	仲哀	天	尊	大和	輕島	一一一	九三〇
第十七代	履中	去來	穗別尊	應神	天	尊	攝政	難波	一一一	九三〇
第十八代	反正	正瑞	誓別尊	仁德	天	尊	大和	磐余	七七	一〇六〇
第十九代	允恭	稚子	宿稱尊	誓之	天	尊	河內	丹比	六〇	一〇六六
第二十代	安康	穴穗	尊	允恭	天	尊	大和	遠飛鳥	六〇	一〇七二
第二十一代	雄略	大泊瀨	若武尊	忍坂	大	尊	大和	泊瀨	六三	一一一七
第二十二代	清寧	白髮	武廣	忍坂	大	尊	大和	磐余	六三	一一一七
第二十三代	顯宗	弘計	尊	市邊	押	尊	大和	近飛鳥	三三	一一一四
第二十四代	仁賢	億計	尊	市邊	押	尊	大和	石上	一一	一一一八
第二十五代	武烈	小泊瀨	稚鷦鷯	素白	天	尊	大和	泊瀨	五七	一一一八

第廿六代	繼體	男大	迹尊	振主	人	王	山城	磐余	八二	一一一七
第廿七代	安閑	廣國	押武	繼體	子	皇	大和	白金橋	七〇	一一一四
第廿八代	宣化	武小	廣國	繼體	子	皇	大和	檜隈	七三	一一一六
第廿九代	欽明	天國	押開	繼體	子	皇	大和	磯城	六三	一一〇〇
第三十代	敏達	淳中	倉太	手白	天	皇	大和	磯田	三三	一一三三
第卅一代	用明	橘	豐日尊	石欽	天	皇	大和	磯田	四八	一一三三
第卅二代	崇峻	泊瀨	部尊	欽明	天	皇	大和	磐余	六九	一一二四
第卅三代	女推古	豐御	炊屋	欽明	天	皇	大和	豐浦	七三	一一二四
第卅四代	舒明	息長	足日	欽明	天	皇	大和	豐浦	七三	一一二四
第卅五代	女皇	極天	重日	欽明	天	皇	大和	飛鳥	六八	一一二八
第卅六代	孝德	天	高	欽明	天	皇	大和	飛鳥	六八	一一三〇
第卅七代	女齊明	皇	極	欽明	天	皇	大和	飛鳥	六八	一一三〇
第卅八代	天智	天命	開	欽明	天	皇	大和	飛鳥	六八	一一三〇
第卅九代	弘文	大友	皇	欽明	天	皇	大和	飛鳥	六八	一一三〇

神皇正統記 卷之三十三 金台廣尾

第四十代	天武	天津中原瀛真人尊	舒明天皇	大和飛鳥	一、三三三	朱雀一、
第四十一代	女持統	高天原廣野姬尊	天智天皇	大和藤原	一、三三六	朱雀二、
第四十二代	文武	天之真宗豐祖父母尊	天智天皇	大和藤原	一、三三七	朱雀三、
第四十三代	女元明	日本根子天津御天	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀四、
第四十四代	女元正	日本根子高草	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀五、
第四十五代	聖武	天豐國足姬命	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀六、
第四十六代	女孝謙	阿登	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀七、
第四十七代	淳仁	大炊王	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀八、
第四十八代	女稱德	孝謙天皇重祚	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀九、
第四十九代	光仁	天宗高祖尊	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十、
第五十代	桓武	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十一、
第五十一代	平城	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十二、
第五十二代	藤原	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十三、
第五十三代	淳和	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十四、

第五十四代	仁明日	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十五、
第五十五代	文德	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十六、
第五十六代	清和	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十七、
第五十七代	陽成	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十八、
第五十八代	光孝	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀十九、
第五十九代	宇多	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十、
第六十代	醍醐	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十一、
第六十一代	朱雀	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十二、
第六十二代	村上	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十三、
第六十三代	冷泉	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十四、
第六十四代	圓融	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十五、
第六十五代	花山	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十六、
第六十六代	一條	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十七、
第六十七代	三條	日本根子皇光	天智天皇	山城奈良	一、三三七	朱雀二十八、

第六十八代	後一條敦	成	藤原	彰	天皇	全	二六	一、六七六	寛仁四、治安二、
第六十九代	後朱雀敦	良	藤原	彰	天皇	全	二二	一、六九六	萬壽四、長元九、
第七十代	後冷泉親	仁	藤原	天	皇	全	三七	一、六九七	長曆三、長久四、
第七十一代	後三條尊	仁	藤原	天	皇	全	四四	一、七〇六	寛徳二、
第七十二代	白河貞	仁	藤原	天	皇	全	四〇	一、七〇八	永承七、天喜五、
第七十三代	堀河善	仁	藤原	天	皇	全	三三	一、七〇八	康平七、治暦四、
第七十四代	鳥羽宗	仁	藤原	天	皇	全	四〇	一、七三三	延久四、
第七十五代	崇徳顯	仁	藤原	天	皇	全	三七	一、七三三	延久一、承保三、承暦
第七十六代	近衛體	仁	藤原	天	皇	全	一五	一、七四六	四、永保三、應徳三、
第七十七代	後白河雅	仁	藤原	天	皇	全	二九	一、七四七	四、永保三、應徳三、
第七十八代	二條守	仁	藤原	天	皇	全	二二	一、七六七	天仁二、天永三、永久
第七十九代	六條順	仁	藤原	天	皇	全	二二	一、七六七	天仁二、天永三、永久
第八十代	高倉憲	仁	藤原	天	皇	全	二二	一、七六七	天仁二、天永三、永久
第八十一代	安德言	仁	藤原	天	皇	全	二二	一、七六七	天仁二、天永三、永久

神武天皇都を倭の橿原と定め給ひより御代々々の天皇各々其都を移させ給ひ近くハ攝津近江より遠くハ長門と移し給へるものあり垣武天皇の朝ハ和氣清麻呂の建議をいれ給ひて遂お都を山城國葛野郡に移し給ふ實ハ延暦三年あり之次平安城と稱す今の京都これあり山河襟帯自然に城をさし氣朗らかに水清く風光明輝實に日本無双の名地たり之より後曆朝こゝに都し給ひ南朝の天皇は他に移り今上天皇の東京お移らせ給ふまでは移動せたまふことなかりき故にこれより下ふ都したまへり去所を記るさす

夫れ我國文武の大權は世々天皇に統べ給ふ所なるを以て不歸の賊不順の臣あれば天皇躬から征またまふ又時移りてハ皇后皇太子の代らせ給ふことわれども決してこれを臣下に委ね給はざりき然るを中世お至りて世の様の移り換りて兵馬ハ大權は終に武家に歸え隨て世の亂と共に政治の大權も其手に落ちて恐くも天皇はたゞ其名のみとなりき

後圓融緒仁	後光嚴	應安二、永和四、 康曆二、永德二、	二、〇三二	足利義滿 二七、
後小松幹仁	後圓融融	五、六、永德一、至德三、嘉慶二、 康應一、明德三、	二、〇四二 二、〇四三 二、〇五二	足利義滿 二七、

南 北 一 統

第九十九代 後小松幹仁	後小松	六五	明德一、應永十九、	二、〇五三	足利義滿 持 三十四、
第一百代 稱光實仁	後小松實子	二八	應永十五、正長一、	二、〇七二	足利義滿 三十三、
第一百一代 後花園彦仁	貞成親王	五六	永享十二、嘉吉三、文安五、寶徳三、 享徳三、康正二、長祿三、寛正五、	二、〇八八	足利義勝 四、
第一百二代 後土成仁	源花園	三七	文正一、應仁二、文明八、長 享二、延徳三、明德九、	二、一〇四	足利義政 二十五、
第一百三代 後柏原勝仁	後土御門	六三	文龜三、永正十七、大永六、	二、一六〇	足利義尚 七、足利義植 四、
第一百四代 後奈良知仁	後柏原	六二	大永一、享祿四、天文廿三、 弘治三、	二、一八六	足利義澄 七、足利義植 四、
第一百五代 正親町方仁	後奈良	七五	永祿十二、元龜三、天正十四	二、二一七	足利義輝 二、
第一百六代 後陽成周仁	誠仁親王	四七	天正五、文祿四、慶長十六、	二、二四六	足利義昭 三、
第一百七代 後水尾政仁	後陽成	八五	慶長三、元和九、寛永六、	二、二七一	織田信長 豊臣秀吉
第一百八代 女明正興子	後水尾	七四	寛永十四、	二、二八九	徳川家康 三、
第一百九代 後光明綱仁	後水尾	二二	正保三、慶安四、承應三、	二、三〇三	徳川家光 二八、

第一百十代 後西院良仁	後水尾	四九	明暦三、萬治三、寛文二、	二、三二四	徳川家綱 三、
第一百十一代 靈元謙仁	後水尾	七九	寛文十、延寶八、 天和三、貞享四、	二、三三三	徳川綱吉 三、
第一百十二代 東山朝仁	靈元	三五	元祿十六、寶永六、	二、三四七	徳川綱吉 三、
第一百十三代 中御門慶仁	東山	三七	寶永一、正徳五、享保二十、	二、三六九	徳川家宣 四、家繼 四、
第一百十四代 櫻町昭仁	中御門	三三	元文五、寛保三、延享四、	二、三九五	徳川吉宗 三、
第一百十五代 桃園遐仁	櫻町	二二	寛延三、寶曆十二、	二、四〇七	徳川家重 十六、
第一百十六代 女帝後櫻町智子	櫻町	一六	寶曆一、明和七、	二、四二二	徳川家重 十六、
第一百十七代 後桃園英仁	青綺門院	七四	寶曆一、明和七、	二、四二二	徳川家重 十六、
第一百十八代 光格兼仁	桃園	二二	明和一、安永八、	二、四三〇	徳川家治 二七、
第一百十九代 仁孝惠仁	自在王院宮	一〇	安永一、天明八、寛政十二、 享和三、文化十四、	二、四三九	徳川家治 二七、
第一百二十代 孝明統仁	成菩提院宮	七〇	安永一、天明八、寛政十二、 享和三、文化十四、	二、四四〇	徳川家齊 五十二、
第一百廿一代 今上陸仁	光原	四七	文政十二、天保十四、弘化三、 弘化二、嘉永六、安政六、萬延一、 文久三、元治一、慶應三、	二、四七七 二、四七七 二、五〇六 二、五〇六 二、五二六 二、五二七	徳川家慶 十七、 徳川家定 六、 徳川家茂 九、徳川慶喜 三、 王政復古

表中紀元は御即位の始めより御讓位のときまでを記しより故に必ず
まも年號と符号せず而去て今上天皇の御壽御在位間の年數及び年號

紀元あは明治二十五年を以て寛す之を以て限とするも非ず又御都
の明治元年十月今の東京に御遷幸あらせられたり上表將軍人名の下
に數字を記るすは在職年數なり

凡そ御國のもの學びせむ人のまづ曆朝に帝號を暗記するを第
一とすべし

さて天皇の御諡号は持統天皇崩御の御時に奉_レ誅_二太上天皇_一諡曰
倭根子天之廣野日女尊とあるこれ本朝御諡號を稱し給ふ始め
あり然れども神武天皇綏靖天皇と漢風の御諡號は釋日本紀に
私記云師說神武等諡名者淡海御船奉_レ勅撰_二也_一とあり淡海御船と
云へるに桓武天皇延暦四年七月に年六十四歳にて卒せられた
り此人の性聰敏慧兼_二文史_一と國史に記され大學頭文章博士な
らむ任せられたる人なれば如何も此人を命せられ撰ばしめ
給へるならん古事記傳にも記るされたりさてかく淡海御船
の撰び給ひて桓武天皇以前の御諡は皆そは御一代の御事蹟に

依て聖徳の要點を擧げ稱せ給ひたる者なり然れども其後お至
りては平城磯峨あはの如く御住居あらせられし地名次以て稱
し奉り其他の多く其離宮の名に依て某院と申し上げたり其中
にも又好字を以て稱せしは仁明文徳光孝崇徳安徳順徳なほの
御名これなり而して時よ或は山陵を以て稱徳天皇を高野天皇
光仁天皇を田原天皇桓武天皇を柏原天皇仁明天皇を深草天皇
と稱せしことありしが今はしか稱さず近來光格天皇よと再び
仁孝孝明等の風に御諡を好字を以て美稱せらるゝに至れり

●御聖勅

源頼朝幕府を鎌倉よ開きしより天下の政權悉く將軍に歸し足
利織田豊臣を経て徳川慶喜の政權を奉還するに至るまで七百
餘年の間天皇は空く手を高閣に拱し給ひ臣民は將軍あるを
知して終よかしこくも又天皇の坐々を知らざるの有様なとし
が今上天皇一たび天下を統一給ふ及び大に改革を行ひ

外各國に公使を遣えて萬國と交を結び内公議を貴び輿論を重
ひし終ふ明治廿三年國會を開き給ふに至る其間の進歩實に活
目しで見ざるべきものあり今あゝよゝ陛下の聖勅を記る一奉る
以て英慮の忝きを感佩すべきことにこそ

○明治元年三月の御誓文

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
 - 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
 - 一 官武一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マシメンヲ要ス
 - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
 - 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

○億兆安撫國威宣布の宸翰

朕幼弱ヲ以テ卒ニ大統ヲ紹キ爾來何ヲ以テ萬國ニ對立シ列祖ニ事ヘ奉ラソヤト朝夕恐懼ニ堪ヘサルナリ竊ニ考ルニ中葉朝政衰テヨリ武家權ヲ專ラニシ表ニハ朝廷ヲ推尊シテ實ハ敬シテ是ヲ遠ケ億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果テ其ガ爲ニ今日朝廷ノ尊重ハ古ニ倍セシガ

如シニテ朝威ハ倍衰ヘ上下相離ル、コト霄壤ノ如シ斯ル形勢ニテ何
ヲ以テ天下ニ君臨センヤ今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其
所ヲ得サル時ハ皆朕ガ罪ナレバ今日ノ事朕自ラ身骨ヲ勞シ心志ヲ苦
メ艱難ノ先ニ立チ古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ
始テ天職ヲ奉ジテ億兆ノ君タル所ニ背カザルベシ往昔列祖萬機ヲ親
ラシ不臣ノ者アレバ自ラ將トシテ之ヲ征シ給ヒ朝廷總テ簡易ニシテ
此ノ如ク尊重ナラザル故君臣相親ミテ上下相愛シ德澤天下ニ洽ク國
威海外ニ輝キシナリ然ルニ近代宇内大ニ開ケ各國四方ニ相雄飛スル
ノ時ニ當リ獨リ我國ノミ世界ノ形勢ニ疎ク舊習ヲ固守シ一新ノ効ヲ
ハカラズ朕徒ラニ九重ノ中ニ安居シ一日ノ安キヲ偷ミ百年ノ憂ヲ忘
ル時ハ遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦メ
ソコトヲ恐ル故ニ朕コ、ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ列祖ノ御偉業ヲ繼
述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ズ親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニ萬
里ノ波濤ヲ開拓シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富強ノ安キニ置ンコト
ヲ欲ス汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ尊重ノミヲ朝廷ノ事トナシ神州ノ危

急ヲ知ラズ朕一度足ヲ舉レバ非常ニ驚キ種々ノ疑惑ヲ生ヨ萬口紛紜
トシテ朕ガ志ヲナサソラシムル時ハ是レ朕ヲシテ君タル道ヲ失ハシ
ムルノミナラズ從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムルナリ汝億兆能々朕カ志
ヲ體認シ相率テ見ヲ去リ公議ヲ探リ朕ガ業ヲ助テ神州ヲ保全シ列
祖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメハ生前ノ幸福ナラン

○明治元年七月江戸を以て東京と爲すの詔

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地
宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ因テ江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ
海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ

○明治元年九月年號を改め一世一元の制を立るの詔

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德
幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海内億兆更始一新其
改慶應四年爲明治元年自今以後革易舊制一世一元以爲永式主者施行

○明治元年十月直言を百官有司に求むる詔

皇國一體東西同視朕幸東府親聽内外之政汝百官有司同心戮力以翼鴻

業凡事之得失可否宜正議直諫啓沃朕心

○明治二年二月公議所を開き制度律令を議せしむるの詔

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國安治安ノ大基ヲ建
ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ頼ム所以ニシテ輕々シク定ムベ
カラズ今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜シク速ニ開局シ局中禮法
ヲ貴ビ協和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ歸シ專ラ
皇祖ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜キニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ順次
ニ細議シ以テ聞セヨ朕親ク之ヲ裁決セン

○明治二年四月二十日の聖詔

朕嚮々汝百官群臣ト五事ヲ揭ケ 天地神明ニ質シ綱紀ヲ皇張シ億兆
ヲ綏安スルヲ誓フ然ルニ兵馬倉卒未ダ其績ヲ底サズ朕夙夜上ハ以テ
神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ慚ヅ今ヤ乃チ親臨汝百官群臣ヲ朝會シ大
ニ施設ノ方法ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニアリ誠ニ宜ク腹心ヲ披
キ肺腑ヲ表シ可否ヲ獻替スベシ朕將ニ勵精竭力大ニ經始スル所アラ
ントス汝百官群臣其最哉

○明治二年五月三等以上公撰の聖詔

朕惟ニ治亂安危ノ本ハ任用其人ヲ得ルト得ザルトニアリ故ニ今敬テ
列祖ノ靈ニ告ケ公撰ノ法ヲ設ケ更ニ輔相議定參與ヲ登庸ス神靈降鑑
過ルナカラシムコトヲ期ス汝衆其レ斯意ヲ體セヨ

○明治四年七月各藩知事ヲ御前ニ召シテ下シ給ヒシ勅諭

朕惟フニ更始ノ時ニ際シ内以テ億兆ヲ保安シ外以テ萬國ト對峙セン
ト欲セバ宜ク名實相副ヒ政令一ニ歸セシムベシ朕曩ニ諸蕃版籍奉還
ノ議ヲ聽納シ斯ニ藩知事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム然ルニ數百年來因
襲ノ久キ或ハ其名アリテ其實舉ラザルモノアリ何ヲ以テ億兆ヲ保全
シ萬國ト對峙スルヲ得ンヤ朕深ク之ヲ慨ス仍テ今更ニ藩ヲ廢シ縣ト
ナス是務メテ冗ヲ去リ簡ニ就キ有名無實ノ弊ヲ除キ政令多岐ノ憂ナ
カラシメントス汝群臣其レ朕力意ヲ體セヨ

○明治五年十一月全國募兵の詔

朕惟ミルニ古昔群縣ノ制全國ノ丁壯ヲ募リ軍國ヲ設ケ以テ國家ヲ保
護ス固ヨリ兵農ノ分ナシ中世以降兵權武門ニ歸シ兵農始テ分レ遂ニ

封建ノ治ヲ成ス戊辰ノ一新ハ實ニ千有餘年ノ一大變革ナリ此際ニ當
 リ海陸兵制モ亦時ニ從ヒ宜ヲ制セザルベカラズ今本邦古昔ノ制ニ基
 キ海外各國ノ式ヲ斟酌シ全國募兵ノ法ヲ設ケ國家保護ノ基ヲ立ント
 欲ス汝百官有司厚ク朕ガ意ヲ體シ普ク之ヲ全國ニ告諭セヨ

○明治六年七月地租改正の詔

朕惟フニ租稅ハ國ノ大事人民休戚ノ係ル所ナリ從前其法一ナラズ寬
 苛輕重率ヲ其平ヲ得ズ仍テ之ヲ改正セント欲シ乃チ所司ノ群議ヲ採
 リ地方官ノ衆論ヲ盡シ更ニ内閣諸臣ト辨論裁定シ之ヲ公平畫一ニ歸
 セシメ地租改正ヲ頒布ス庶幾ハ賦ニ厚薄ノ弊ナク民ニ勞逸ノ偏ナカ
 ラシメヨ主者奉行セヨ

○明治七年三月二日の詔

朕踐祚ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代
 議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開
 キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ジ以テ國家ノ重キヲ擔任スベキノ義務
 アルヲ知ラシメシコトヲ期望ス故ニ先ツ地方長官ヲ召集シ人民ニ代

ヲ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒布ス各員其レ之ヲ遵守セヨ

○明治八年四月立憲政体の聖詔

朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ 神明ニ誓ヒ國ヲ定メ萬
 民保全ノ道ヲ求ム幸ニ 祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リテ以テ今日ノ
 小康ヲ得タリ願ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スベキ者少シト
 セズ朕今誓文ノ意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣メ大
 審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ召集シ以テ民情ヲ通ジ
 公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政体ヲ立テ汝衆庶ト俱ニ其慶ニ頼ント
 欲ス汝衆庶或ハ舊ニ汚ミ故ニ慣ル、コト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲ス
 ニ急ナルコト莫ク其レ能ク朕ガ旨ヲ體シテ翼賛スル所アレ

○明治八年地方官會議を開く天皇親臨し給ふ其詔

茲ニ地方官會議ノ始朕親ラ臨デ汝各官等ニ詔ク朕經國治民ノ易カラ
 ザルヲ思ヒ深ク公論衆議ニ望ムコトアリ今汝各地方ノ重任ヲ先ニシ
 議論異同アルモ要スルニ其歸ヲ一ニシ衆庶ノ爲メニ公益ヲ圖ラバ則
 チ國家無疆ノ幸福ヲ開クノ始メナラン汝各官其レ斯旨ヲ體セヨ

○其翌日復た會議院への詔

朕去年五月ニ於テ始メテ地方官會議ヲ興サントシ既ニ召集ノ期アリ外事方ニ起ルニ會シ己ムヲ得ズ中頃止ム今年再ビ前業ヲ舉ゲ議員悉ク來會ス朕甚ダ之ヲ嘉ス事新創ニ係リ未ダ實踐ノ則アラザルヲ以テ汝議員今奏答スル所ヲ踐ミ相借ニ協力經始シテ創業ノ源ヲ深シ此會議ノ効ヲ収メ他日人民幸福ノ流ヲ長セヨ汝議員其レ之ヲ欽メ

○明治八年七月元老院ヲ開ク聖詔

本日朕愛ニ親臨シテ始メテ本院ヲ開キ爾衆議官ニ詔ク朕前日衆庶ニ告グルニ元老院ヲ設ケテ立法ノ源ヲ廣ムルノ旨ヲ以テシ乃チ爾衆議官ヲ以テ立法ノ官タラシム尙クハ爾等各乃ノ心力ヲ一ニシ乃ノ職任ヲ盡シ允ニ上下ノ幸福ヲ圖ラバ實ニ國家無疆ノ體ナリ欽テ斯意ヲ體シ其レ能ク贊襄セヨ

○明治九年九月憲法ヲ起草セシコトヲ元老院ニ命スル勅書

朕爰ニ我建國ノ體ニ基キ廣ク海外諸國ノ成法ヲ斟酌シ以テ國憲ヲ定メントスソレ宜ク汝等之カ草案ヲ起創シ以テ開セヨ朕將ニ之ヲ撰バ

ントス

○明治十四年十月明治廿三年ヲ期シテ國會ヲ開クノ勅諭

朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣ギ中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ大政ノ統一ヲ總攬シ又夙ニ立憲ノ休政ヲ建テ後世子孫繼グベキノ業ヲ爲サントコトヲ期ス爾ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ十一年ニ府縣會ヲ開カシム此レ皆漸次基ヲ創メ序ニ循テ歩ヲ進ルノ道ニ由ルニ非サルハナシ爾有衆亦朕ガ心ヲ諒トセン

願ルニ立國ノ體國各宜キヲ殊ニス非常ノ事業實ニ輕舉ニ便ナラズ我祖我宗照臨シテ上ニ在リ遺烈ヲ揚ケ洪模ヲ弘メ古今ヲ變通シ斷シテ之ヲ行フ責朕カ躬ニ在リ將ニ明治廿三年ヲ期シ議員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ朕カ初志ヲ成サントス今在廷臣僚ニ命シ假スニ時日ヲ以テシ經營ノ責ニ當ラシム其組織權限ニ至テハ朕親ヲ衷ヲ裁シ時ニ及テ公布スル所アラントス朕惟フニ人心進ムニ偏シラ時會速ナルヲ鼓フ浮言相勵シ竟ニ大計ヲ遺ル是宜ク今ニ諷訓ヲ明徴シ以テ朝野臣民ニ公示スベシ若シ仍ホ故ラニ躁急ヲ爭ヒ事變ヲ煽シ國安ヲ害スル者アラ

バ處スルニ國典ヲ以テスベシ特ニ茲ニ明言シ爾有衆ニ諭ス

○明治十五年一月軍人への勅諭

我國ノ軍隊ハ世々天皇ノ統率シ給フ所ニツアル昔
神武天皇躬ツカラ大伴物部ノ兵トモヲ率キ中國ノマツロハヌモノト
モヲ討チ平ケ給ヒ高御座ニ即カセラレテ天下シロシメシ玉ヒシヨリ
二千五百有餘年ヲ經テ此ノ間世ノ様ノ移リ換ルニ隨ヒテ兵制ノ沿革
モ亦屢ナリキ古ハ天皇躬ツカラ軍隊ヲ率キ玉フ御制ニテ時アリテハ
皇后皇太子ノ代ラセ玉フコトモアリツレト大凡兵權ヲ臣下ニ委テ玉
フコトハナカリキ中世ニ至リテ文武ノ制度皆唐國風ニ倣ハセ玉ヒ六
衛府ヲ置キ左右寮ヲ建テ防人ナトヲ設ケラレシカハ兵制ハ整ヒタレ
トモ打續ケル昇平ニ徃レテ朝廷ノ政務モ漸文弱ニ流レケレバ兵農自
カラニツニ分レ古ノ徵兵ハイツトナク壯兵ノ委ニ變リ遂ニ武士トナ
リ兵馬ノ權ハ一向ニソノ武士トモ棟梁タル者ニ歸シ世ノ亂ト共ニ政
治ノ大權モ其手ニ落チ凡七百年ノ間武家ノ政治トハナリス世ノ様ノ
移リ換リテ斯ナレルハ人カモテ換回スヘキニアラストハ云ヒナガラ

且ハ我國體ニ戻リ且ハ我祖宗ノ御制ニ背キ奉リ淺間シキ次第ナリキ
降リテ弘化嘉永ノ頃ヨリ徳川ノ幕府ソノ政衰ヘ剩外國ノ事トモ起リ
テ其侮ヲ受ケヌヘキ勢ニ迫リケレバ朕ガ皇祖仁孝天皇考孝明天皇甚
シ宸襟ヲ惱シ玉ヒシコソ恭シモ又惶ケレ然ルニ朕幼シシテ天津日嗣
ヲ受ケシ初征夷大將軍ソノ政權ヲ返上シ大名小名其版籍ヲ奉還シ年
ヲ經スシテ海内一統ノ世トナリ古ノ制度ニ復シヌ是文武ノ忠臣良將
アリテ朕ヲ補翼セル功績ナリ歴世祖宗ノ尊ヲ蒼生ヲ憐ミ玉ヒシ御遺
澤ナリト雖併我臣民ノ其心ニ順逆ノ理ヲ辨ヘ大義ノ重キヲ知レルガ
故ニツアレバ此時ニ於テ兵制ヲ更メ我國ノ光ヲ輝サント思ヒ此十五
年ガ程ニ陸海軍ノ制ヲハ今ノ様ニ建定メヌ夫兵馬ノ大權ハ朕カ統フ
ル所ナレバ其司々ヲコソ臣下ニハ任スナレ其綱ハ朕親ラ之ヲ攬リ肯
テ臣下ニ委ヌヘキモノユ非ズ子々孫々ニ至ルマデ篤ク斯旨ヲ傳ヘ天
子ハ文武ノ大權ヲ掌握スルノ義ヲ存シテ再中世以降ノ如キ失體ナカ
ラシメンコトヲ望ムナリ朕ハ汝等軍人ノ大元帥ナルアサレバ朕ハ汝
等ヲ股肱ト頼ミ汝等ハ朕ヲ頭首ト仰キテコソ其親ハ特ニ深カルヘキ

朕ガ國家ヲ保護シテ上天ノ惠ニ應シ祖宗ノ恩ニ報イマイラスルコトヲ得ルモ得ザルモ汝等軍人カ其職ヲ尽スト尽サハルトニ由ルツカシ我國ノ稜威振ハザルトアラバ汝等能ク朕ト其憂ヲ共ニセヨ我武維揚リテ其榮輝サバ朕汝等ト其譽ヲ偕ニスベシ汝等皆其職ヲ守リ朕ト一心トナリテ力ヲ國家ノ保護ニ盡サハ我國ノ蒼生ハ永ク天平ノ福ヲ受ケ我國ノ威烈モ大ニ世界ノ光華トモナリヌベシ朕斯モ深ク汝等軍人ニ望ムナレバ猶訓諭スベキ事コソアレイデヤ之ヲ左ニ述ヘム

一軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ凡ソ生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルベキ況シテ軍人タラン者ハ此心ノ固カラデハ物ノ用ニ立チ得ベシトモ思ハレズ軍人ニシテ報國ノ心堅固ナラザルハ如何程枝莖ニ熟シ學術ニ長スルモ猶偶人ニヒトシカルベシ其隊伍モ整ヒ節制モ正クトモ忠節ヲ存セサル軍隊ハ事ニ臨ミテ烏合ノ衆ニ同シカルベシ抑國家ヲ保護シ國權ヲ維持スルハ兵力ニアレバ兵力ノ消長ハ是レ國運ノ盛衰ナルコトヲ辨ヘ世論ニ惑ハズ政治ニ拘ハラズ只一途ニ已ガ本分ノ忠節ヲ守リ義ハ山嶽ヨリモ重

ク死ハ鴻毛ヨリモ輕シト覺語セヨ其操ヲ破リテ不覺ヲ取リ汚名ヲ受クルナカレ

一軍人ハ禮義ヲ正シクスヘシ凡軍人ニハ上元帥ヨリ下一卒ニ至ルマデ其間ニ官職ノ階級アリテ統屬スルノミナラス同列同級トテモ停年ニ新舊アレハ新任ノ者ハ舊任ノモノニ服従スベキモンノ下級ノモノハ上官ノ命ヲ承ルコト實ハ直ニ朕カ命ヲ承ル義ナリト心得ヨ已カ隸屬スル所ニアラストモ上級ノ者ハ勿論停年ノ已ヨリ舊キモノニ對シテハ總ヘテ敬禮ヲ盡スヘシ又上級ノ者ハ下級ノモノニ向ヒ聊モ輕侮驕傲ノ振舞アルヘカラス公務ノ爲ニ威嚴ヲ主トスル時ハ格別ナレトモ其外ハ務メテ懇ニ取扱ヒ慈愛ヲ專一ト心掛ケ上下一致シテ王事ニ勤勞セヨ若軍人タルモノコシテ禮儀ヲ紊リ上ヲ敬ハズ下ヲ惠マシテ一致ノ和諧ヲ失ヒタルニハ雷ニ軍隊ノ毒海タルノミカハ國家ノ爲メニモユルシ難キ罪人ナルベシ

一軍人ハ武勇ヲ尙フヘシ夫武勇ハ我國ニテハ古ヨリ甚モ貴ヘル所ナレハ我國ノ臣民タルモノ武勇ナクテハ叶フマシ況シテ軍人ハ戰ニ

臨ミ敵ニ當ルノ職ナレバ片時モ武勇ヲ忘レテヨカルヘキカハアレ
 武勇ニハ大勇アリ小勇アリ同カラズ血氣ニハヤリ粗暴ノ振舞ナ
 ドセンハ武勇ト謂ヒ難シ軍人タランモノハ常ニ能ク義理ヲ辨ヘ能
 ク膽力ヲ練リ思慮ヲ殫シテ事ヲ謀ルヘシ小敵タリトモ侮ラス大敵
 タリトモ懼レズ已カ武職ヲ盡サムコソ賊ノ大勇ニハアレサレハ武
 勇ヲ尙フモノハ常々人ニ接ルニハ温和ヲ第一トシ諸人ノ愛敬ヲ得
 ムト心掛ケヨ由ナキ勇ヲ好ミテ猛威ヲ振ヒタラハ果ハ世人モ忌嫌
 ヒテ豺狼ナドノ如ク思ヒナム心スベキコトニコソ

一軍人ハ信義ヲ重ンスベシ凡信義ヲ守ルコト常ノ道ニハアレドワキ
 ナ軍人ハ信義ナクテハ一日モ隊伍ノ中ニ交リテアラソコト難カル
 ヘシ信トハ已カ言ヲ踐行ヒ義トハ已ガ分ヲ盡スヲ云フナリサレハ
 信義ヲ盡サント思ハハ始ヨリ其事ノ成シ得ヘキカ成シ得ヘカラサ
 ルカラ審ニ思考スヘシ臆氣ナル事ヲ假初ニ諾ヒヨシナキ關係ヲ結
 ヒ後ニ至リテ信義ヲ立ントスレバ進退谷リテ身ノ措キ所ニ苦ムコ
 トアリ悔ユトモ其詮ナシ初ニ能々事ノ順逆ヲ辨ヘ理非ヲ考ヘ其言

ハ所詮踐ムヘカラスト知リ其義ハトテモ守ルヘカラズト悟リナハ
 速ニ止ルコソヨケレ古ヨリ或ハ小節ノ信義ヲ立ントテ大綱ノ順逆
 ヲ誤リ或ハ公道ノ理非ニ陷迷ヒ私情ノ信義ヲ守リアタラ英雄豪傑
 トモガ禍ニ遭ヒ身ヲ滅シ屍ノ上ノ汚名ヲ後世マデ遺セルコト其例
 多カラヌモノヲ深ク警メテヤハアルキ

一軍人ハ質素ヲ旨トスヘシ凡質素ヲ旨トセザレハ文弱ニ流レ輕薄ニ
 趨リ驕奢華麗ノ風ヲ好ミ遂ニハ貪汚ニ陥リテ志モ無下ニ賤クナリ
 節操モ武勇モ其甲斐ナク世人ニ爪ハジキセラル、迄ニ至リヌヘシ
 其生涯ノ不幸ナリト云フモ中々愚ナリ此風一タヒ軍人ノ間ニ起リ
 テハ彼ノ傳染病ノ如ク蔓延シ士風モ兵氣モ頓ニ衰ヘヌベキコト明
 カナリ朕深ク之ヲ懼レテ曩ニ免黜條例ヲ施行シ略此事ヲ誠メ置キ
 ツレド猶モ其惡習ノ出ソコトヲ憂ヒテ心安カラキハ故ニ又之ヲ訓
 フルゾカシ汝等軍人ユメ此訓誠ヲ等閑ニナ思ヒリ

右ノ五ヶ條ハ軍人タランモノ暫モ忽ニスヘカラズサテ之ヲ行ハンニ
 ハ一ノ誠心コソ大切ナレ抑此五ヶ條ハ我軍人ノ精心ニシテ一ノ誠心

ハ又五ヶ條ノ精心ナリ心誠ナラサレバ如何ナル嘉言モ善行モ皆ウハ
 ベノ裝飾ニテ何ノ用ニカハ立ツヘキ心タニ誠アレハ何事モ成ルモノ
 アカシ况シテヤ此五ヶ條ハ天地ノ公道人倫ノ常經ナリ行ヒ易ク守リ
 易シ汝等軍人能ク朕カ訓ニ遵ヒテ此道ヲ守リ行ヒ國ニ報ユルノ務ヲ
 盡サバ日本國ノ蒼生舉リテ之ヲ悦ビナン朕一人ノ悦ビノミナランヤ
 ○明治十七年七月華族令を定め天皇出御授爵式を行ふ其詔勅
 朕惟フニ華族勳胄ハ國ノ美望ナリ宜シク授クルニ榮爵ヲ以テシ用テ
 寵光ヲ示スベシ文武諸臣中興ノ偉業ヲ翼賛シ國ニ大勞アル者宜シク
 均ク優列ニ陞シ用テ殊典ヲ昭ニスベシ茲ニ五爵ヲ叙テ其禮ヲ秩ス鄉
 等益々爾ノ忠貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サシメヨ
 ○明治廿年三月海防費補助ノ詔
 朕惟フニ立國ノ務ニ於テ防海ノ備一日モ緩クスヘカラス而國庫歲入
 未タ遽カニ其鉅費ヲ辨シ易カラス朕之カ爲メニ軫念シ茲ニ宮禁ノ儲
 餘三拾萬圓ヲ出シ聊其費ヲ助ク閣臣旨ヲ體セヨ
 ○明治廿一年四月市制町村制發布ノ詔

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲
 シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町
 村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ
 公布セシム

○明治廿二年二月憲法發布ノ告文

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ノ神靈ニ誥ケ曰ク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承
 繼シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ願ミルニ世局ノ進運ニ磨
 リ人文ノ發達ニ隨ヒ宜シク

皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率
 由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益々
 國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ増進スベシ茲ニ皇室典範及
 憲法ヲ制定ス惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタヌヘル統治ノ洪範ヲ紹述セルニ外ナラズ而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ詢ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚籍スルニ由ラザルハナシ皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ祚リ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フ庶幾クハ

神靈此レヲ察ミタマヘ

○又發布ノ勅語

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣業トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力補翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇

造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト並ニ臣民ノ忠實勇武ニノ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎勵シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハザルナリ

○同 詔勅

朕祖宗ノ威烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈愛シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其康福ヲ増進シ其懿徳良ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ又其翼贊ニ依リ與ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ即チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕ガ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

國家統治ノ大憲ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆テサルヘシ

朕ハ我臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時ヲ以テ此憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ

將來若此憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼承ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ

之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得ザルヘシ

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此憲法ヲ施行スルノ責ニ任ズベク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

○明治廿三年二月金鵄勳章を創設し給ひし詔
朕惟ミルニ

神武天皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ベリ今ヤ皇カニ登極紀元ヲ算スレハ二千五百五十年ニ達セリ朕此期ニ際シ

天皇裁定ノ故事ニ徵シ金鵄勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與シ

永ク

天皇ノ威烈ヲ光ニシ以テ其忠勇ヲ獎勵セムトス汝衆庶此旨ヲ體セヨ

○明治廿三年十月元老院廢止の勅語

元老院ノ創設而來茲ニ十有餘年克ク朕カ立法ノ業ヲ贊襄セリ朕今帝國議會ヲ開設セシムルニ臨ミ其閉院ヲ命ジ併セテ其勞績ヲ表明ス

○明治廿三年十月教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル

ハ是レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已ヲ持シ博愛衆ニ及ボ

シ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラム

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ

所之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

○明治廿三年十一月帝國議會開院の勅語

朕貴族院及ヒ衆議院ノ各員ニ告グ

朕即位以家二十年間ノ經始スル所内治諸般ノ制度粗々其ノ綱領ヲ舉
ゲタリ庶幾クハ皇祖皇宗ノ遺徳ニ倚リ郷等ト共ニ前ヲ繼ギ後ヲ啓キ
憲法ノ美果ヲ収メ以テ將來ニ益々我ガ帝國ノ光烈ト我カ臣民ノ忠良
ニシテ勇進ナル氣性トヲ中外ニ表明ナラシムルコトヲ得ム

朕又夙ニ各國ト盟好ヲ修メ通商ヲ廣メ國勢ヲ振張セムコトヲ期ス幸
ニ歸約諸國ノ交際ハ益々親交ヲ加ヘタリ

明治廿四年度ノ豫算及各般法律案ハ朕之ヲ國務大臣ニ命シテ議會ノ
議ニ付セシム朕ハ郷等ガ公平慎重以テ審議協賛スル所アルコトヲ期
シ併セテ將來ニ繼グベキノ模範ヲ貽サムコトヲ望ム

○御製

古へのふみ見るたびに思ふかな

をのか治むる國はいかにと

冬深きねやのふすまをかさねても

思ふは賤か夜寒かりけり

我が英靈文武なる 今上皇帝陛下 皇緒を繼承せ給ひ常
に 神明を尊崇せられ上以て 祖宗に事へ下は以て臣
臣を撫で外萬國と好誼ヲ結び内億兆と憂苦を分か 奮勵ヲ破り
智識を求め廢を興し弊を退け治を謀り亂を平げ畏くも一身
の艱難を顧み辛苦を厭はせ給はす万乗の君億兆の主と座なが

ら梅風沐雨御躬ら四方を經營し給ひ吐哺選髮御手から万機を
 決断おられらる加之あらす下意の上達し上意の下達せざるを
 憂ひ置て公議を尊び輿論を重じ茲に歐米の法制を酌量し祖宗
 の遺訓に準據し給ひ以て宇内無比の憲法頒布おらせられ長
 くも臣民よ參政の權を與へ給ふ是よ於てか我國千古未曾有の
 開明を發揮し臣民野蠻の嘲を免れ泰平の恩波に沐浴すること
 を得せしめ給ふ嗚呼わが臣民たるものこの優渥ある無限の鴻
 恩を報せすして可ならむ哉不常に 聖勅を拜讀して感泣措
 く能はず故に罪死を忘れ謹むて茲に轉載す讀む人にて
 聖慮の萬一汝奉戴し我か日本帝國をえて世界の最強最富の國
 たらまめ我が大和民族をして地球の最善最美の民たらしむる
 の覺悟なかるへからず決して無心ある勿れ

神官必携 上巻終

神官必携下巻

三重 伊藤左門編輯

◎祭式

式部寮廻達 明治八年四月廿四日

神社祭式別冊之通被定候條爲御心得御廻シ申入候間一冊ツ、御留置
 可有之候也

(別冊)

神社祭式

○官國幣社祈年祭 二月

本月四日太政官應ニ於テ伊勢神宮宮中皇靈等ノ幣帛ヲ使ニ班チ
 ナ發遣セシム次テ各地方ノ官幣社國幣社へ幣帛ヲ班ツ各地到着
 ノ後日ヲ撰ヒテ祭祀スヘシ但古例ヲ存スル社ハ其日ニ因ル可シ
 地方ノ長官以下祭ニ關ル官員及ビ神官共ニ前日ヨリ齋戒シ地方ノ長
 官正廳ニ臨ミ御幣物ヲ點檢シ屬ニ附ス
 當日早旦神官神殿ヲ裝飾ス

午前第八時神官ノ長官以下幄舎ニ着ク

次地方ノ長官以下幄舎ニ着ク

次屬御幣物ヲ門内ニ入レ砌上ニ置ク

次神官ノ長官殿ニ昇御座ヲ開キ

奏スヘシ又略スルモ妨ケナシ

次同次官以下神饌ヲ傳供ス

次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ殿ニ昇リ

次神官ノ長官御幣物ヲ神前ノ案上ニ奉ル

祝詞

掛卷母忍伎

某神社乃大前爾宮司位苗字名忍美忍母白久左今年新年祭爾御幣捧奉志

米給布是以今日大前乎持齋利波慎敬比奉留御食波和稻菟稻爾御酒波

至留爾置足波志且仕奉事乎平久其氣聞食且敷坐留公民我取作乎五穀物

平始天處々爾生出幸種々乃色物毛彌益々爾成幸倍給比平久其氣安久其氣

新嘗祭仕事其志給止白須事乎聞食止忍美忍母白須

次地方ノ長官玉串ヲ獻リ拜禮再拜拍手〇玉串ハ(府縣)掌執テ下殿

幄舎ニ復ス

次同官員拜禮

次神官ノ長官玉串ヲ獻リ拜禮再拜拍手〇玉串ハ主典執テ昇テ本所

ニ復ス

次同次官以下拜禮

次同官以下御幣物及神饌ヲ撤ス此間奏樂

次同長官御座ヲ閉ッ再拜拍手畢テ下殿幄舎ニ復ス此間奏樂

次各退出

神饌 大社九臺〇中社七臺

和稻 八臺〇小社七臺

荒稻 酒二瓶 海魚 川魚 鳥(中社ニ)

臺一品宛(一) 菓 水鹽 海菜品 野菜上(全)小社ニハ

幣物

○官國幣社新嘗祭 十一月廿三日

本月十日太政官廳ニ於テ幣帛ヲ班ツ其式總テ祈年祭ニ同シ

祝詞

某神社乃大前幣宮司位苗字名恐美恐母白久佐今年新嘗祭爾御幣捧奉志其
米給布是以今日大前乎持齋麻波

皇神等乃成志幸倍波給倍八束穗乃秋乃初穗乎御饌御酒爾仕事利緒乃廣物
緒乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至天留爾置足天波志奉留事乎平氣

久安其氣聞食天

天皇乃大朝廷乎始天仕奉留百官人等四方國乃公民爾至天留爾波留事無
久守幸倍波給比立榮志給倍白須事乎聞食止恐美恐母白須

神饌 大社 十臺 〇十一社 〇九臺 中社

和稻 荒稻 酒 餅 海魚 川魚 鳥(中社ニ) 海菜 品二

野菜 同 (小品宛ニハ海菜野菜) 菓 水鹽

幣物

右幣出ノ外各地ノ所産或ハ外邦ノ物品ヲ副テ奉ルモ妨ケナシ

○官幣社例祭

年中祭祀ノ中大祭一度ヲ以テ例祭ト稱ス其日地方官參向シテ祝
詞ヲ奏ス本社古例ノ神事アラハ神饌ヲ撤アルノ前行フヘシ又神
幸ノ式アラハ神饌ヲ撤シテ後渡御有ル可シ

地方ノ長官以下祭ニ關ル官員及神官共ニ前日ヨリ齋戒シ地方ノ長官
正廳ニ臨ミ御幣物ヲ點檢シ屬ニ附ス

當日早旦神官神殿ヲ裝飾ス

午前第八時神官ノ長官以下帷舎ニ着ク

次地方ノ長官以下社頭ニ參向シ神門外ニ於テ手水ノ儀アリ

次同官以下祓ノ帷舎ニ着ク神官祓ノ詞ヲ讀ミ神ノ枝ヲ執テ祓フ

祓詞

掛卷母恐伎

伊邪奈伎神筑紫乃日向乃橘乃小門乃阿波岐原爾御禊祓給志比時爾生坐
留世祓戶乃大神等今日仕奉留官人等我過犯留世罪穢有平其奉祓給比清米給

止申須事乎閉食止恐美恐母白須

次同官以下神門ヲ入り榎舎ニ候ス

次屬御幣櫃ニ副テ進ミ庭上ノ便所ニ置ク

次神官ノ長官祭儀具スルノ由ヲ地方ノ長官ニ申ス

次同官殿ニ昇リ御扉ヲ開キ畢テ側ニ候ス此間奏樂

次次官以下神饌ヲ傳供ス此間奏樂

次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ殿ニ昇リ假ニ案上ニ置ク案ハ豫メ便宜

次神官ノ長官御幣物ヲ執テ神前ノ案上ニ奉ル再拜

次地方ノ長官殿ニ昇リ祝詞ヲ奏ス拍手

祝詞

掛卷母恐伎

某神社乃大前爾官位苗字名恐美恐母白久佐常例乃隨今日乃御祭仕奉

故爾奉出志給布幣帛波御服波明妙照妙御食波和稻菟稻爾御酒波瓊上

高知瓊腹滿並天緒乃廣物緒乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至

爾天置足天波志奉米其志給布事乎平其氣安其氣閉食天

天皇乃大御代乎足御代乃茂御代爾幸借給比仕奉爾百官人等四方國乃

公民爾至天留麻伊賀志夜具波衣乃如久立榮米志給止白須事乎閉食止恐美

恐母白須

次同官玉串ヲ獻リ拜禮畢テ下殿榎舎ニ復ス玉串ヲ附スル儀

次同官員拜禮

次神官ノ長官玉串ヲ獻リ拜禮畢テ本處ニ復ス玉串ヲ附スル儀

次同次官以下拜禮

次同官以下御幣物及神饌ヲ撤ス此間奏樂

次同長官御扉ヲ閉ツ畢テ下殿榎舎ニ復ス此間奏樂

次各退出

神饌 大社十一臺 中社 九臺 小社 一臺

和稻 酒 餅 海魚 川魚 野鳥 水鳥 海菜 品二

菟稻 瓶二 餅 海魚 川魚 野鳥 水鳥 海菜 品二

野菜 品三 野菜 品二 菓 品二 水鹽 品二

幣物

○國幣社例祭

地方官參向シテ祭事ヲ擔當ス其餘官幣社ニ準シテ知ヘシ

(此府縣社以下ニ於テモ年中一度ノ大祭ハシ)

地方ノ次官以下祭ニ關ル官員及神官共ニ前日ヨリ齋戒シ地方ノ長官

正廳ニ臨ミ御幣物ヲ點檢シ屬ニ附ス

當日早旦神官神殿ヲ裝飾ス

午前第八時神官ノ長官以下幄舎ニ着ク

次地方ノ次官以下社頭ニ參向シ神門外ニ於テ手水ノ儀有リ

次同官以下神門ヲ入り幄舎ニ着ク

次屬官御幣物ヲ門内ニ入レ砌上ニ置ク

次神官ノ長官殿ニ昇リ御扉ヲ開キ畢テ側ニ候ス此間奏樂

次同次官以下神饌ヲ傳供ス此間奏樂

次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ殿ニ昇リ假ニ案上ニ置ク案ハ豫メ便宜

次神官ノ長官御幣物ヲ執テ神前ノ案上ニ奉ル再拜

次同官祝詞ヲ奏ス再拜

祝詞

掛卷母恐佐

某神社乃大前爾宮司位苗字名恐美恐母白久佐以下官幣社ニ同シ

次地方次官玉串ヲ獻リ拜禮畢テ下殿幄舎ニ復ス

次同官員拜禮

次神官ノ長官玉串ヲ獻リ拜禮畢テ本處ニ復ス

次同次官以下拜禮

次同官以下御幣物及神饌ヲ撤ス此間奏樂

次同長官御扉ヲ閉ツ畢テ下殿幄舎ニ復ス此間奏樂

次各退出

神饌 中社十臺

和酒 二瓶 餅 海魚 川魚 鳥 海菜 品二

荒稻 一臺 菓 品二 水鹽 野菜 品三 (小品社ニハ海菜 二品)

幣物

○官國幣社通式

○元始祭 三日

此日宮中ニ於テ賢所並天神地祇御歷代皇靈ヲ御親祭在セラハ是天津日嗣ノ本始ヲ祝シテ歳首ニ祀リ給フ義ナルヲ以テ元始祭ト稱ス因テ地方ニ於テモ此大典ヲ遵奉シ祭祀ヲ執行スヘシ

當日早旦神官神殿ヲ裝飾ス
午前第八時神官ノ長官以下幄舎ニ着ク
次同官殿ニ昇リ御屏ヲ開キ畢テ候ス此間奏樂
次同次官以下神饌ヲ傳供ス此間奏樂
次同長官祝詞ヲ奏ス

祝詞
掛卷母恐伎

某神社乃大前爾宮司位苗字名恐美恐母白久佐年始乃今日乃祭爾大前乎持齋麻波慎敬比奉留御食波和稻荒稻爾御酒波獲上高知獲腹滿並天鰯乃廣物鰯乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至天留爾置足天志仕奉留事乎平久氣安久氣聞食天
天皇乃大朝廷乎始天四方國乎堅磐爾常磐爾守幸倍波給比仕奉留百官人

等公民爾至天留爾伊賀志夜具波衣乃如久立榮米給止倍白須事乎聞食止世恐美恐母白須

次同官玉串ヲ獻テ拜禮再拜拍手ニ就テ之ヲ附ス
次同次官以下拜禮
次同官以下神饌ヲ撤ス此間奏樂
次同長官御屏ヲ閉ツ畢テ下殿幄舎ニ復ス此間奏樂
次各退出

神饌
大社十臺
中社八臺
小社二臺
和稻酒二瓶
餅
海魚
川魚
鳥
除之
海菜品
野菜全
荒稻一瓶
宛一臺
野菜一臺
トス
菓
水鹽

○後月輪東山陵遙拜
本日 孝明天皇御崩日ナルヲ以テ宮中ニ於テ御親祭在セラレ又勅使ヲ山陵ニ差遣シ幣帛ヲタテマツラル因テ該神社ニオイテ遙拜スヘシ

早旦社頭便宜ノ地ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ設ケ玉串ヲ獻ルヘシ

(遙拜畢ラハ玉串ハ燒却スヘシ)

拜辭

掛卷母恐伎

後月輪東山陵乃大前乎遙拜美奉止其久白須

○紀元節十一月

本日 神武天皇御即位日ニ當ルヲ以テ紀元節ト稱ス此日宮中ニ於テ御親祭在ラセラル因テ該神社ニ於テ遙拜スヘシ敷設等總テ上ニ同シ

拜辭

掛卷母恐伎 畝傍榎原宮爾天下知食々志

天皇乃大靈乃大前乎遙拜美奉止其久白須

○畝傍山東北山陵遙拜

本日神武天皇御崩日ナルヲ以テ宮中ニ於テ御親祭在ラセラレ又勅使ヲ山陵ニ差遣シ幣帛ヲ奉ラル因テ該神社ニ於テ遙拜スヘシ敷設等上ニ同シ

拜辭

掛卷母恐伎

畝傍山東北山陵乃大前乎遙拜美奉止其久白須

○大祝 六月三十日十二月三十一日此式ヲ行フヘシ

時刻社頭ニ被ノ座ヲ設ケ被物ヲ置ク

其儀庭上ノ左右ニ倚子或ハ床几ヲ設ケ地方官神官ノ被ノ座トスハ新薦ヲ敷キ或ハ圓座ヲ中央ニ高机ヲ立テ被物ヲ置キ其前ニ被物ノ座ヲ設ク

午後第二時地方官神官等被ノ座ニ着ク

次宮司進テ神殿ニ昇リ御座ヲ開ク

次同官祝詞ヲ奏ス

祝詞

掛卷母恐伎

其神社乃大前爾宮司位苗字名恐美恐母美白久佐此(府)乃官人又大神爾仕奉留神官等平始且敷座留里々乃公民等我過犯平氣雜々乃罪事乎今年乃(六)

月十二乃今日乃夕日乃降雨祝物乎置座爾置豆祝清事乎祝處乃神等爾神議々給比諸人乃枉事罪穢乎祝給比清給止乞祈奉留事乃由乎彌高爾聞食止恐美恐美母白須

次官司下殿再ヒ祝ノ座ニ着ク

次神官中央ノ座ニ着キ群參ノ諸人ノ方ニ向ヒ祝詞ヲ讀ム

祝詞

此(府縣)乃官人又

某神社爾仕奉留神官等乎始且敷座留里々乃公民等我天津罪國津罪止過犯乎難々乃罪事乎今年乃(六月)乃今日乃夕日乃降乃大祝爾祝物乎置座爾置豆祝清事乎瀨織津姬神速秋津姫神氣吹戶主神速佐須良姫神相宇豆那比海川爾出且根國底爾伊吹放佐須良比失乎如此失此(府縣)乃官人神官等乎始且里々家々乃男女爾至留万自今日始且罪止云罪咎止云咎汝不在止言祝留事乎諸聞食止宜留

次地方官並神官各切麻ヲ執テ祝フ

次官司神殿ニ昇リ御屏ヲ閉ツ畢テ本座ニ復ス

次各退出 祝物ハ細ク切テ河海ニ流シ棄ツ切麻亦同シ

祝物

木綿一兩 五代ルニ常ノ木綿

布 五尺 用麻ヲ以テス

神嘗祭遙拜 十七日

本日宮中ニ於テ御遙拜且賢所御親祭在セラレ又勅使ヲ神宮ニ差遣シ幣帛ヲ奉ラル因テ該神社ニ於テ遙拜スヘシ敷設等總テ上ノ遙拜式ニ同シ

拜辭

掛卷母忍支伊勢乃

神宮乃大前乎遙爾拜美奉止其久白須

假殿遷座

神殿破損シテ改造或ハ修繕スヘキ時ハ先ツ社頭便宜ノ地ヲ撰テ假殿ヲ造立シノ但シ移殿或ハ權殿其他便宜日ヲ擇テ遷坐スヘシ當日地方官參向シテ諸事ヲ擔當ス

當日早旦神官本殿假殿等裝飾ス

其儀本殿裝飾常ノ如シ假殿ハ内外ヲ清メ殿ノ入口ニ簾ヲ懸ケ神座ヲ設ケテ外面注連ヲ引ク

時刻宜神官ノ長官以下幄舎ニ着ク

次地方官社頭ニ参向シ幄舎ニ着ク手水ノ儀アリ

次神官ノ長官本殿ニ昇リ御扉ヲ開ク此間奏樂

次同官祝詞ヲ奏ス

祝詞

掛卷母恐伎
某神社乃大前爾宮司位苗字名恐美恐美母白久佐此乃御殿乃損留我故爾改米造利(修米繕比)奉止其平為故今日乃生日乃足日爾假宮爾遷志坐世奉留事乎聞食止世恐美恐美白須
次遷坐

其儀神官ノ長官御正體ヲ辛櫃ニ納メ奉リ同次官以下昇奉ル其餘ノ神官前後整列ス此間地方官假殿前ノ幄舎ニ移リ着ク但辛櫃ニ限ラ

有之向ハ
從前ノ通

次假殿開扉遷坐畢テ神官ノ長官側ニ候ス此間奏樂

次神官ノ次官以下神饌ヲ傳供ス此間奏樂

次同長官祝詞ヲ奏ス

祝詞

掛卷母恐伎

某神社乃大前爾宮司位苗字名恐美恐美母白久佐今日乃此日爾此假宮爾遷志坐世奉利大前乎持齋麻波御食御酒魚菜種々乃物乎置足波志奉留事乎平久其氣安久其氣聞食豆暫乃間穩爾鎮利坐止世恐美恐美白須

次地方官玉串ヲ獻テ拜禮

次神官ノ長官玉串獻テ拜禮畢テ本所ニ復ス

次同次官拜禮

次同官以下神饌ヲ撤ス此間奏樂

次同長官御扉ヲ閉ツ畢テ下殿幄舎ニ復ス此間奏樂

次各退出

御饌 大社十台 中社八台 本社遷座

改造或ハ修繕畢ラハ日ヲ擇テ遷坐スヘシ次第敷設等假遷坐ニ照シテ行フヘシ

掛卷母忍伎 某神社乃大前爾宮司位苗字名忍美忍母白久佐往志某(年)爾御殿乎改米造利(修米繕比)奉止其奉為豆此乃假宮爾遷志坐世奉伎爰爾此某月日爾至利御殿改米造利(修米繕比)奉利畢奴故今日乃生日乃足日爾慎敬比遷志鎮米坐世奉留事乎聞食止忍美忍母白須

同殿本 掛卷母忍支

某神社乃大前爾宮司位苗字名忍美忍母白久佐今日乃此日爾御殿爾遷志鎮米坐世奉利大前乎持齋利波慎敬比奉留御食波和稻荒稻爾御酒波饗上高知饗腹滿並豆緒乃廣物緒乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至豆留麻置足天波志仕奉留事乎平久其氣安久其氣聞食豆彌遠長爾鎮利坐止世白須

事乎聞食止忍美忍母白須 附錄 天長節三十一日 本日

天皇御降辰ナルヲ以テ各地ニ於テ萬壽無疆ヲ奉祝スヘシ 式部寮廻達 明治八年八月十八日

神社祭式附錄別冊ノ通被定候條爲御心得御廻シ申入候一冊ツ、御留置可有之候也 (別冊)

附錄 地方官員拜禮式 元始祭 一月三日

此日宮中ニ於テ實所并天神地祇御歷代皇靈ヲ御親祭在セララル 是天津日嗣ノ本始ヲ祝シテ歲首ニ祀リ給フ義ナルヲ以テ元始祭ト稱ス因テ官員ニ於テモ最寄神社へ參拜スヘシ

後月輪東山陵遙拜三十日

本日 孝明天皇御崩日ナルヲ以テ宮中ニ於テ御親祭在セラレ又
勅使ヲ山陵ニ差遣シ幣帛ヲ奉ラルル因テ該處或ハ官員ニ於テモ遙
拜スヘシ

早旦 社廳中便宜ノ地ニ新薦ヲ敷キ高机一脚ヲ設ケ玉串ヲ献ルベシ
却ハ玉串ハ燒却スヘシ

掛卷母忍佐 拜辭

後月輪東山陵乃大前乎遙爾拜美奉止其久白須

紀元節十一月十一日

本日 神武天皇御即位日ニ當ルヲ以テ紀元節ト稱ス此日宮中
ニ於テ御親祭在セラルル因テ以下并ニ敷設總テ上ニ同シ

掛卷母忍佐 敬傍榎原宮爾天下知食志
天皇乃大靈乃大前乎遙爾拜美奉止其久白須

敬傍山東北山陵遙拜三四月

本日 神武天皇御崩日ナルヲ以テ宮中ニ於テ御親祭在セラレ
又勅使ヲ山陵ニ差遣シ幣帛ヲ奉ラルル因テ以下上ニ同シ

拜辭

掛卷母忍佐

敬傍山東北山陵乃大前乎遙爾拜美奉止其久白須

神嘗祭遙拜十七日
本日宮中ニ於テ御遙拜且賢所御親祭在セラレ又勅使ヲ神宮ニ
差遣シ幣帛ヲ奉ラルル以下上ニ同シ

拜辭

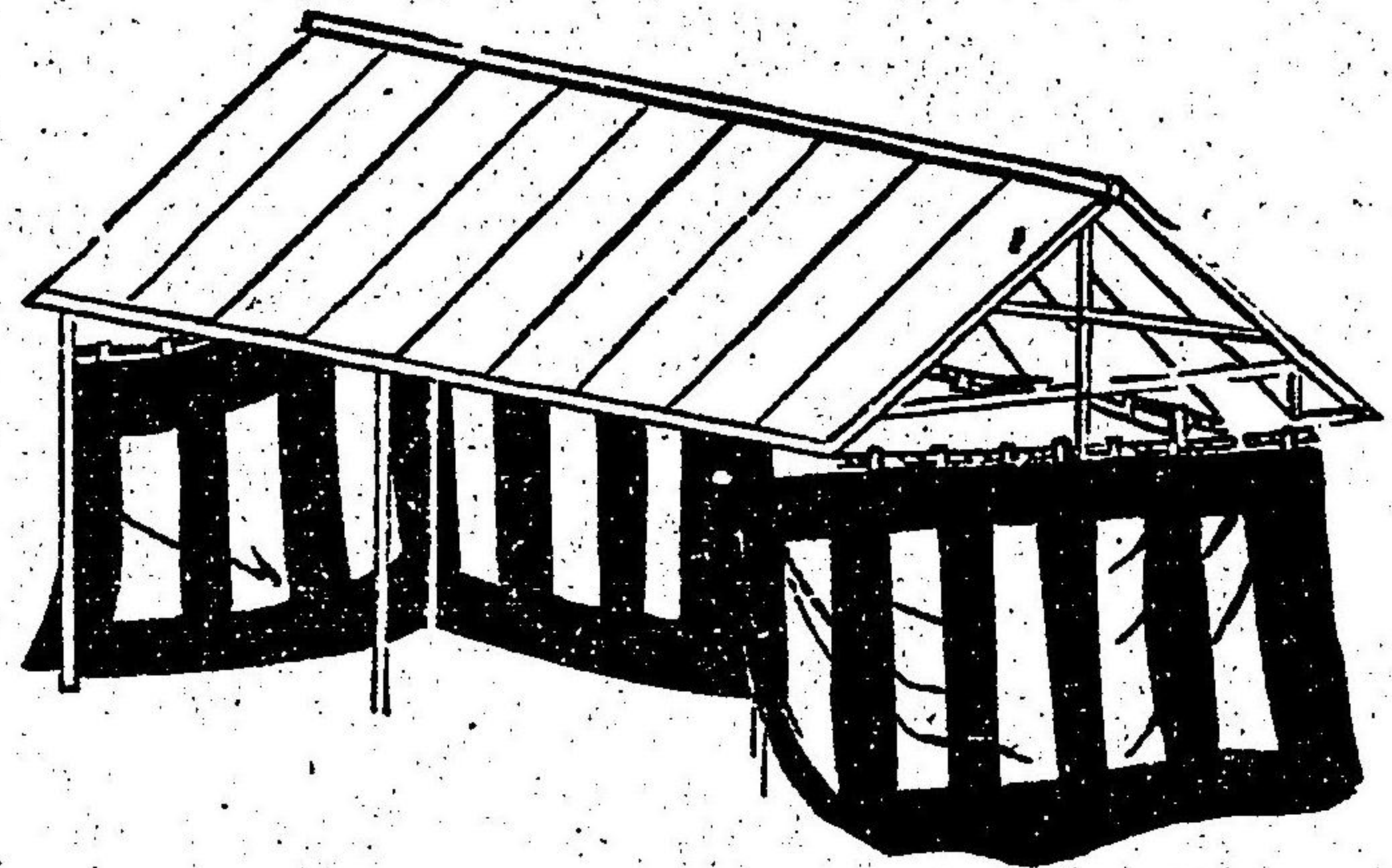
掛卷母忍佐伊勢乃

神宮乃大前乎遙爾拜美奉止其久白須
教部省達 明治八年八月十二日

官國幣社祭式本年四月中式部寮ヨリ頒布相成候處府縣社以下ニ於テ
モ右ヲ準據トシ各社適宜ニ祭典執行致候儀ト可心得此旨相達シ候事

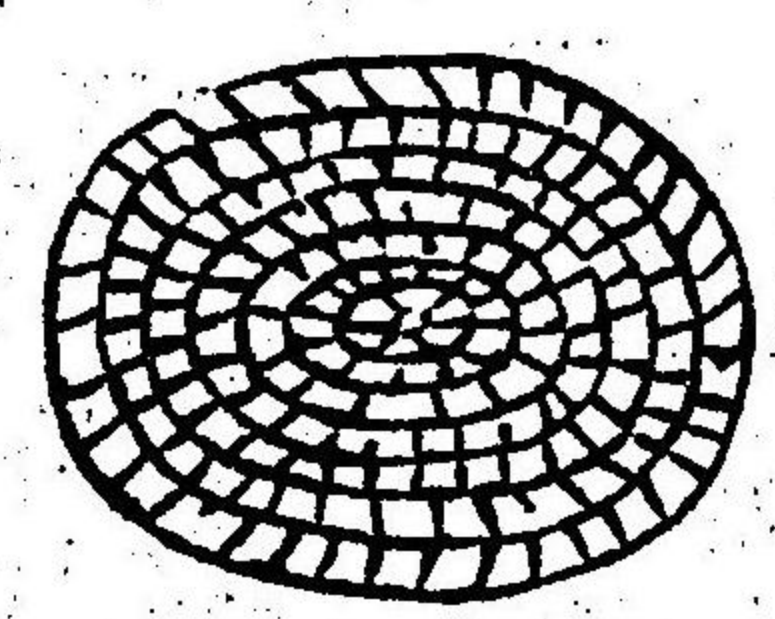
榎舎

葦ハ板苦雨
障子等ニテ
葺キ三方へ
帳ヲ張り或
ハ幕ヲ用フ
ヘシ

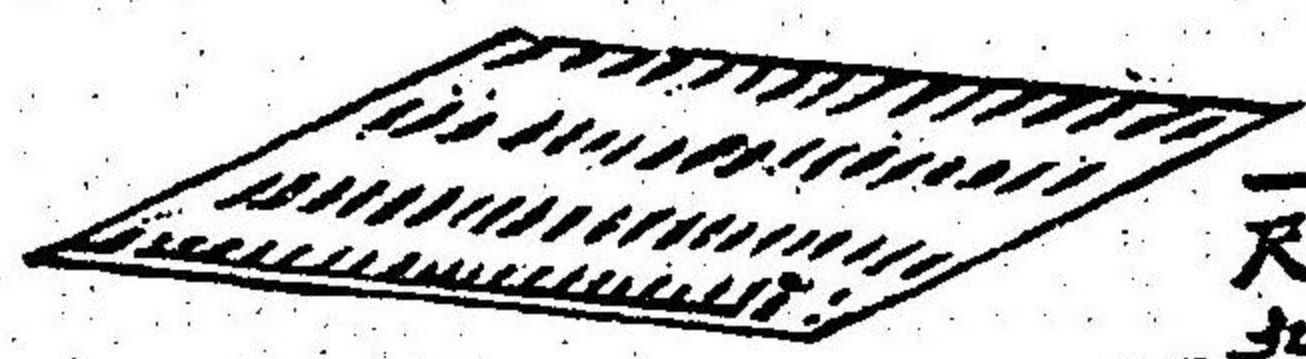


ヒツキ
緑ハ白ノ麻成ハ
木綿ニラスベシ

四座反

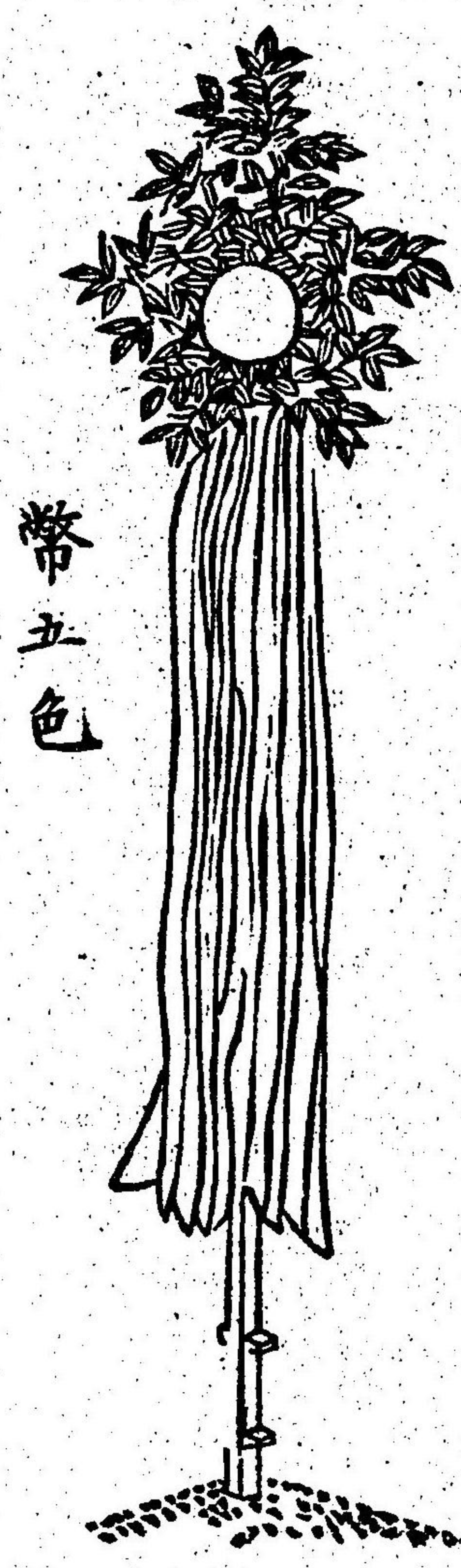


一尺九寸
四方



其神

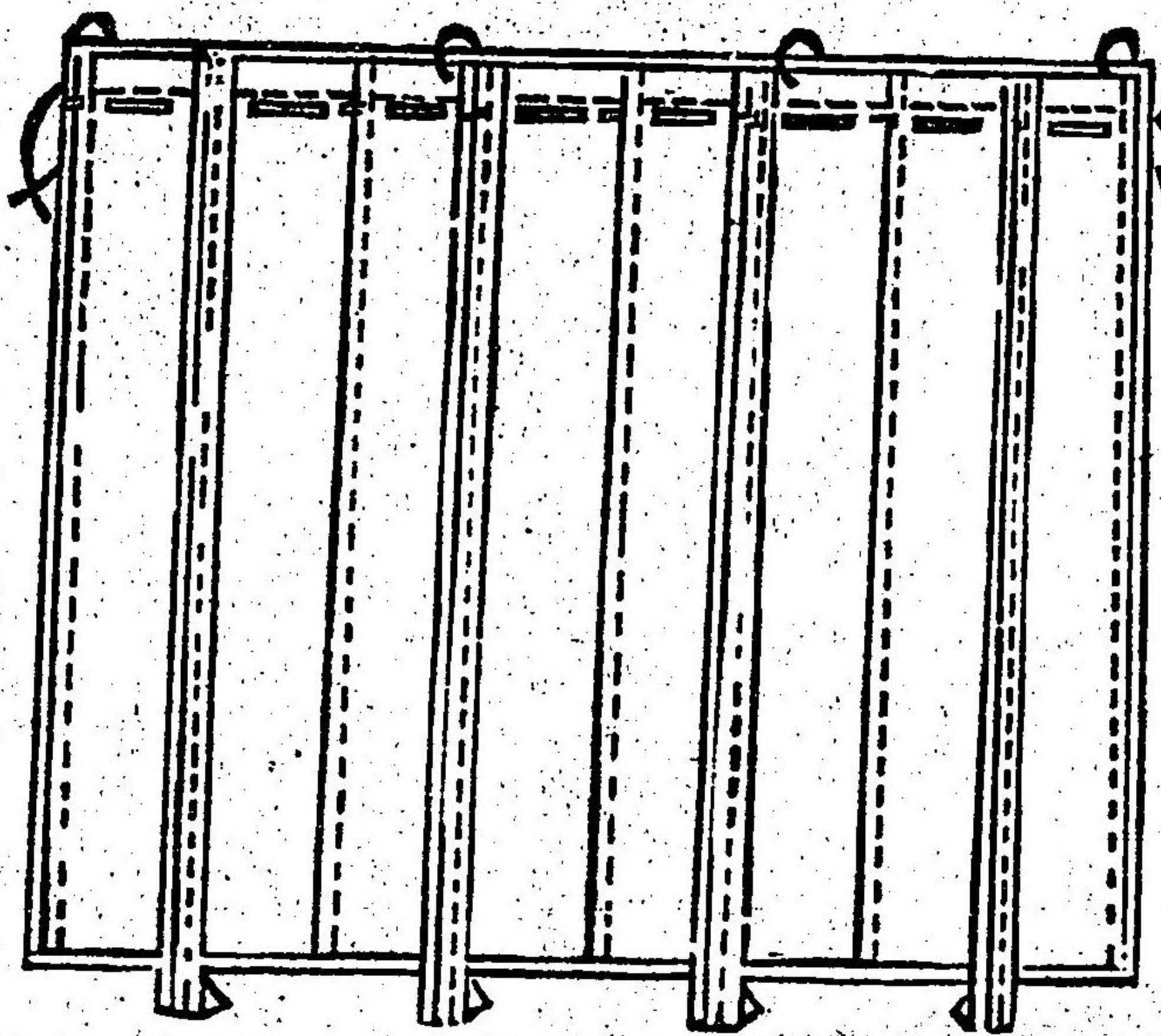
左右同シ但シ神殿ニ向ヒ左
ニ御右ニ鏡玉ヲ取懸クヘシ



幣五色

壁代

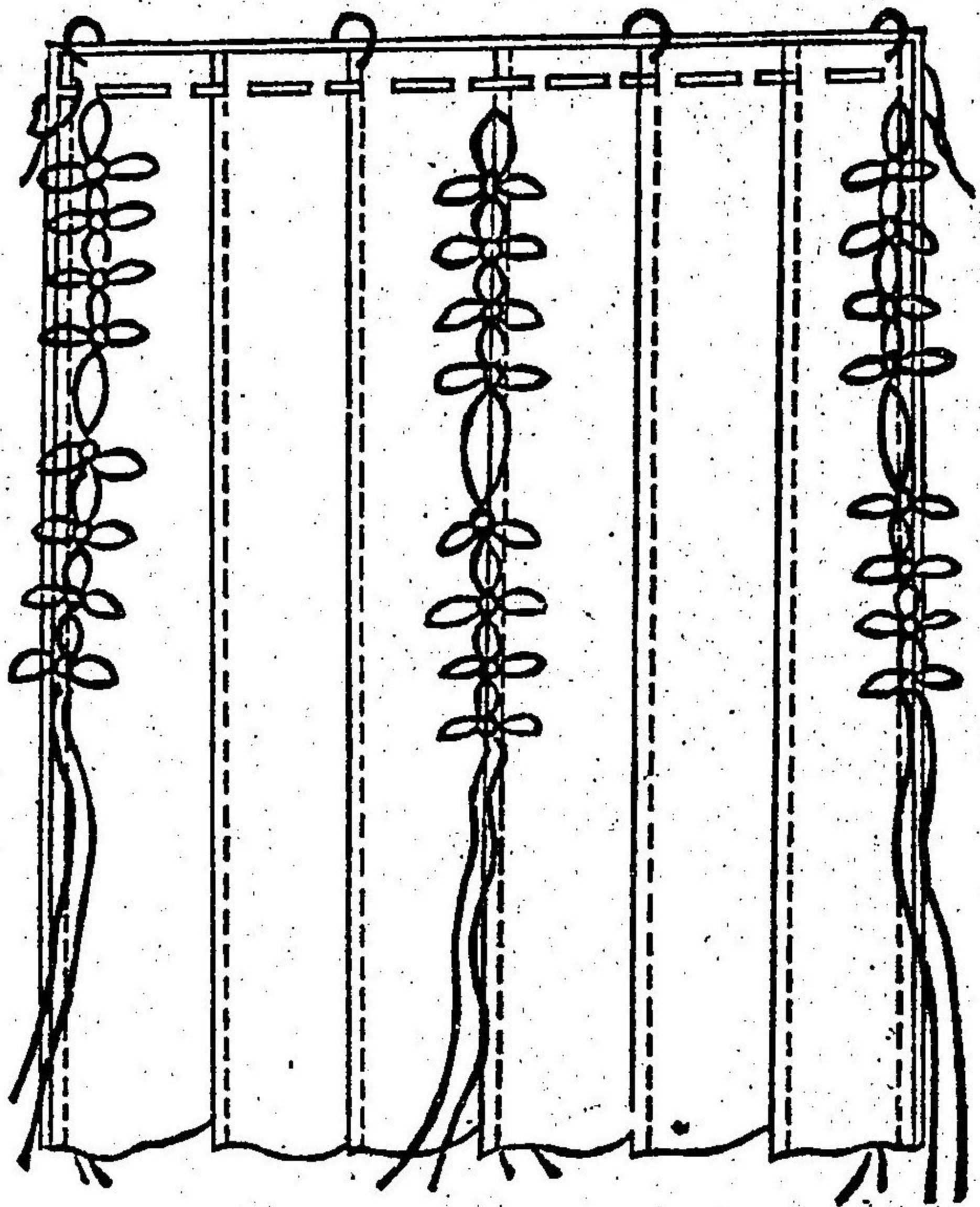
白絹ニテ造リ同絹
ヲ裏トス
内外ニ同絹ヲ紐ト
ス同ク裏ニモアリ
神殿内陣ノ廣狹ニ
依リテ大小適宜ニ
スヘシ
丈ハ垂テ一尺許リ
餘ル程ニスヘシ



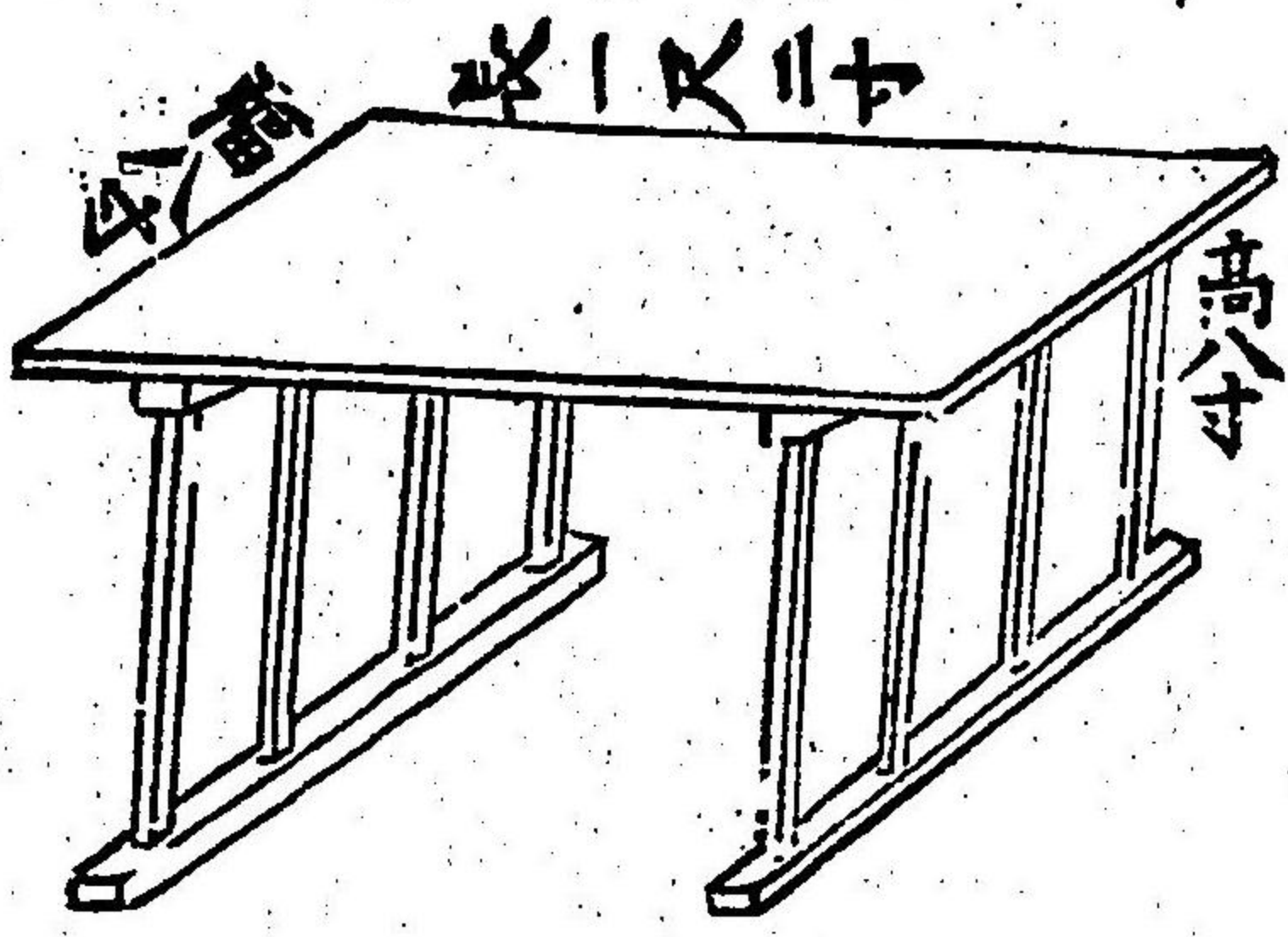
此所ニ檜ノ棹ヲ入レ上ノ輪ヲ折釘ニ懸クヘシ

幌

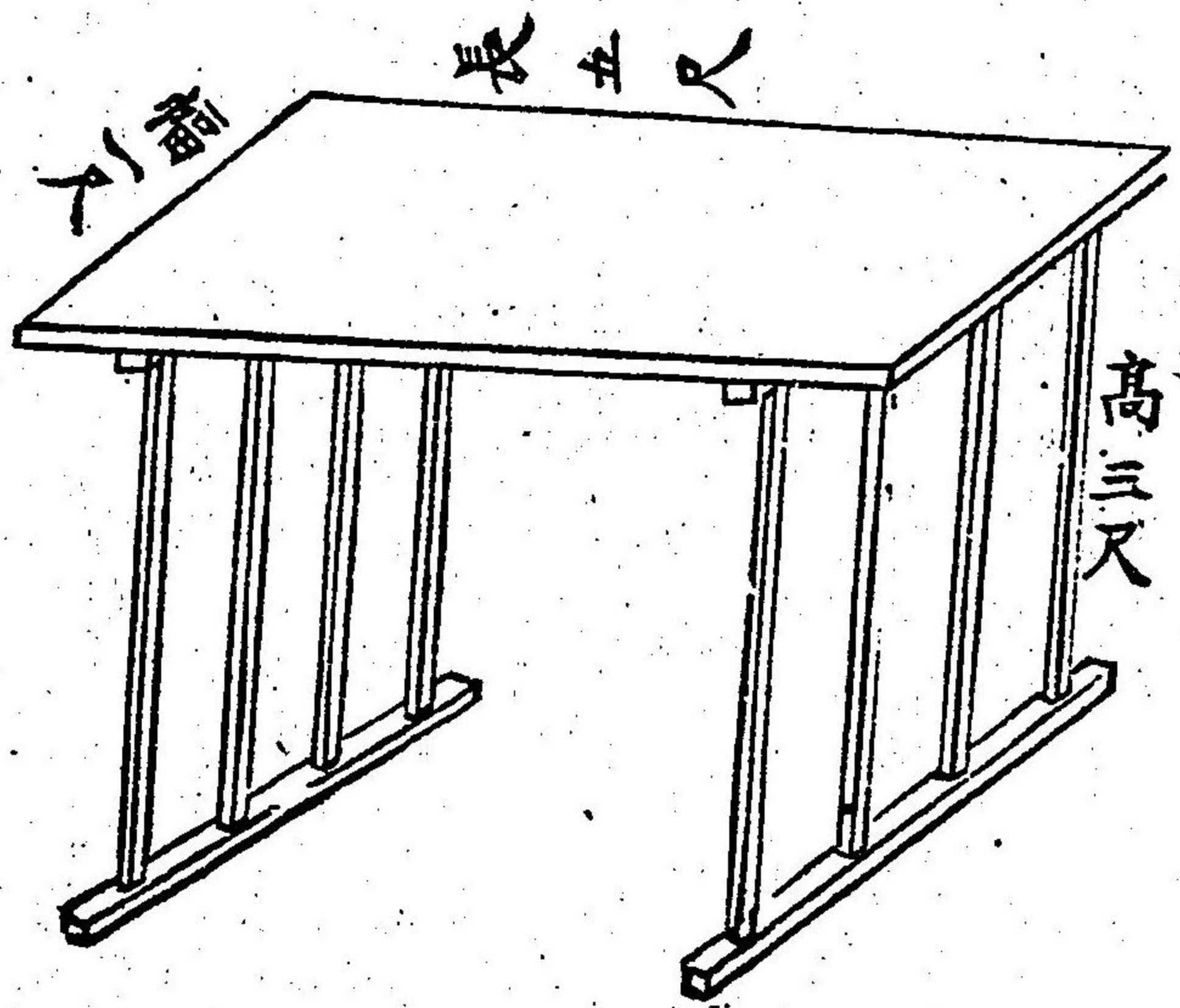
白綾又ハ絹或ハ布
ニテ造リ同シ裏ヲ
付ケ内外ニ絹又ハ
木綿ノ組紐ヲ垂ル
ヘシ是ハ内陣ノ正
面垂簾ノ内ニ懸ル
ナリ丈上ニ同シ



八脚小机



八脚高机

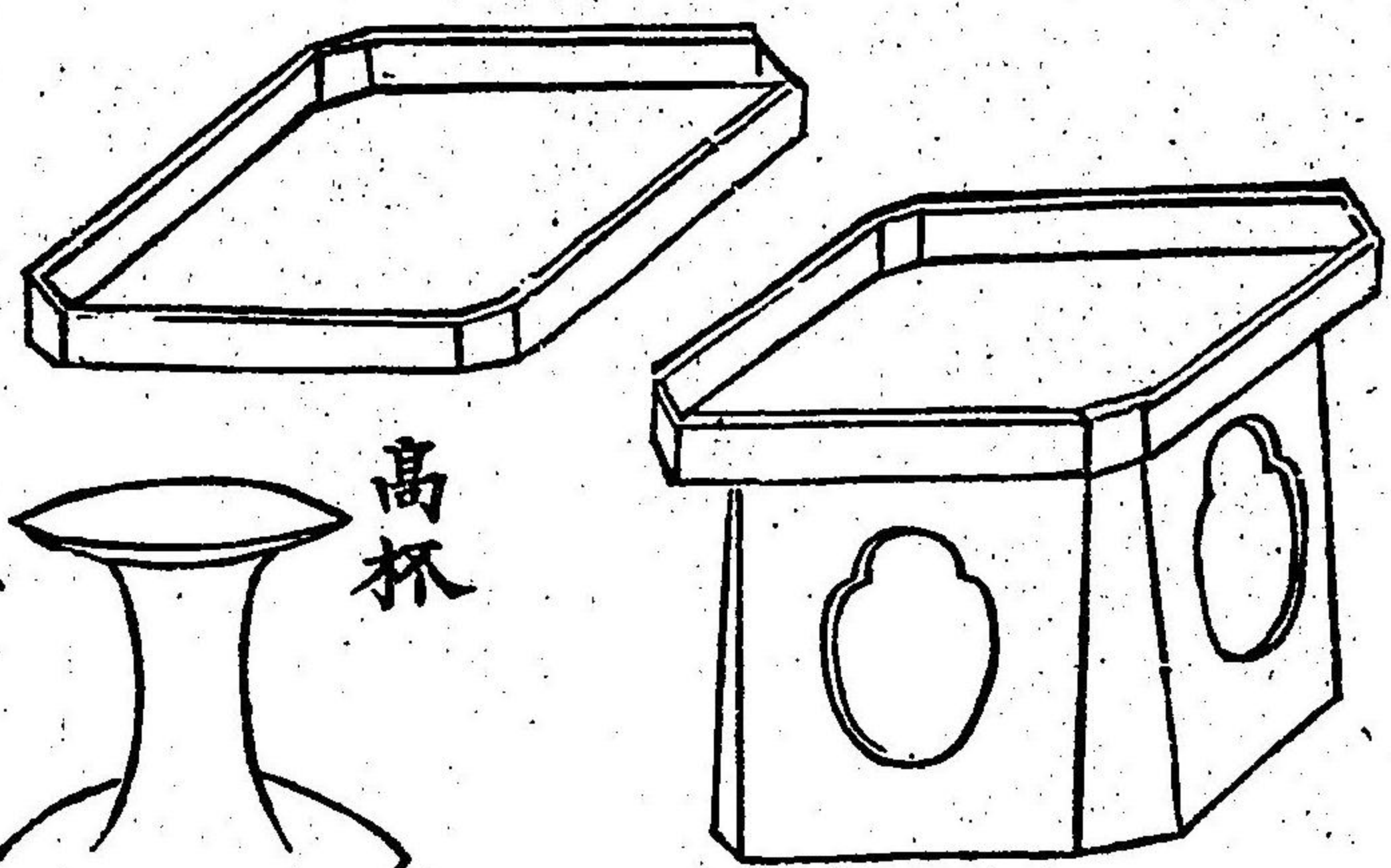


三方臺

一尺二寸
或一尺

折敷

八寸五分
或八寸



高杯



盃



高寸三分

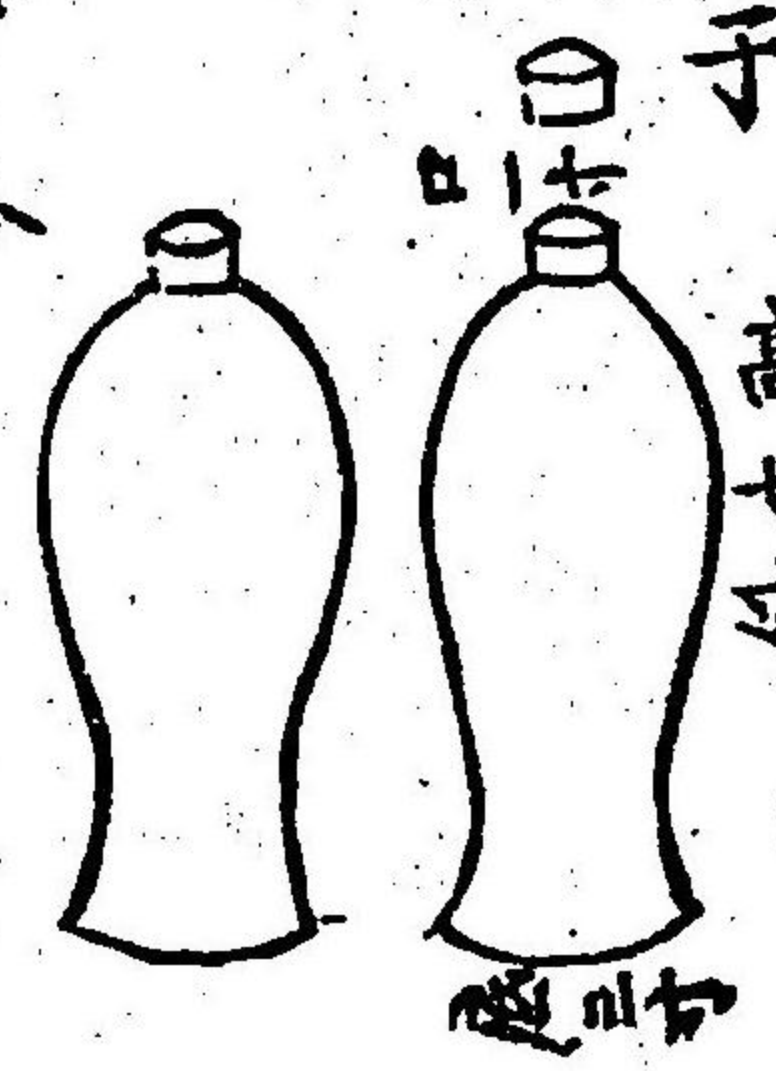


玉串



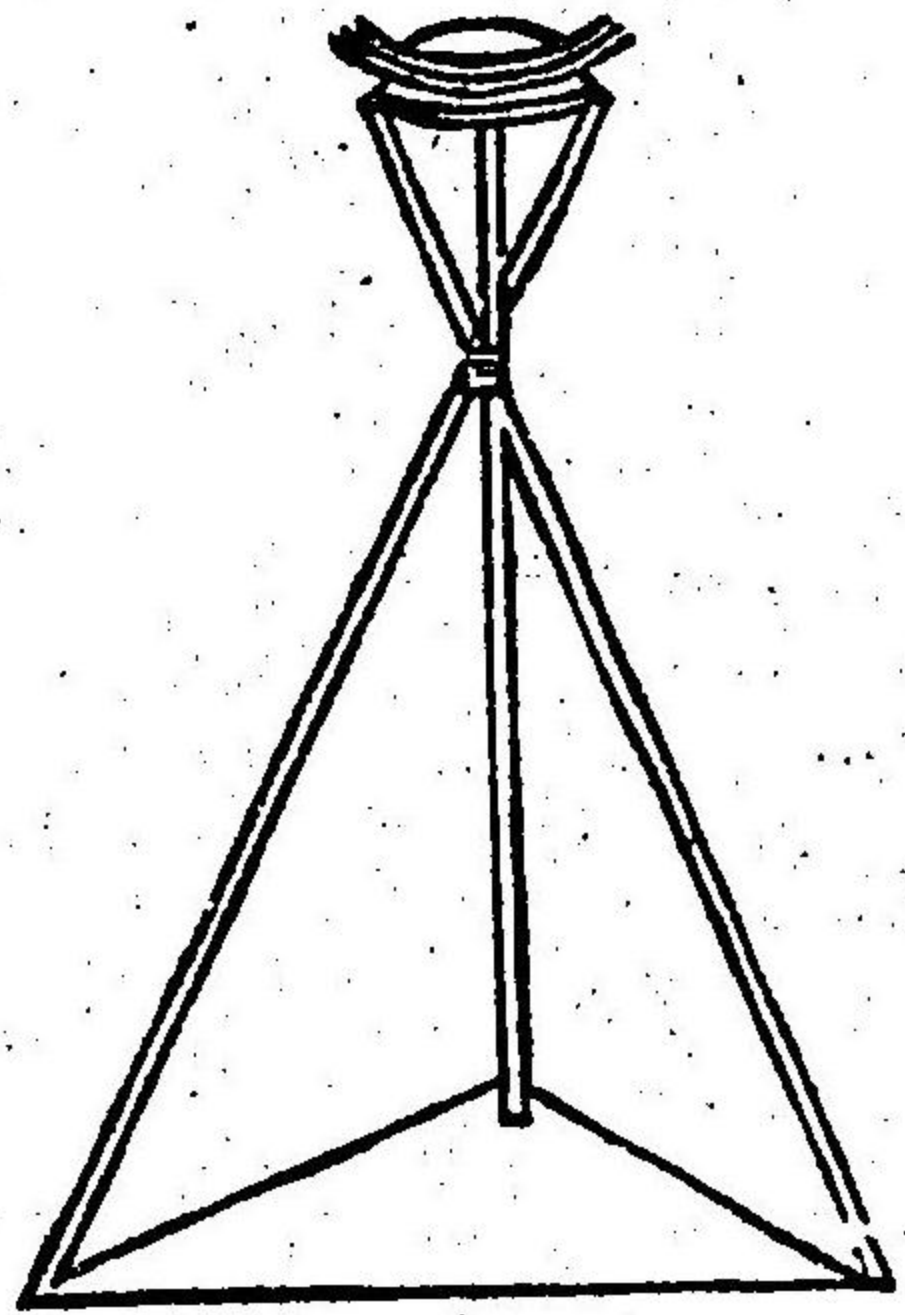
瓶子

高七寸



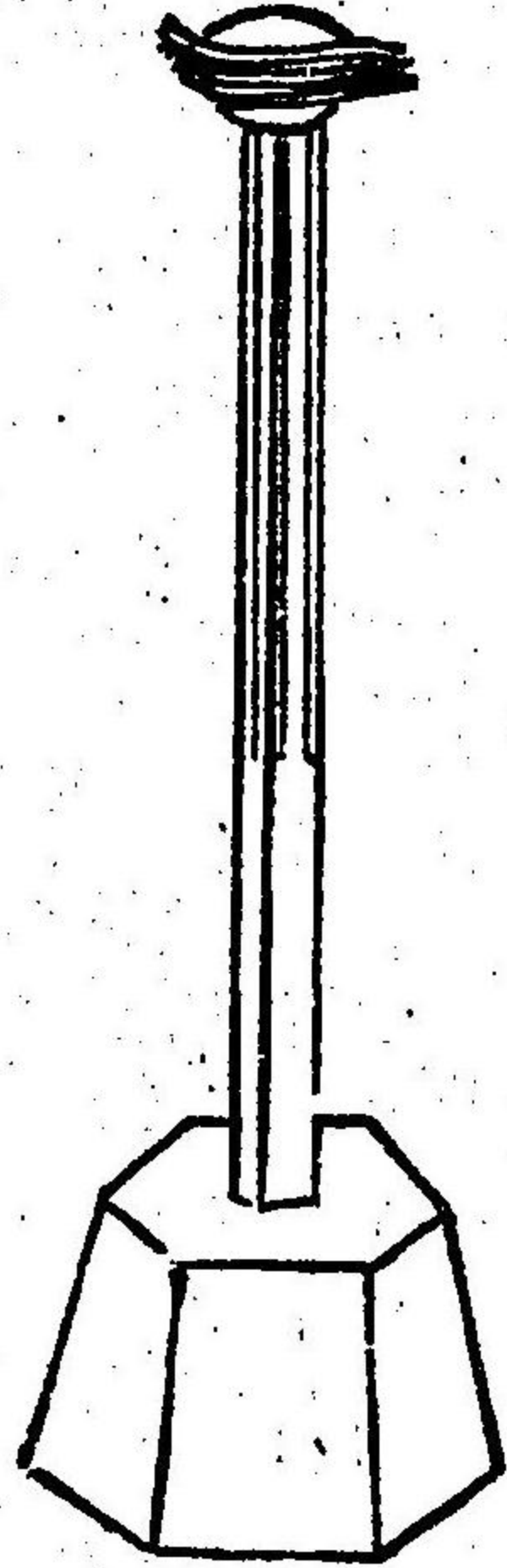
結燈臺

檜ノ丸木ニテ作リ
紐ヲ以テ結フ高サ
二尺五寸或ハ三尺
神殿ノ廣狹ニヨリ
適宜ニスヘシ



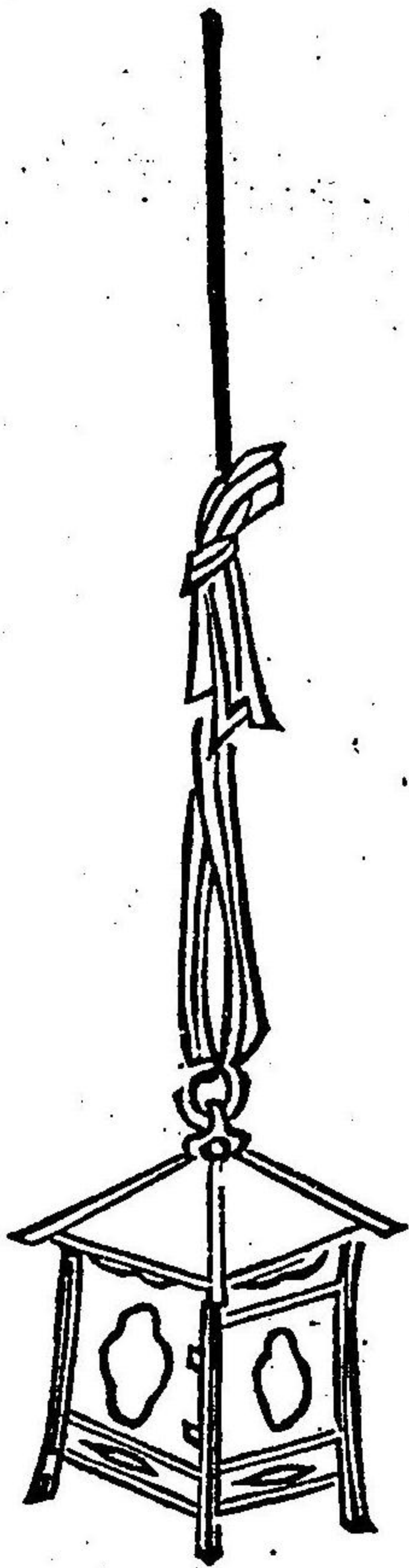
白木燈臺

檜ニテ造ル總高サ
三尺適宜



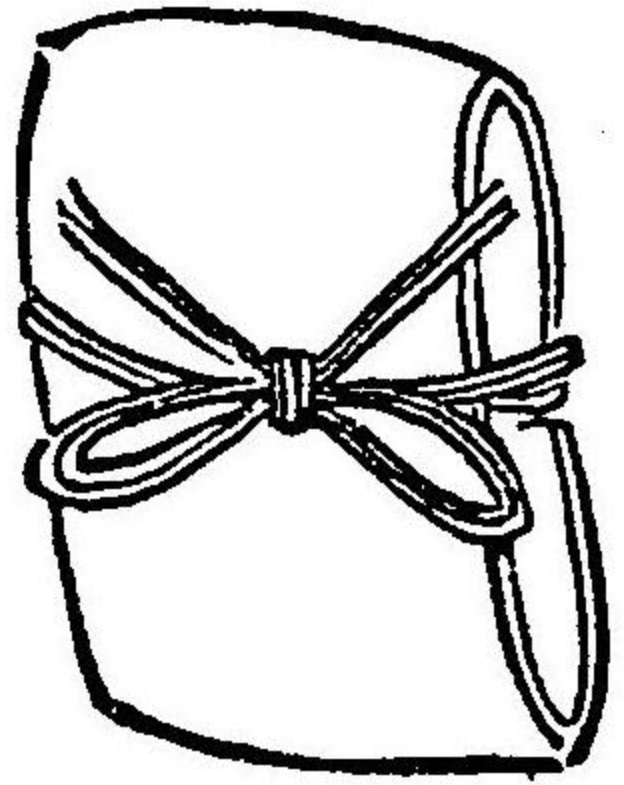
金燈籠

真鍮又銅鉄ヲ以テ造ル大小
寸法適宜ニテ外障ニ用ヘシ

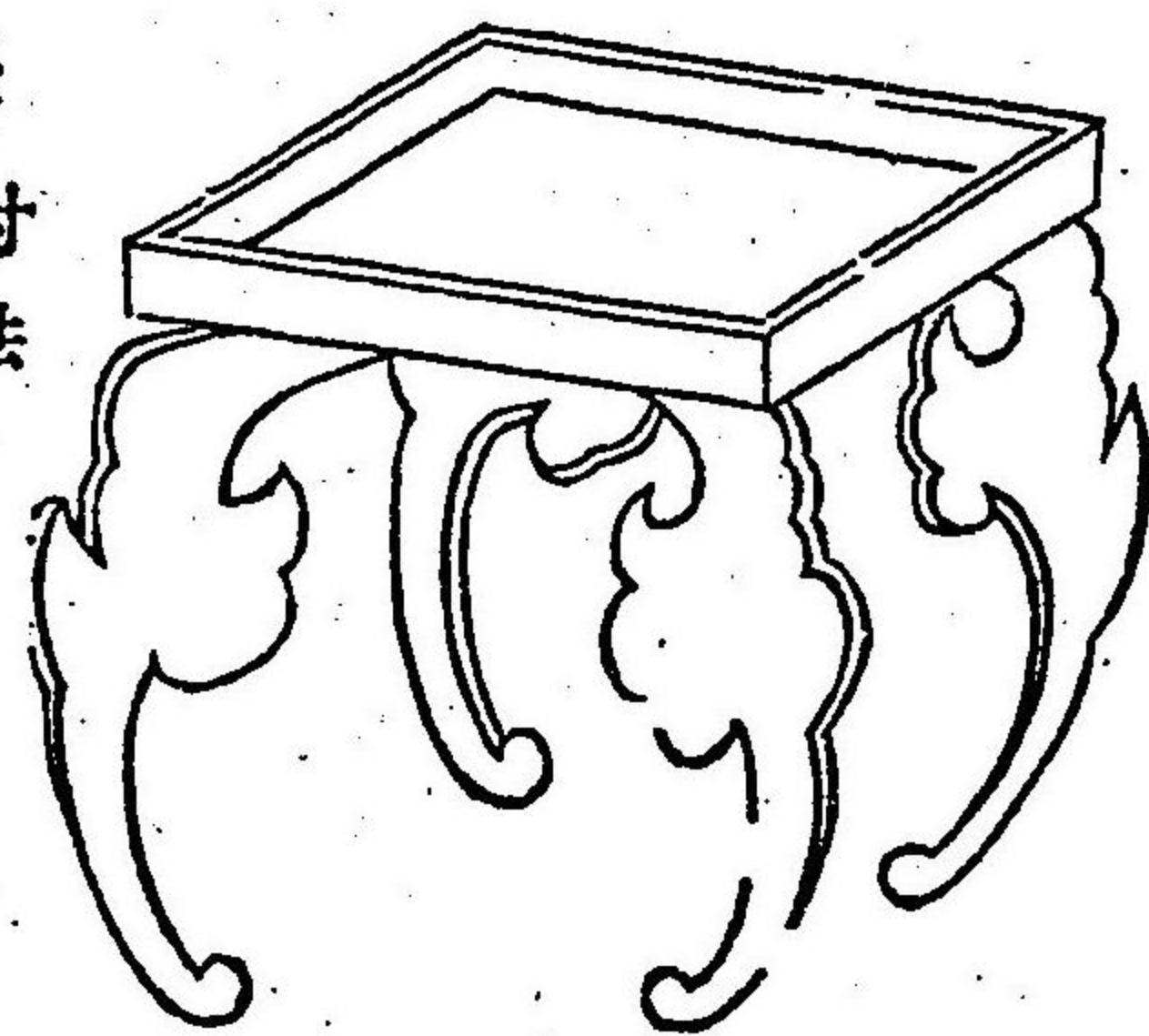


幣物

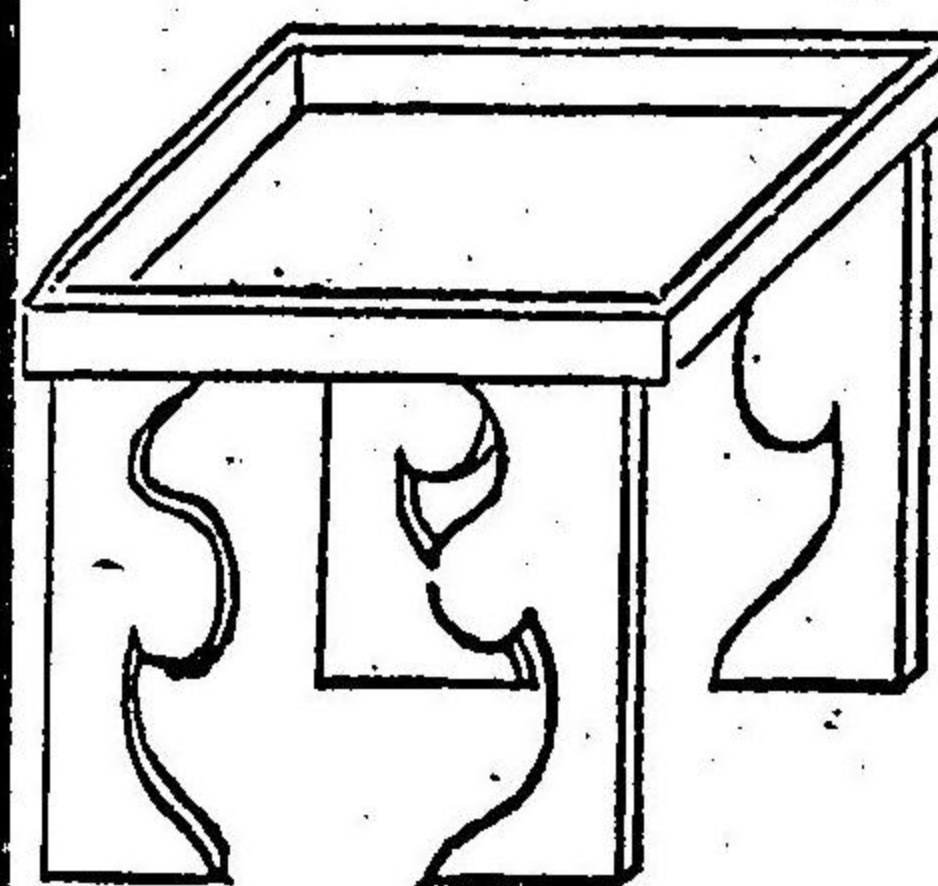
金貨ヲ入レ橙紙大
奉書等ニテ上包ヲ
折掛ニスヘシ



雲脚臺 四方尺



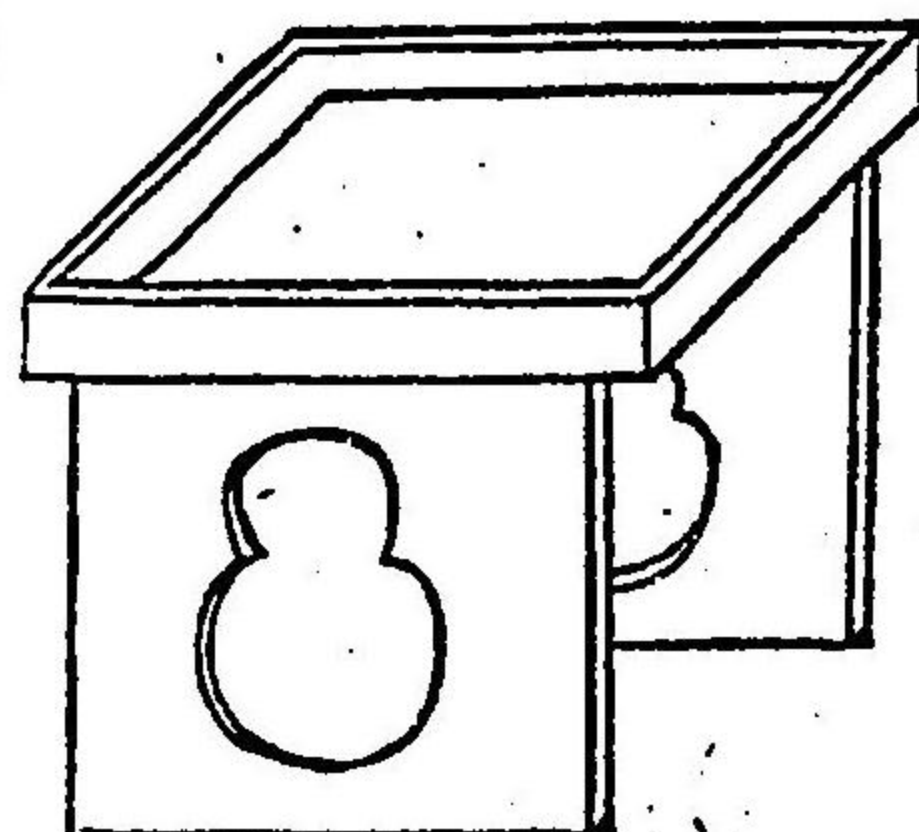
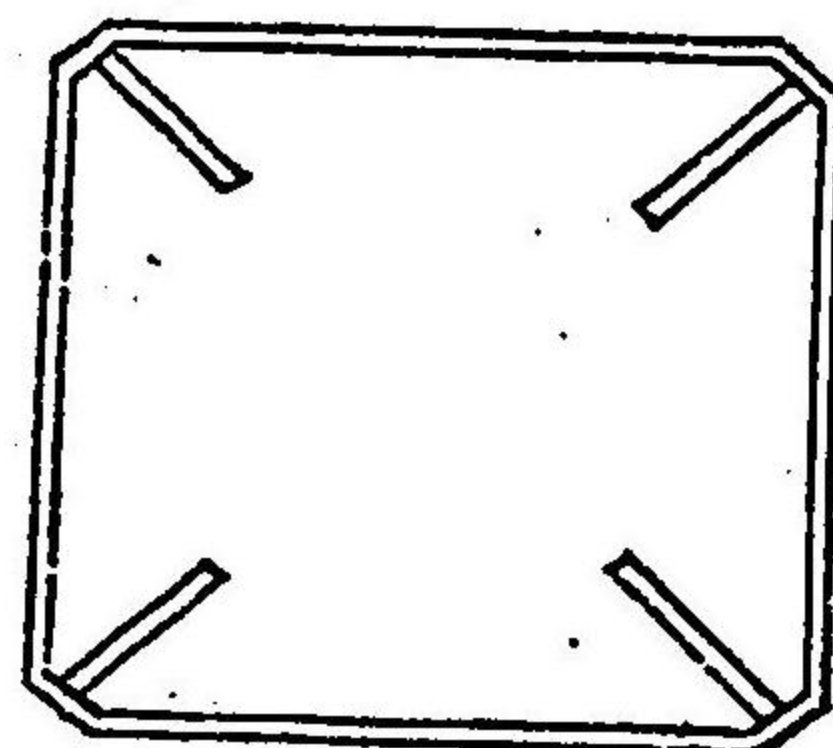
堅脚臺 同寸上法



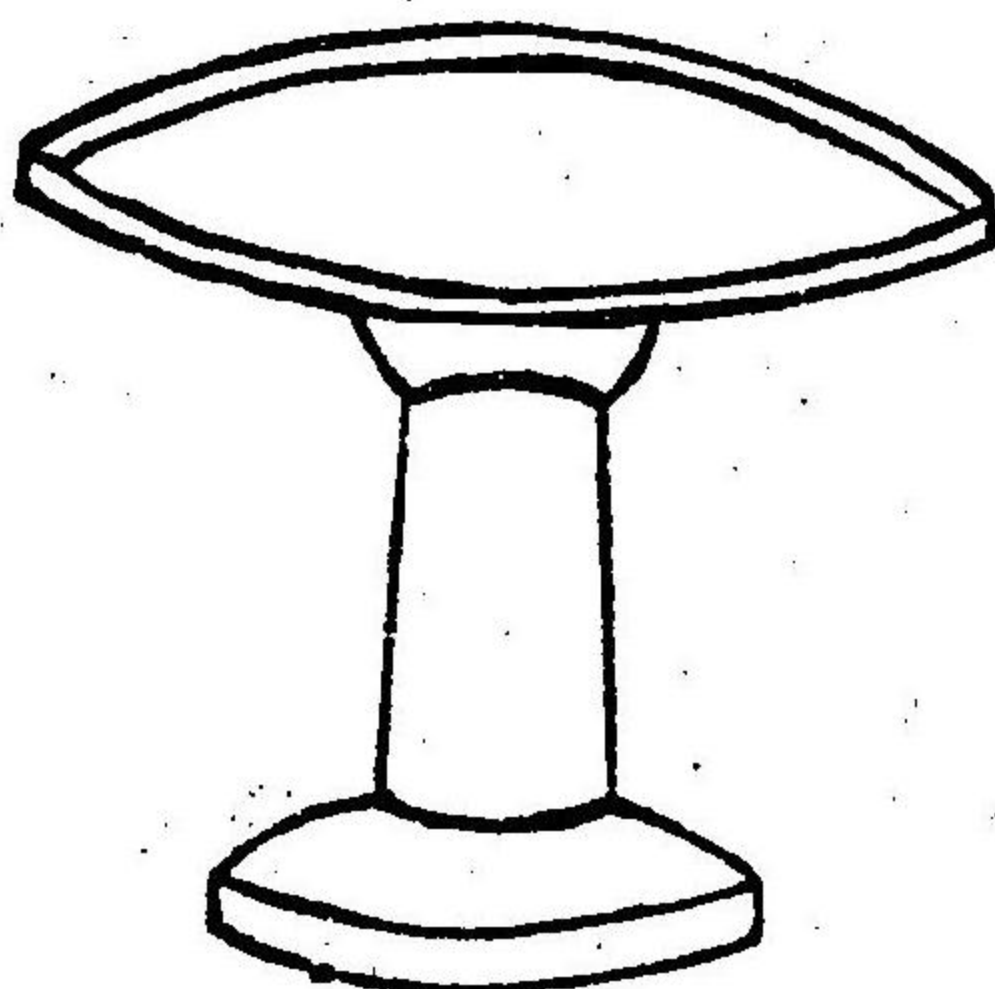
裏

百四

二重操臺 同寸上法



盃高 尺差二寸一

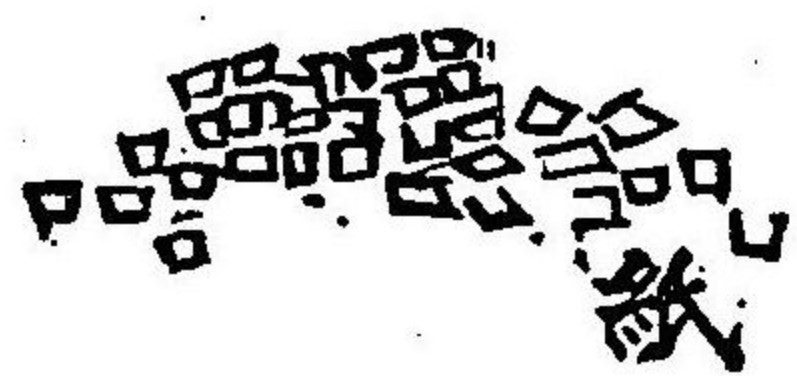


盃大 中

小麻



切麻



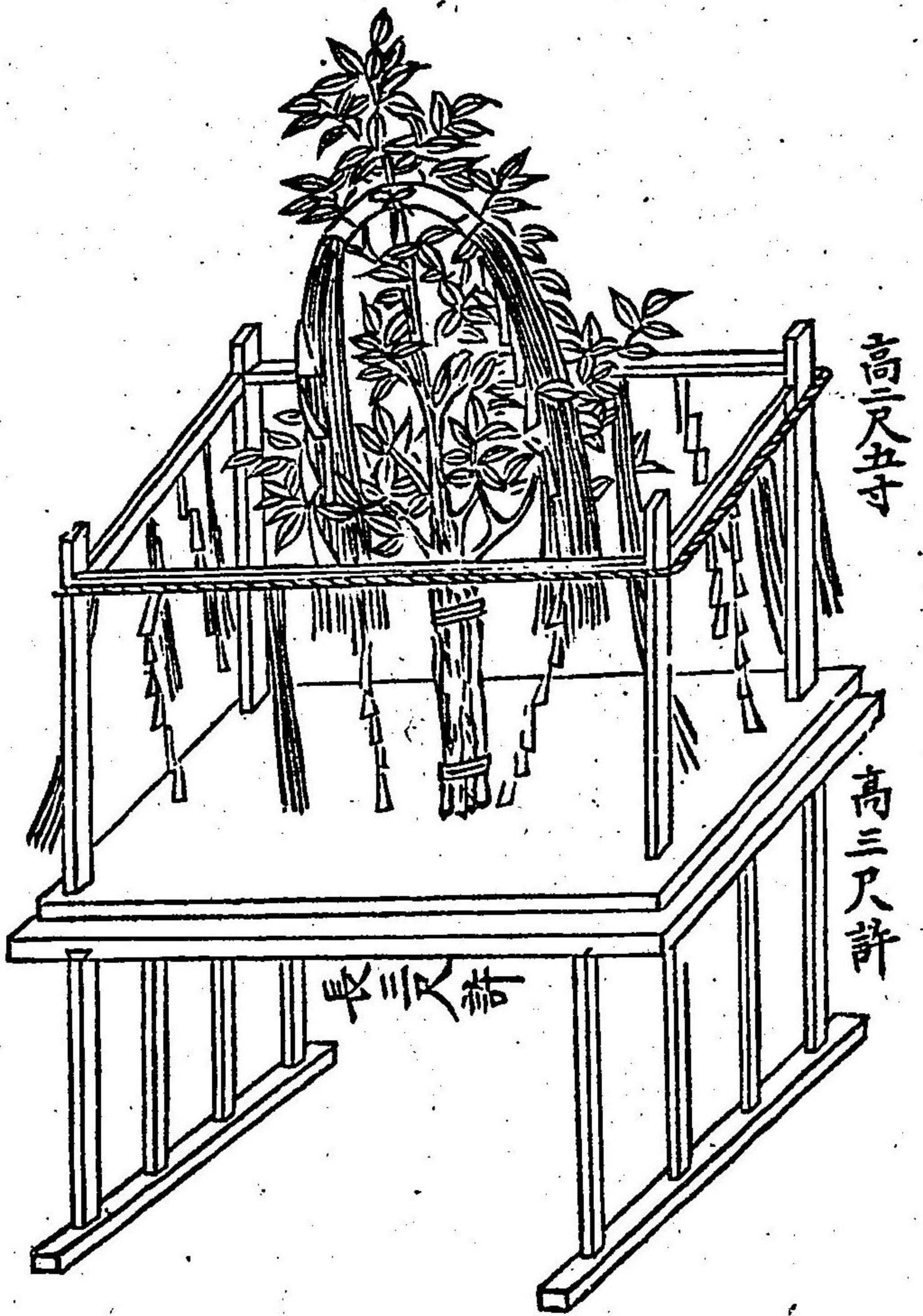
百五

大
麻
三
四
尺
枝



神
籠

其
四
五
尺

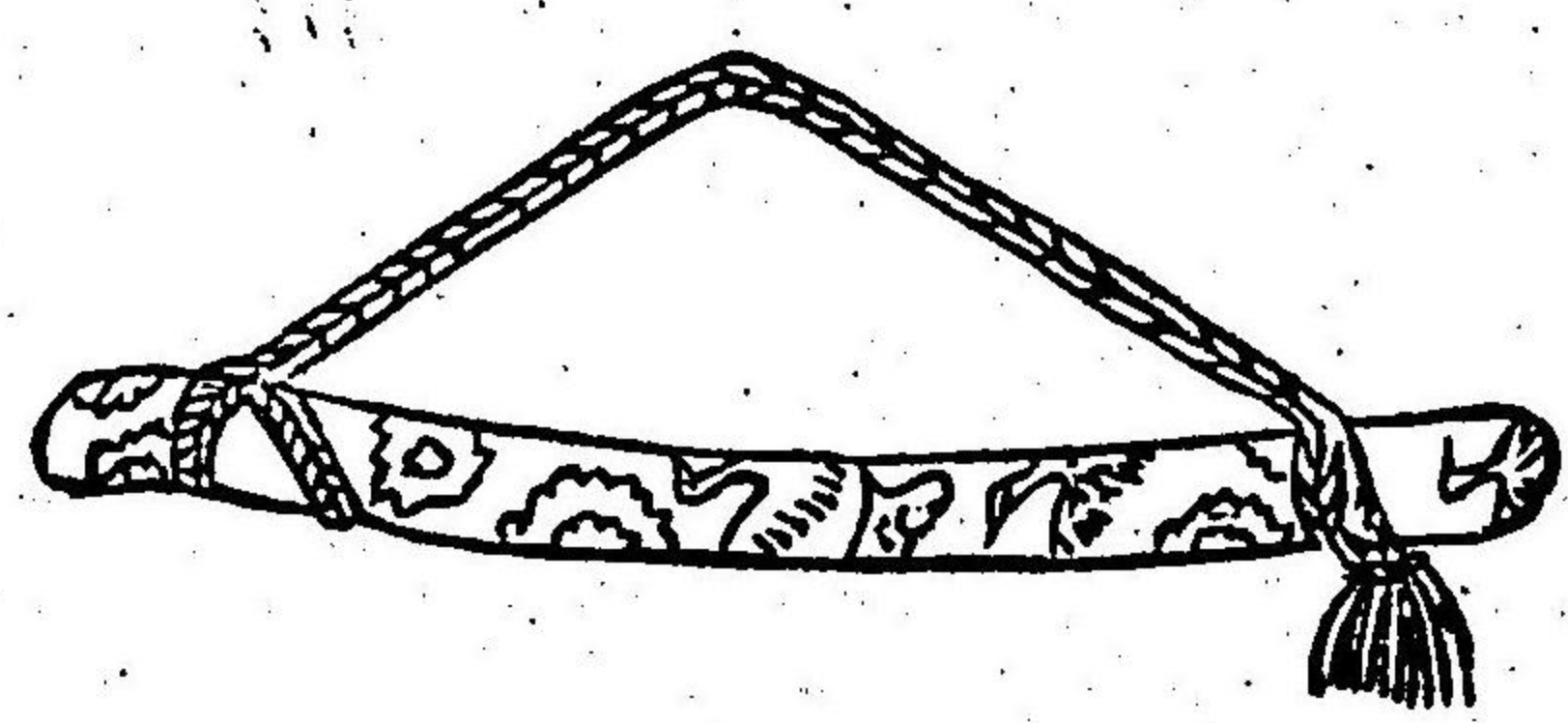


高
三
尺
許

高
三
尺
許

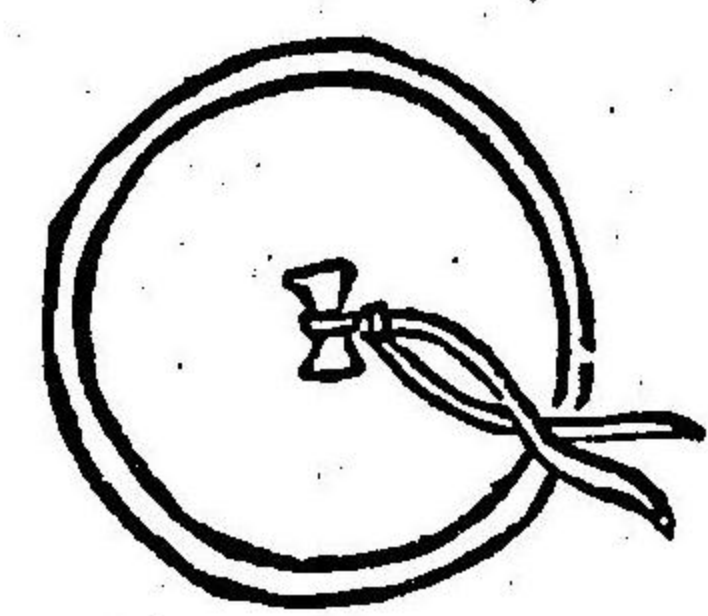
長
三
尺
許

劍一口 白絹ニ収メ大和錦袋入
真紅ノ絶ヲ付クヘシ



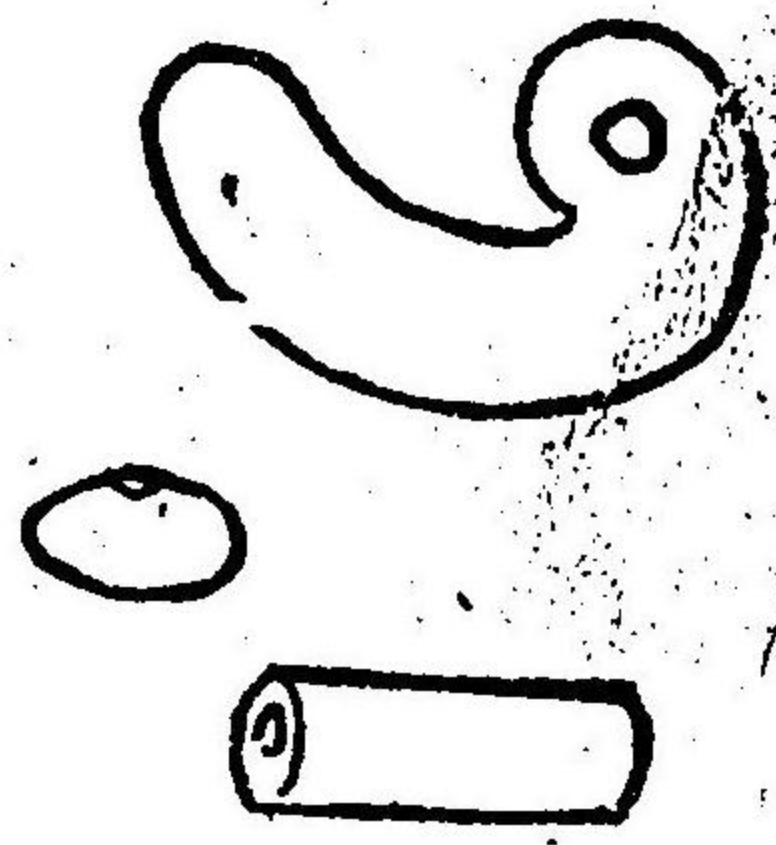
鏡一面

徑リ八寸許
裏ニ如圖紐
ヲ付クヘシ

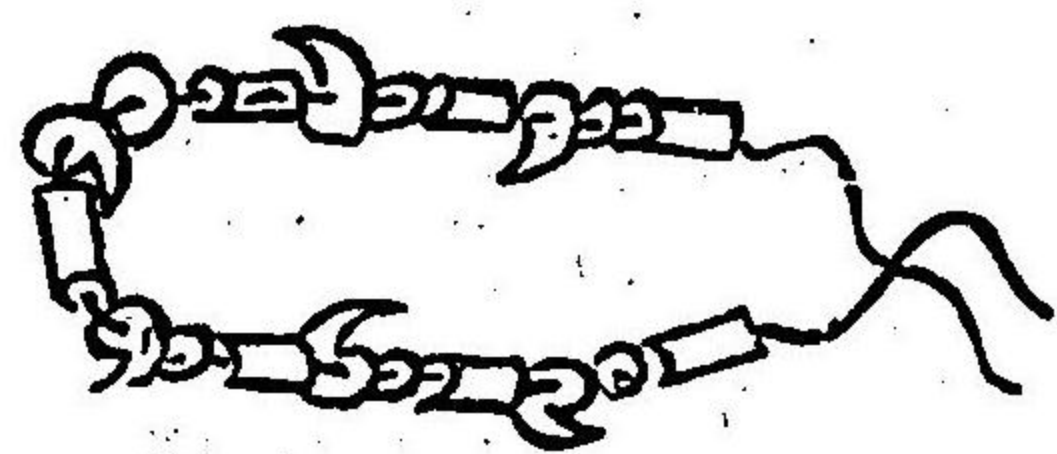


八尺瓊曲玉

玉ハ水晶或
ハ瑪瑙又ハ
鍊物木等ニ
テ造モ可ナ
リ



右ノ曲玉真紅ノ組紐
ニ貫キタル所ノ圖
數ハ二十三十適宜ニスヘシ



右神社祭式を以て年内の祭祀の儀式祝詞等皆定りたれども今又
参考の爲めに古今の大人たちの定め給ひ述べたまひし儀式祝詞
どもをこゝにおゑるす

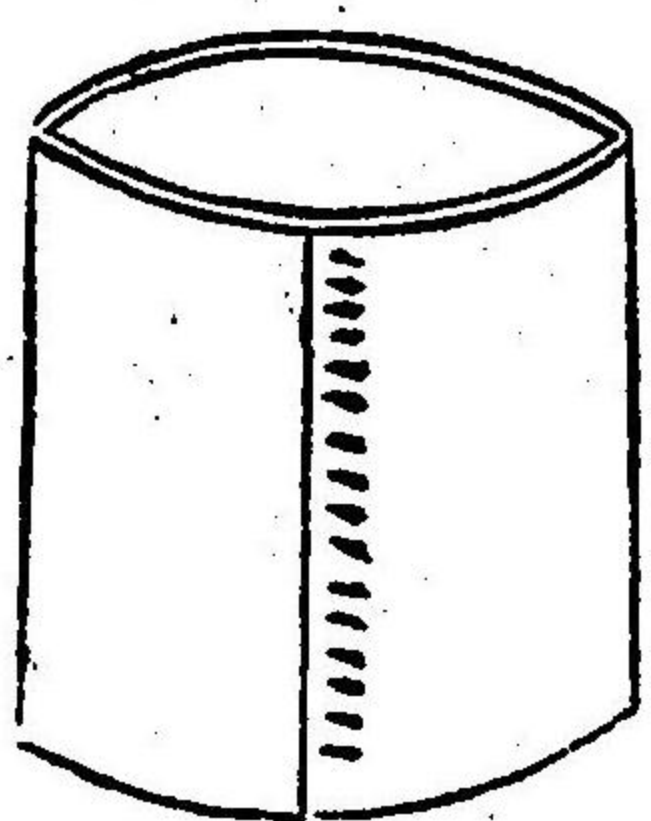
○遷宮ノ用度品 (祭典略)

- 大麻 一本 三尺餘ノ細キ楯ト竹トヲ束テテ末ノ方ニ八垂ニ裁タル
- 紙ト細ク折タル麻トヲ付クルナリ
- 鹽湯 一杯 大土器ニ湯ヲ盛リテ鹽ヲ入レ楯ノ葉ノ二ツ三ツ付タル
小枝ヲ載置ク

白杖 數不定 三尺計ノ梅ノ栲ナリ
 行障 二張 絹或ハ麻布ニテ作ル濶サハ三幅ヲ整ニ縫フ長サ四尺位
 上ノ方ニ桁ヲ入レ紐ヲ付ケテ竿ニ繫ク船ノ帆ニ似タリ
 絹垣 一張 本儀ハ絹ナレドモ略ニハ麻布ヲ用フ濶サハ三幅ニテ幕
 ノ如ク縫フ但シ物見ハ無シ長サハ御羽車ノ大小有無ニ從フ乳ヲ多
 ク付ケテ是ヲ失筈ノ如ク削リ竹ニ狹ミテ數人ニテ擎持ッ
 御羽車 一具 御桶代ヲ載奉ル轆ナリ御桶代大キナル時ニ用フ小サ
 ヲテ一兩人ニテ頂キ奉ラル、時ニハ御羽車ニ及バス
 敷布 一條 麻布一幅ナリ長サハ假殿ト正殿トノ間ノ路程ニ從フ
 薦 數不定 コレモ假正兩殿ノ間ヲ鋪直ス其外祓戸ヲ始メ用途多ク
 レハ數帖設ケオクベシ
 幌 燈臺 案 ナホ殿内御筋ノ裝束調度及ビ諸般ノ用物數多アルベ
 シ
 覆面 手袋 肩當 麻布ニテ作ル御桶代ニ手ヲ觸レ又ハ御羽車ヲ昇
 モノ、用具ナリ

木綿緇 麻一條ヲ用フコレモ御桶代ヲ頂クモノ、具ナリ
 宮原穎手録なる書に寛文四年申辰十二月外宮假遷宮の時御笥作
 人の作れる假の御桶代御假櫃の圖なりとて其寸法までを記るさ
 れたればこゝに轉載す

御正體御桶代

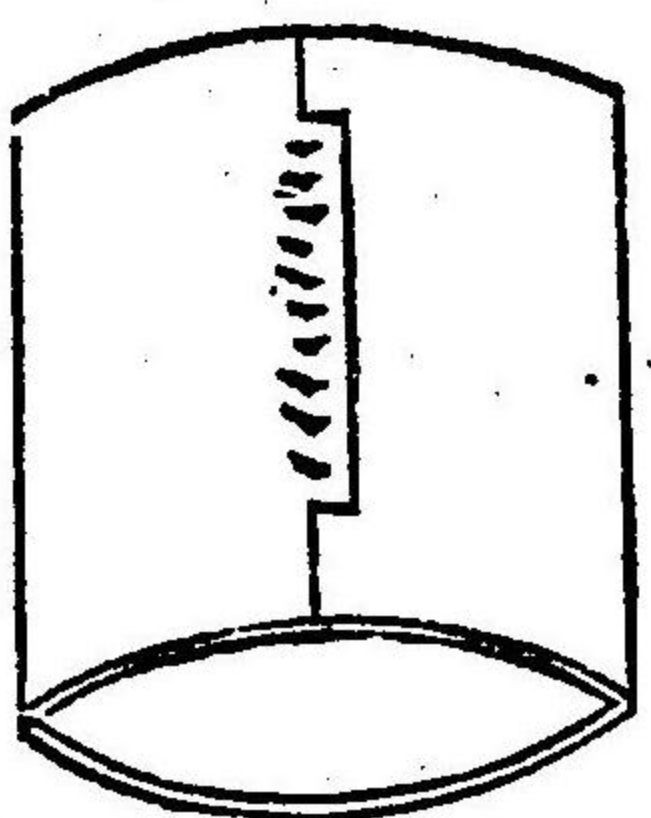


深サ九寸

身
 底板 徑一尺五寸三分

板厚二分半 樺ニテ九所トツル

蓋

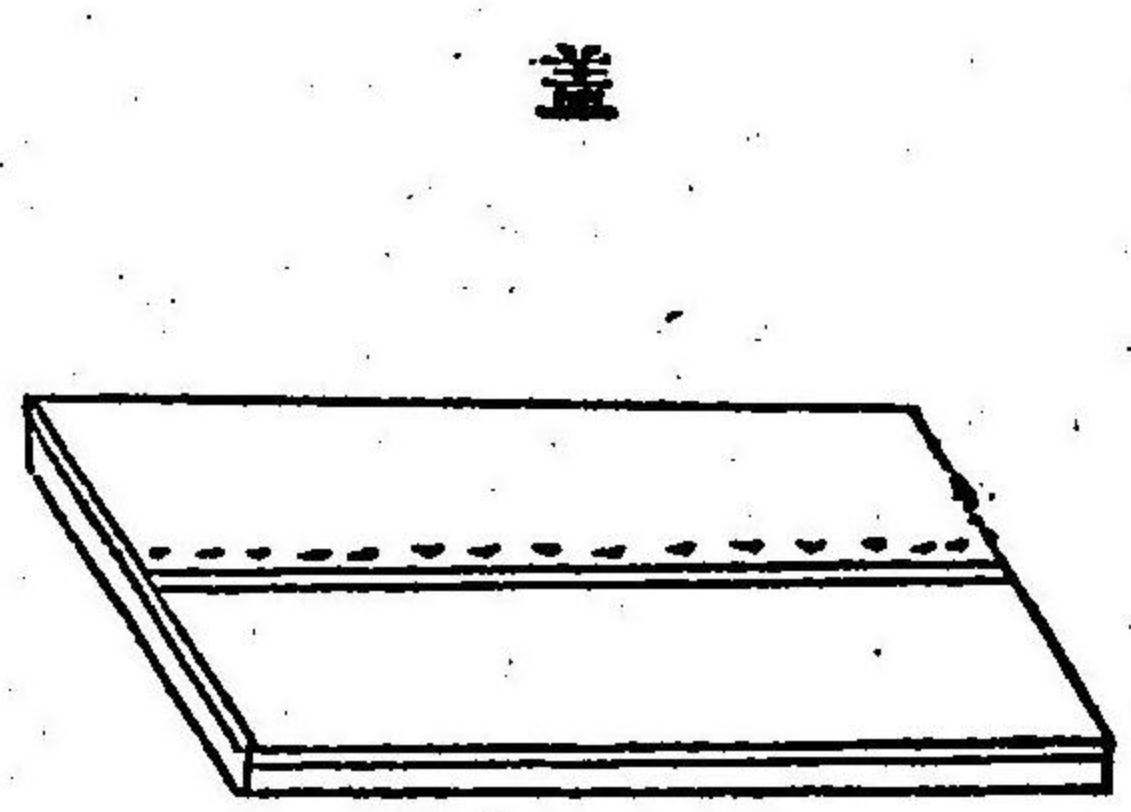


深サ九寸

口徑 一尺五寸 板厚 一分

蓋板徑一尺五寸七分 板厚三分 樺ニテ八所トツル

同御假櫃

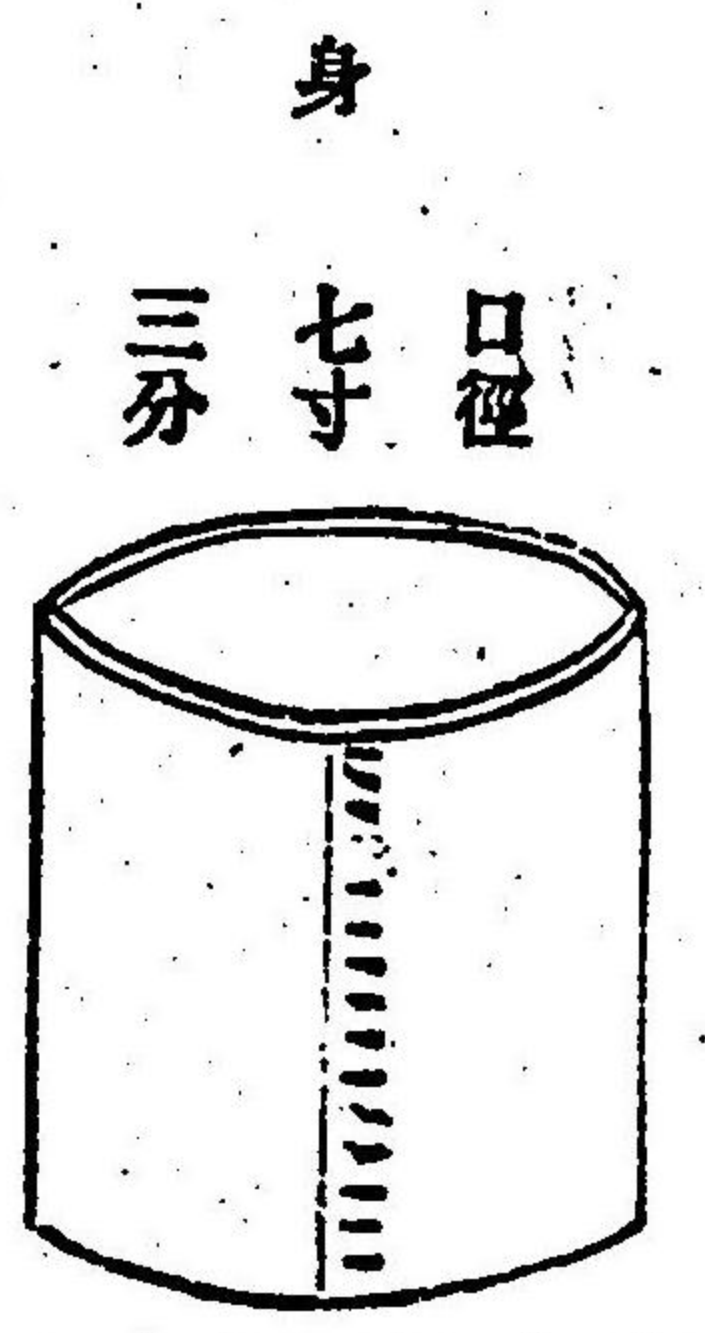


巾一尺七寸一分
長一尺九寸八分
深四寸六分
圖ノ如ク中ニテハグ

身

相殿御繩代

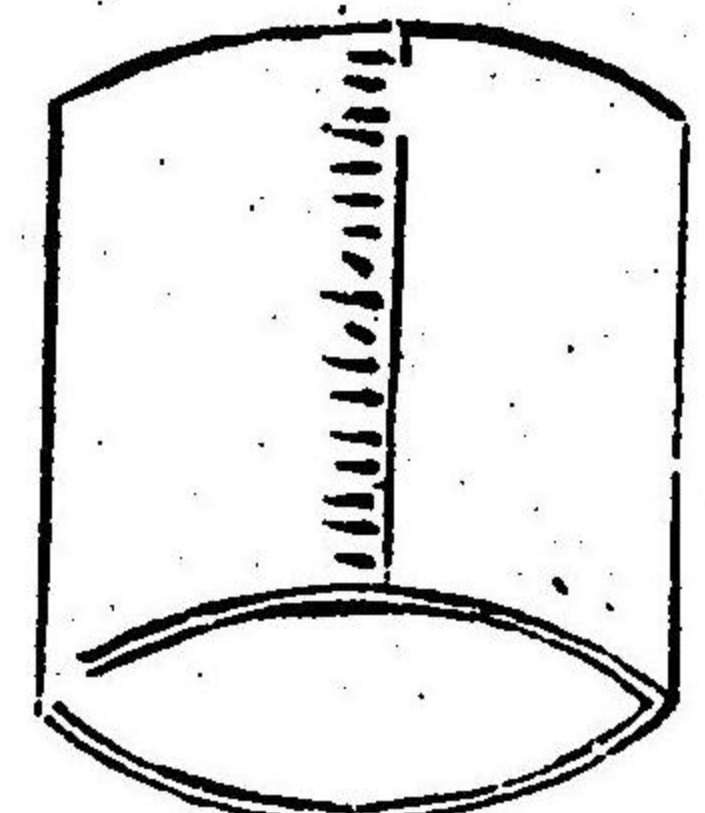
板厚一分



底徑八寸二分
底板厚七分
七所トツル

蓋

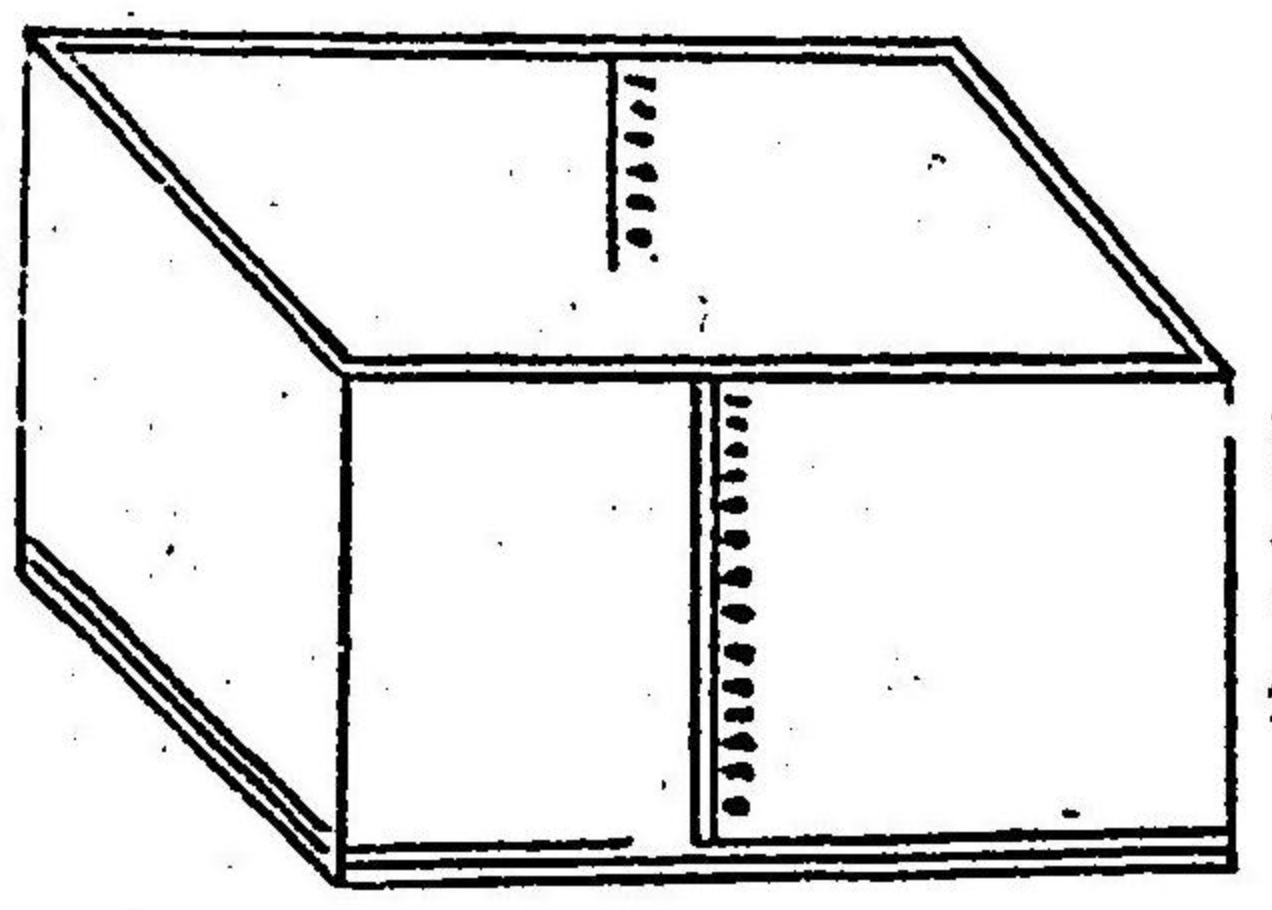
底徑八寸二分
底板厚二分



口徑七寸七分
六分

深七寸一分

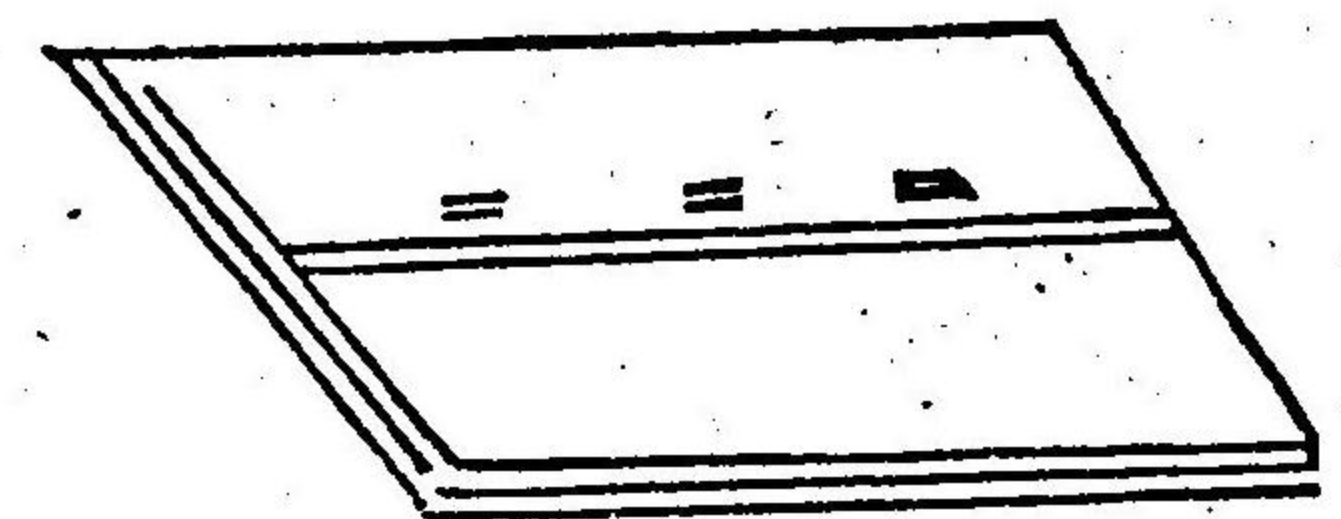
深サ一尺四寸



底板長二尺二分
底板巾一尺七寸三分
底板モ中ニテハグ也
底ヲ樺ニテ二十所ツルナリ

板厚一分

同御假櫃

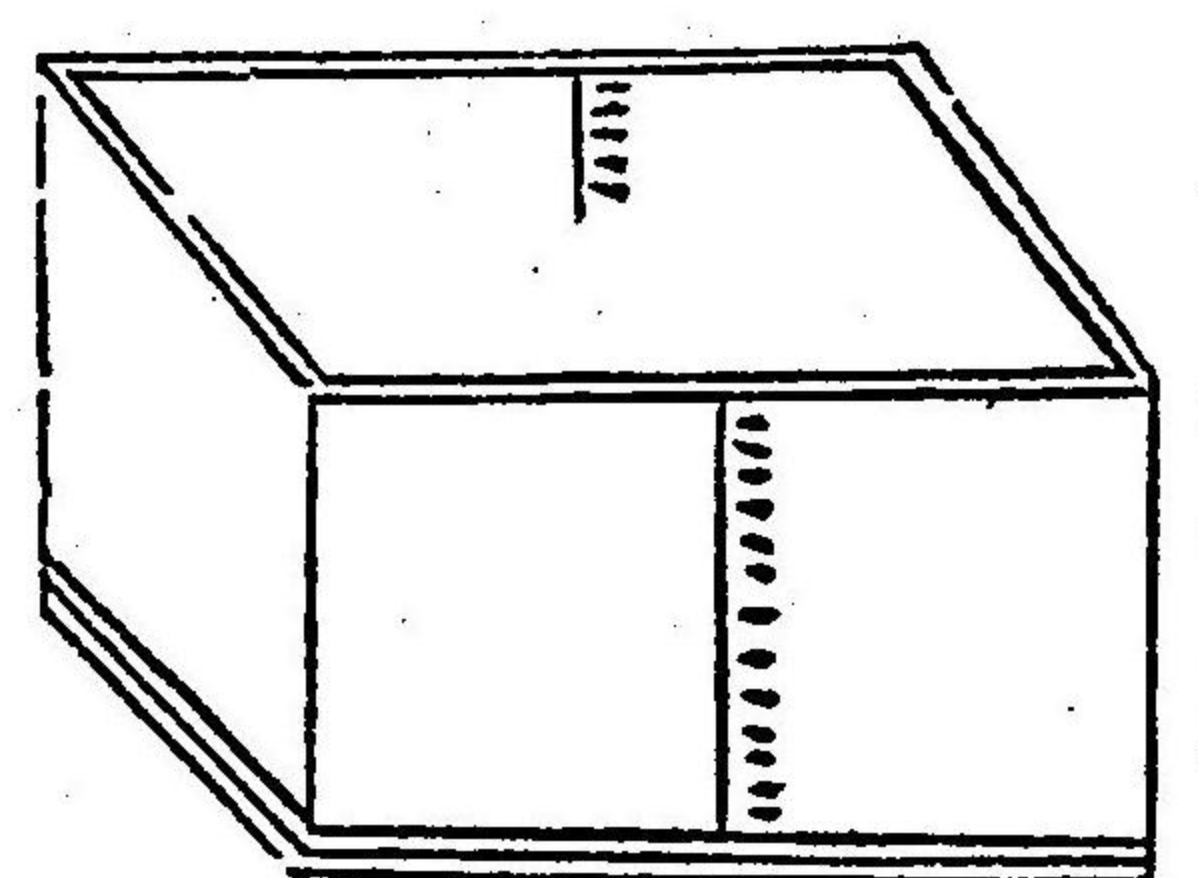


蓋ノ板長一尺三寸七分
横巾一尺九分
トサ様ハギ様底ニ同ジ

深サ三寸六分

身

長サ一尺二寸五分



深八寸七分

板厚側モ底モ一分
横巾九寸八分
底板中ニテハジ縦五所横三所トツル

○遷宮式の行列

警蹕 人數不定 櫛ノ枝ヲ執テ二行ニ列リヲ、ト微音ニ呼ナガラ徐歩ス但シ出御ノ時ト途中ト入御ト三度ニ三聲ツ、ナリ
白杖 人數不定 左右ニ列歩ス
鹽湯 一人 櫛葉ニテ灌ギナガラ行ク

(祭典略)

大麻 一人 左右へ打振りナガラ行ッ

絹垣 内ニ御極代アリ前後ニ敷布ノモノアリ左右ニ行障アリ

神寶 渡御ニ供奉スル事便悪シクハ鎮御ノ後ニ運ブベシ

後取 事ニ馴レタルモノ三四人前後ヲ監視ス此次ニ祭主以下神部ノ

召具等群行ス

○每朝伊勢兩宮を遙拜する詞

(每朝神拜詞記)

神風乃伊勢國折鈴五十鈴原乃底津石根爾大宮柱太敷立高天原爾比木
高知氏鎮座坐須天照大御神乃大朝廷外宮乃度會乃山田原乃底津石根
爾大宮柱太敷立高天原爾千木高知且鎮座坐須豐受大御神乃大朝廷及
二宮乃相殿爾座須皇神等枝宮枝社能神等乃御前乎慎美敬比畏美畏美
毛遙爾拜美奉留

○祭日神拜詞

(皇大神宮大麻奉祀式)

掛毛久 恐支天照皇大神宮乃大麻乎齋支奉留此神床爾慎美敬比仕奉且
畏美畏美白久過知犯留世許々多久乃罪乎水乃淡乃早瀬乃浪爾消失留事

乃如久淡雪乃春日乃影爾消失留事乃如久消失比賜皇大神乃貴乃
御孫止大座須天皇尊乃所知食須政事波天地乃其平爾顯見蒼生乃生留
日乃職業波彌益爾彌廣爾退留後乃快樂波永久爾無窮久守利賜比授美
賜布大御德乎尊留喜留供進御酒御供乎平久安久所聞食止畏美畏美白
須

○元日

(祭文例)

掛毛 恐伎吾大神乃大前爾恐美恐毛白久新支年乃新支月乃新支日能朝
日能豐榮登爾拜且仕奉流大御饌大御酒乎皇神乃御心爾平久安久赤丹
能穗爾聞食登白須如此仕奉爾依且今母往前母皇御孫命能御世宜手長
乃大御世登湯津石村能如久伊波比依佐奉理茂御世能足御世爾福爾奉
理仕奉流親王諸王諸臣百官人等宜彌高爾彌廣爾伊加新入桑枝能如久
命立榮給比天下泰平爾公民宜守給比惠給爾登恐美恐美稱辭竟奉止久白

○月祀

(旬日或ハ朔望)

(全上)

掛母 恐伎吾皇神能大前爾恐美恐毛白久神那賀良母皇御孫命乃手長能
大御世乎堅石爾常石爾齋奉理茂御世爾幸奉且萬世爾大座坐新給比仕

奉流親王等王等臣等哀幸久守給比惠給比大神能氏子宜始且天下乃百姓其廣久厚久撫給比助給比取作流穀等爲八束穗能茂穗爾成幸給比恐美恐母白

○宮地鎮謝祭

(全上)

掛母畏伎生井神榮井神綱長神阿須波神波比岐神乃大前爾恐々毛白久皇神等乃敷坐此大宮所乎(人ノ家ニテハ此家)今毛往前毛彌益々爾守幸給比千代万代毛平久安久下動美寄來平地震乃災无久大雨零利水溢止留毛大地乃岩崩傷布事无久堅石爾常石爾守給幸給止禮代乃幣帛乎捧持氏恐美恐母白

○大殿祭(假遷宮正遷宮トモ)

(全上)

掛毛畏支屋船句々能智神屋船豐宇氣姬神乃大前爾恐美恐母白久此大宮乎(人ノ家ニテハ此)神隨守賜幸賜氏大宮地乃(家地)底津岩根乃極美下津綱根昆虫乃災无久高天原波青雲乃霧久極美天乃血垂飛鳥乃災无久打堅留釘乃接爾取茸留草乃(或ハ)曝伎无久御床都比乃佐夜伎无久(人ノ家ニテハ)伊都志支事无久夜伎无久目乃伊須々(平久安久守幸給止幣畏美畏母白)

○祈雨祭

(古學詳辭集)

某國某郡某村乃下津岩根爾宮柱太知立氏鎮座坐須某神社止稱辭竟奉爾掛卷母畏支某大神乃大御前爾姓名慎美敬比畏美畏母白須此乃處爾大坐々且大宮乃墜戶押張且見遙之加坐須四方乃國倍毛波之大神乃高支尊支思賴爾依且安國乃足國止平久耶生出爾國益人等毛安久穩爾其取作留雜々乃穀物等波年每爾傷布事无久伊加志瑞穗爾榮延實且利有來乎之今年五月乃月立乃頃與雨不降早續且有經續殖之田毛播之鳥毛日爾添且美損波延枯止奈乎爲爾公民等歎支悲美大神乃御前乎常利異爾齋比奉且奇支之異支之恩賴乎乞祈奉且止之某月某日與利日波幾日夜波幾夜乎吉日乃吉夜止擇定且神司等諸伊豆乃忌屋爾忌籠且利大前爾捧奉爾幣帛波字豆乃御饌字豆乃御餅爾御酒波壺上高知獲腹滿並且海物山物野物爾至留迄入取之机爾置足且波之神主乎始且里々乃百姓等迄各大前爾參集侍且夜波夜乃明留極美晝波日乃暮流迄鶉成須伊這比回利庭雀群統居且奉齋奉祈狀乎神隨看行坐且奉流多米津物乎安幣帛乃足幣帛止平久安久聞食受賜且比四方八方乃公民乃人等我歎支慨幸事乃狀乎米具久悲久思

行坐且今毛往先毛彌益々爾嚴乃御靈乎幸開坐且彼方乃山乃峽此方乃
 山乃峽利雲立騰且海神乃與津宮方爾就比和多利且忽爾天津水乎令降
 賜比或波神鳴利震動且穀等傷布虫乃類乎毛拂比賜比每田乃水口野澤
 乃澄水多藝知流且手肱爾木沫搔垂向股爾汚搔寄且取作留與津御年乎
 始且朝夕爾耘利培比勞伎作留陸田物等利與山縣爾蒔流青菜乃類爾至迄
 毛成傷受爾榮爾榮爾繁爾繁且八束穗乃茂穗爾成幸開賜比百姓等我心
 足且惠々良々爾笑比饒布許里奇支之御靈乎幸開賜比其家内毛安久平爾
 夜守日守爾守賜比於賜止爾鹿自物膝折伏世鶴自物頸根株拔且恐美恐毛
 白須辭別且白久今殊爾招奉流豐字氣毘賣神大年神御年神若年神天水
 分神國水分神天久比者母智神國久比者母智神乃大御前爾白須大神等
 乃此乃處爾天翔利來坐且此獻流物等乎平爾安久爾相嘗爾開食且奉齋奉
 祈事乃狀乎相宇豆那比坐且高支貴支恩願乎幸開坐且速久爾天津水乎分
 利施之賜比四方國乃民紳等我農業乃行乎助給比惠賜比作止作留年穀
 等乎豐爾加令稔賜止爾恐美恐毛白須
 又白久如此奉仕中爾不慮毛過犯須事乃有乎見直志開直志坐且大神等

乃御心毛和親爾祈白須事乃由乎馳出留駒乃耳彌高爾開食受給止爾姓名
 恐美恐毛白賜止久白須

○祈晴(霖雨ノ時ニ)

(祭文例)

掛母恐支吾大神乃大前爾恐美恐母白久頃日霖雨難晴且百姓乃農事流
 損及吾大神乃厚助爾依且斯此災汝可止登恐自物思議且今日能生日乃
 足日爾禮代能幣帛宜捧持且恐美恐母稱祥竟奉流狀其平久安久開食止
 白如此仕奉爾依且此霖雨忽晴且百姓等復手肱爾水沫搔垂向股爾汚搔
 寄且取作留與津御年宜始且作々物等成傷受豐爾牟久佐加爾令得給
 止爾恐美恐毛白

○同 報賽(雨ヲ祈リ晴ヲ祈リテ)

掛母恐支吾大神能大前爾恐美恐母白久先爾甚斯早有且(祈晴ノ報賽ニ
 氏トシ)公民乃農稼枯止乎為新時吾大神乃大前爾雨令零(祈晴ノ報賽ニハ
 スベシ)給止爾祈白然乎流祈白母新々驗久甘雨令零(或ハ雨)給流事乎貴備喜爾謝乃
 幣帛宜捧持且恐美恐母稱祥竟奉其久平久安久開食止白

○神職等諸乃御社乎拜奉留時其前爾白須詞 (古學諄辭集)

此乃處爾鎮座坐須掛卷毛畏使大神乃宇豆乃御前爾忌麻波理淨麻波理
且慎美敬比畏美畏毛白須

皇大御國波二柱御祖乃生坐留大御國志爾在禮大御神等乃御道波千代萬
世爾無極天地登共爾榮米志給平波申須更那天津日嗣所知食須皇美麻
命乃大御世平堅石爾常石爾齋奉利茂御代乃足志御代爾幸帶給比親王
等王等臣等百官人等平長久平久守給比天皇我朝廷爾伊迦志耶久波延
乃如久立榮衣令仕奉給比氏子乃益人等爾益々爾榮米志給比四方乃國乃
青人草等種々乃禍無久取作五穀平始且作里作留物等平惡風荒水爾不
相給八束穗乃茂穗爾成幸帶給比姓名家內乃諸人親族諸乃災難無久守
幸帶給比漏落平事爾神直日大直日爾見直志聞直志坐豆夜乃守日乃守
爾謹給比於給止爾鹿自物膝折伏爾自物頸根突拔且畏美畏毛白須

○祈瘴病五章

(祭文例)

第一章(他村ニハ病アレドモ其
村ニハ無キ時ノ祈ナリ)
掛毛畏支吾大神乃大前爾恐美恐毛白久此頃四方乃里々爾病起且人多
爾惱氏失毛留數多有乎此村毛波之吾皇神乃敷坐里登神隨恩賴乎幸給布

之爾有禮平久安久有經事乎尊備喜備今毛今毛爾益々爾守給幸給比村乃
內波爾諸病不合有氏子等我心毛安久轉樂久守給幸給止今日乃生日乃足
日爾禮代乃幣帛乎捧持氏恐美恐母美稱辭竟奉乎且久平久安久聞食止白。

○第二章(吾村ニ病有ル
時ノ祈ナリ)

掛毛畏支吾大神乃大前爾恐美恐毛白久此里毛波之吾大神乃鎮坐氏神隨
靈幸爾坐須里之爾有禮浦安支樂支里止氏子乃諸人等喪无久事无久有經
乎之頃日村內爾病起且人多爾失奴此乎思爾吾大神之氏子等平守給幸給
布高支貴支恩賴乎波之里氏此病波可止登恐自物思議且今日乃生日乃足
日爾禮代乃幣乎捧持氏廣久厚久稱辭竟奉留狀乎大神乃御心爾平久安
久聞召止白如此仕奉爾依且從今後波村中爾此病保毘許留事无久惱乎
物爾乎速久瘥給比直給比堅石爾常石爾命長久夜守日守爾守幸給止爾恐美
恐毛美白

○第三章(病有ル時大那牟遲神少名毘古
那神ヲ勸請シテ祭ル祝詞ナリ)

掛毛畏支大那牟遲大神少名毘古那大神二柱大神乃大前爾恐美恐毛白
久比日四方八方乃里々爾病起且人多爾惱氏失毛留不少事乎人々甚久

歎愁氏諸共爾議恭智氏古乃法乃任大神等平招奉齋氏若生平哀給布廣
支厚支恩願乎乞祈奉止乎為且今日乃生日乃足日爾禮代乃幣乎捧持氏大
神乃大前乎恐美恐美稱辭竟奉止白如此仕奉事乎平久安久閉召氏神代
乃初乃時大神等乃諸乃病乎治留藥方止禁狀方乎止定給比今世爾至迄青
人草乎助給比救給布恩願乎神隨幸坐氏病臥流世諸人等乎直給比瘥給比
撫給比惠給止恐美恐美白

○第四章(山城國八坂神社尾張國津島神社ナ)

掛毛畏支健速須佐之男大神乃大前爾畏美畏美白久此頃此村中爾病有
氏人多爾身失奴故是乎以氏村人等進母不知退母不知思歎氏諸共爾相
議氏吾大神乃高支貴支恩願乎乞爾疑奉止乎為且今日乃生日乃足日爾大
神乎此神籬爾坐奉利且恐美恐美稱辭竟奉且久乎神隨閉召止白如此仕
奉爾依且遠津神代爾大神乃吉備國爾幸行之時蘇民將來及其妻子乎救
給比助給流幣事乃如久今毛惱幸里人等乎立所爾瘥給比直給止爾大前爾種
々乃幣帛乎机代爾置足天波之恐美恐美稱辭竟奉止白
○公事根源集釋の頭書ハ午頭頭王蘇民將來の事を記るされたり左

にこれを記載す

重篋内傳にも載たり備後國風土記より出たる事あれば古より言傳
たる事と聞えたり直指秘傳抄第十三神代錄日そさの男の尊根國に
くたゞ玉ふ時雨にむひ風に吹れ辛苦はなはだしよりて宿を講神よ
かり玉へども講神ゆるされず時みたわの國に蘇民將來且且將來と
いへる兄弟は者あり蘇民の家貧けれども愛惠也且且の家富けれども
も心憎不仁也業盡鳴尊先宿を且且より玉へり且且かし奉らす蘇
民よかり玉ひしかのし奉りて且つ又奉養分の及ふ所を盡せり素
盡鳴尊此飲いどう喜びおとしまし如何あてか恩を謝せむとれも
はしめず時其夜あはの國より暴疫鬼來りて國民は死はるばるむとす
尋探り其事をしらしめて蘇民よ告てのたははく此夜此所に惡神
來るべしふる者の亡敗すへし我其禍を除くは方汝知れり汝等及家
内者等茅輪を帯へし然らば禍染着すること不能蘇民命にまたがふ
其夜はたして暴風通りぬ明朝其所の人民悉く病惱んで或は死或は
病みき尊又蘇民よ告てのたまくと後世疫氣流行せむとき汝か子孫

の家門を題して蘇民將來子孫宿と書之只茅輪を門楣と懸へ一然ら
は疫氣の禍をまぬかるへと世俗今に門額を蘇民將來子孫處と書
は此故事也

右の故事を思ふに今俗に鐘爐とて家門の入口に貼り付けて鬼神
疾病などを防ぎ護りますと云ひ即ちこの素盞鳴命の御像をのく
訛りて世にのこれるに非ずやと思はる

○第五章(願主ヨリ願ミ來)

掛毛畏支吾皇神乃大前爾畏美恐毛白久某國某郡某里人何某伊病有且
月日佐麻福久病臥利世故是予以(祭主名)爾事議且雖畏吾皇神乃大前爾齋
奉氏蒼生予惠給布恩願予乞祈奉止為氏今日乃吉日乃吉時爾(名)爾禮代
乃幣帛予捧持且恐美恐毛稱辭竟奉其之掛毛畏支皇神此狀乎平久安久
聞食且何某我惱乎病乎速爾直給齋給比堅磐爾常磐爾命長久夜守日守
爾守給幸給登畏美畏毛白

○新家内安全

掛毛恐支吾大神乃大前爾恐美恐毛白久某國某郡某里人何某伊吾大神

(全上)

乃恩願爾依且其家乃彌益々爾立榮乎事乎祈白止為且(祭主名)爾禮代乃
幣帛予捧持且恐美恐毛稱辭竟奉其之此狀乎平久安久聞食且何某我家
内波爾八十在津日乃枉事不含有產業乎无緩事无怠事勤美務且其家門乎
起佐之給比廣米之給比堅石爾常石爾命長久子孫乃八十連屬爾至爾
茂之八桑枝乃如久令立榮給比過犯須事乃有變乎見直爾直坐且夜守日
守爾守給比幸給爾止恐美恐毛白。

○祈平産

(全上)

掛毛畏支吾大神乃大前爾恐美恐毛白久某國某郡某里人何某我妻何某
伊妊氏今胎月爾當乎流吾大神御靈給比平久安久子令産給乎波事乎祈白
止為且(祭主名)爾禮代乃幣帛予捧持且恐美恐毛稱辭竟奉其之掛毛畏支大
神此狀乎平久安久聞召且何某乎廣久厚久撫給比惠給天比喪久事久令産
給比産乃後毛平久安久令在給止恐美恐毛白

○全報賽

(全上)

掛毛畏支吾大神乃大前爾恐美恐毛白久先爾何某我妻何某伊妊且臨月
爾當之禮利時吾大神乃恩願爾依且平久安久子令産給止祈白支然乎祈白

毛之驗久喪奈久事奈久產米之給留事乎尊備喜備謝乃幣乎捧持且廣久厚久稱祥竟奉留狀乎平久安久開召止忍々毛白

○初宮祭

(全上)

掛毛畏支吾大神乃大前爾忍美忍美白久大神乃氏子何某我眞子何某伊大神乃御靈賜利生出之從利百日餘十日爾成奴彼是乎以今日乃生日乃足日爾初氏大神乃大前爾參出氏拜奉狀乎平久平久開召止白如此仕奉爾依且今毛今毛此嬰兒乎愛美給比日足賜氏諸乃病不令有須久須久止生立榮氏大神乃氏子天皇乃公民止守給幸給止忍美忍美白

○祭先祖詞

(古學諄辭集)

謹美敬且遠津御祖乃御靈代々乃御祖親族諸御靈等乃御前爾子孫姓名近支鄉々乃大神等爾仕奉留神主等諸共爾鹿自物膝折伏世賴自物頂根矣奴較且忍美忍美白須天避留部知部乃中毛此乃某國某郡某里波上津代波鄉人等生出留隨爾表裏乃心逆志必有事無久清支赤支眞澄乃鏡乃疊奈較心毛爾奈有爾禮一向爾皇美麻命乃大御面向爾順比奉里種々乃取行布業毛爾總且古事乃例爾做且此勤美行比來流爾部三粟乃中津代爾至且盤

我行橫佐乃道乃參渡里內日刺都平始米四方八方乃鄉里野乃底山乃底互弘且皇大御國乃古事廢遺大神等乃御後威毛彌隱里隱比行且宮人等我仕奉留神業波歲爾異爾卑志貶且伊武勢伎布勢慮爾屈且居佐賀無支人等波橫佐乃道乃時爾米久毛智鳥乃拘比汚且其方爾相麻自古里相口會且已我仕奉御社已我家毛退支去且永久其迹乎斷爾人毛多如爾辱久雄々志久吾家乃御靈等與當昔次々乃荒廢毛之痛久忍爾之仕奉留御社其家乃子孫乃嗣々彌遠長爾守里保且今爾傳爾給流爾事波最毛尊支辱仗恩願爾奈有爾如此久尊支恩願爾依且奈今毛之玉幸布波大神等乃御心止古學比宇麻志大人等次々爾世爾出坐且神代乃故實見之明且顯事幽事萬乃由緒毛詳爾說明志世爾教悟志給且日爾月爾惟神留御道乎慕學夫徒澤爾出來且大神等乃御後威波漸爾古爾立復利照輝支宮人等毛大神乃稜威乃御光乎蒙里且牟具良繁爾布勢慮乃柴乃破戶乎推開且尊支御道乃片端毛乎手取行且正道乃正直爾越橫佐乃道乃橫佐爾越毛窺比知爾事且奈成波留自今後彌益々爾此學乃榮行久御世止成爾事乃甚嬉久志歡爾志支就且某毛其恩願爾報奉志留且世々乃御祖乃御祭殊爾仕奉久且思

立流時爾合世近支鄉々乃常毛陸魂相神主等毛同様爾其御祖等乃恩
 願乎蒙各毛各毛互爾其家々乎廻里御祭相助仕奉止言爾語合互
 今日乎生日乃足日止擇定米姓名我與津小床乎伊豆能磐鏡止掃清兒矣
 山乃賢木乃枝乎打折持來互伊豆乃真坂樹止二所爾刺立時乃花毛取添
 互神能成波衣之齋比立奉互姓名我弱肩爾太多須肢取掛互持忌回利持
 清回互利造理仕用奉爾留一夜酒止我爾安良受石多々須常世爾在須久斯
 乃神少御神乃腹志御酒乎止白木黒木止變我高知里變腹居並互百件乃八
 百件爾件突文仕奉爾餅乃鏡時自久乃香乃菓種々爾粟實栲實粟實洗米
 赤飯堅鹽御水大野原爾生留物波甘菜辛菜乎始米種々乃物青海原爾住
 物波錯乃廣物錯乃狹物大海爾生流物波廣和布荒和布若和布乃奧津藻
 菜邊津藻菜爾至互爾今日乃禮代御饗乃物止各毛各毛持寄爾並立奉
 且忍美忍美申久遠津御祖代々乃御祖親族乃御靈等今如此久刺立齋比
 奉流神乃小床爾天翔來坐互此獻奉流多米都乎御心母和親爾平久安
 久安幣帛乃足幣帛止所聞食互姓名我家毛身毛在奉有夜乃守白乃守
 爾守幸爾字豆那比給比子孫乃八十相續支無窮爾根母基呂爾吾御社爾

吾御社爾勤美仕奉米學問乃道物書久業毛勤志家乃名毛貶米遠長爾
 御祭善久仕奉米給止今日乃御祭爾相集爾神主等請共爾禱成此居宇自
 物頸根衝拔互平手打上爾拜美忍美忍美毛申給成久白須

○門神祭

(祭文例)

掛毛畏支櫛磐庸神豐磐庸神乃大前爾忍美忍美毛白久此御門爾人ノ家ニ
 爾ト申爾湯津磐村乃如塞坐互四方四角從利疎備荒備來乎天乃麻賀都
 比止云神乃言乎惡事爾相麻自許利相口會賜事无久自上往彼上乎守利
 自下往者下乎護利待防支掃却利言拂氣坐互朝波御門乎開夕波御門乎
 閉互(鳥)居乎祭ル時ニハ此二句ヲ去ルナリ又參入罷出人名乎問所知志
 答過有(半)乎神直日大直日爾見直聞直坐互平久安久守幸給止禮代乃幣
 帛乎捧持互忍々毛稱辭竟奉止白

○井神祭

(全上)

掛毛畏支彌都波乃賣神御井神鳴雷神乃大前爾畏美畏美毛白久此御井乎
 廣久厚久守賜比幸賜天比千代万代毛奴流乎事无久濁流事无久濁流事无
 久淺流事无久和支水乃甘支水乃清支水乃佐夜支水乎彌多爾彌廣爾授

立流時爾合世近支郷々乃常毛陸魂相神主等毛同様爾其御祖等乃恩
 願乎蒙各毛各毛互爾其家々乎廻里御祭相助那都仕奉止言布語合互
 今日乎生日乃足日止擇定米姓名我與津小床乎伊豆島磐鏡止掃清元與
 山乃賢木乃枝乎打折持來互伊豆乃真坂樹止二所爾刺立時乃花毛取添
 且神能成波衣之齋比立奉互姓名我爾肩爾太多須肢取掛互持忌回利持
 清回互利造理仕用奉置留一夜酒止我爾安良受石多々須常世爾在須久斯
 乃神少御神乃釀志御酒乎止白木黒木止獲我高知里豐腹居並互百并乃八
 百并爾并突支仕奉餅乃饒時自久乃香乃菓種々爾菓實柗實梨實洗米
 赤飯堅鹽御水大野原爾生留物波甘菜辛菜乎始米種々乃物青海原爾住
 物波錯乃廣物錯乃狹物大海爾生流物波廣和布莞和布若和布乃與津藻
 菜邊津藻菜爾至互萬今日乃禮代御饗乃物止各毛各毛持寄蒲並立奉
 且恐美恐申佐遠津御祖代々乃御祖親族乃御靈等今如此久刺立齋比
 奉流神乃小床爾天翔來坐互此獻奉流多米都乎御心爾和親爾平久安
 久安幣帛乃足幣帛止所聞食互姓名我家毛爾在事有受夜乃守白乃守
 爾守幸爾宇豆那比給比子孫乃八十相續支無窮爾根母基呂爾吾御社爾

吾御社爾勤美仕奉米志學問乃道物書久業乎勤志家乃名毛貶米佐遠長爾
 御祭善久志仕奉米志給閉今日乃御祭爾相集爾神主等請共爾禱成並居宇自
 物頸根衝拔互平手打上那拜美恐美恐美毛申給皮久白須

○門神祭

(祭文例)

掛毛畏支櫛磐雁神豊磐膳神乃大前爾恐美恐美毛白久此御門(爾人ノ家ニ
爾ト申)爾湯津磐村乃如塞坐互四方四角從利疎備荒備來乎天乃麻賀都
 比止云神乃言乎惡事爾相麻自許利相口會賜事无久自上往波上乎守利
 自下往者下乎護利待防支掃却利言排氣坐互朝波爾御門乎開夕波爾御門乎
 閉互(鳥ノ居乎祭ル時ニハ此二句ヲ去ルナリ又)參入罷出人名乎問所知志
 答過有乎神直日大直日爾見直聞直坐互平久安久守幸給止爾禮代乃幣
 帛乎捧持互恐々毛稱辭竟奉止白

○井神祭

(全上)

掛毛畏支彌都波乃賣神御井神鳴雷神乃大前爾畏美畏美毛白久此御井乎
 廣久厚久守賜比幸賜天比千代万代毛奴流乎事无久濁流事无久濁流事无
 久淺流事无久和支水乃甘支水乃清支水乃佐夜支水乎彌多爾彌廣爾授

賜比與賜比諸乃穰乎設給比清給比過犯事乃有
日守爾守幸給止禮代乃幣帛乎捧持且恐々毛稱辭竟奉止久白

○龜神祭

(全上)

掛卷毛畏支齋火武主比神與都比古神與都比賣神乃大前爾恐美恐毛白
久一日毛不落吾大神等乃高支貴支靈乎被流事乎尊美喜美今日乃生日
乃足日爾禮代乃幣乎捧持且稱辭竟奉乎久平久安久閉食登白如此仕奉爾
依且今毛今毛家內乃人諸我手乃躡足乃躡爾過犯須事乃在
大直毘爾見直閉直坐且可畏支火乃災不令有夜守日守爾守給幸給止爾恐
美恐毛白

○鎮火祭

(延喜式)

高天原爾神留坐皇親神漏義神漏美乃命持且皇御孫命汝豐葦原乃水穗
國乎安國止平久所知食止天下所寄奉志時爾事寄奉志天津詞太詞事乎
以且申久神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給且國乃八十國嶋乃
八十嶋乎生給比麻奈弟子爾火結神生給且美保止被燒且石隱坐且夜七
夜晝七日吾乎奈見給比吾奈妹乃命止申給比此七日波爾不足且隱坐事奇

止見所行須時火乎生給且御保止乎所燒坐支如此時爾吾名扶乃命乃吾
乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多志給比津申給且吾名扶乃命汝上津國
乎所知食志倍吾汝下津國乎所知止白且石隱給且與美津枚坂爾至坐且所
思食久吾名扶命能所知食上津國爾心惡子乎生置且來止宜且返坐且更
生子水神菟川菜植山姬四種物乎生給且此乃心惡子乃心荒汝比曾水神菟
壇山姬川菜乎持且鎮奉止事教悟給支依此且稱辭竟奉者皇御孫乃朝廷
爾御心一速比給止汝志為且進物汝明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉且青
海原爾住物汝饋廣物饋狹物與津海菜邊津海菜爾至爾且御酒者獲邊高
知獲復滿雙且和稻荒稻爾至萬且如橫山置高成且天津祝詞乃太祝詞事
以且稱辭竟奉止久申

○道饗祭

(全上)

高天之原爾事始且皇御孫之命止稱辭竟奉大八衢爾湯津磐村之如久塞
坐皇神等之前爾申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申且辭竟奉汝久
根國底國利盛爾疎爾來物爾相率相口會事無且下行者下乎守利上行者
上乎守理夜之守日之守爾守奉齋奉止進幣帛者明妙照妙和妙荒妙爾備

奉御酒波瓊邊高知瓊腹滿雙氏汁毛爾爾山野居住物者毛乃和物毛乃荒
 物青海原爾住物者緒乃廣物緒乃狹物與津海菜邊津海菜爾至爾氏橫山
 乃如久置所足氏進宇豆乃幣帛乎平久聞食氏大八衝爾湯津磐村之如久
 塞坐且皇御孫命乎堅石爾常石爾齋奉茂御世爾幸爾奉給止申又親王王
 等臣等天下公民爾至爾氏平久齋給止神官天津祝詞乃太祝詞事乎以且
 稱辭竟奉止申

○祭大雷大神祝詞

(古學諄辭集)

此乃神床爾神籙立且鎮奉里稱辭竟奉爾掛卷毛畏支大雷大神乃大御前
 爾慎美敬比拜美奉且畏美畏美白須高天原爾神留坐須神魯岐神魯美乃
 命以且神伊邪那岐伊邪那美命大八嶋乃國々嶋々乎生給比世爾人草乎
 惠給止諸乃神達其生給比麻奈子爾火產靈神乎生給比伊邪那岐神火結
 神乃御靈爾因且大神乃生坐且世々有爾在事禍物乎拂給布本乃由乃麻
 々運々高天原爾始給比事其神隨毛知看且荒爾健比崇里給布事無久四
 方四隅爾荒疎爾來乎萬乃在物禍事乎攘給比追退給比此乃殿爾神降之世
 米給布事无久稜威乃御靈乎幸爾給帶惠美給爾宇豆那比給止爾祈祝伎乞

願奉且月每乃朔日乃日止十五日也日乃定爾祭波更爾御稜威乎振比給
 本波臨時毛爾其禮代止立奉爾物等乃洩落乎事其見直之爾直志給比罪犯有
 波有給比怨志給比夜乃守日乃守爾守幸爾閉給止爾慮自物膝折伏世爾自物
 頂根突拔且開手打上計畏美畏美祈祝支奉爾事乃由乎相殿爾齋奉爾風
 神火神金神水神土神諸共爾平久安久爾食且守里幸爾給止白須

○鎮震祭祝詞作例

(熱田神官々司 角田忠行)

掛卷毛畏支生嶋大神足嶋大神乃御魂乎此乃真澄乃鏡爾招奉利世世奉
 利且大前爾忍美忍美申久佐皇大神乃伏凝給布事衣坐計此頃波日麻稱久
 奈章乃震動天種々乃物損爾爾故爾人々乃心毛空爾居坐天受危美歎比感
 比吟布狀乎憐美給比御心最速比給受真澄乃鏡乃見志明米賜比惠賜比
 幸給止爾申天禮代斗捧奉爾幣帛乎平久安久爾食天心乃底比憂訴奉爾事
 乃由乎相諾比給止爾開手打鳴且忍美忍美申須
 言別天此所乎主領坐須產土大神爾請祈奉久其大神乃御心爾遠奉爾事乃
 有爾乎見直志爾直志坐且此願事乎生嶋大神足嶋大神乃爾志食久爾事
 執奉志給止爾忍美忍美申須

○地震の説

(同人)

地震の説に二種ありて其一は大地に中心は火海なり大地の大國魂たる生島大神足島大神と稱すは伊弉諾尊伊弉冉尊の國土を造り給ふ御功の御名なるがこの國土を造り給ひし始乃御功は御稱を泥土養尊沙土養命と申すなり此地球は日界と反對にして中心は火海を包めり其廻りは磐根にて其外表は土なり故底津磐根の古語にありたりさて泥土養尊はウヒチは泥土にて水に交れる精土なり沙土養尊のヌヒチハ沙土ふて水に交はれる疏土ありこれ地心なる火氣の爲に燥土陸地とはなれるありろの生島大神足島大神の御心として地心なる火氣を激發して震動をさしめ給ふなれば地震祭には精心もて生島足島大神等を奉祈べし此神は神祇官の齋院に祀らせ給へりさてナキは養火にて土養に同ヒニはナに通ふことニゴムをナゴムと云ふが如しヒはキに通ふこと大炊次オホキといふか如しなは例ありこれ一種なり伊呂波字類抄に地震祭は三日忌籠以御鏡毎夜祭之とあり心得べし其二は素盞鳴尊乃上天し給へる時に山川悉

動國土皆震といへるの地震の事の見えたる始あるが此の猛烈なる神勢の然らまむる所また其地を主領させる神の伏疑給へる神勢より發れるもありて祭り和め玉ひし事國史に見えたりこれ二種なりされば鎮震祭を行はむに清地に鏡を立て憑坐となり生嶋大神足嶋大神及び其土の神をまつるべくこそ

右愛知大道新誌第二十一號にありしをこゝに轉載して古學者の参考とばなしぬ

○遷却崇神祭

(延喜式)

高天原神留坐事始給志神漏伎神漏美乃命以互天之高市爾八百萬神等乎神集集給比神議議給互我皇御孫之尊波豐葦原乃水穗之國乎安國止平久氣所知食止天之磐座放天八重雲乎伊頭之千別爾支千別天降所寄奉志時爾誰神乎先遣之水穗國能荒振神等乎神攘々平氣乎神議々給時爾諸神等皆量申久天穗日之命乎遣而平氣乎申支是以天降遣時爾此神波返言不申氏次遣志健三熊之命毛隨父事氏返言不申又遣志天若彦毛返言不申氏高津鳥狹爾依互立處爾身失支是以天津神乃御言以

豆更量給豆經津主命健雷命二柱神等乎天降給豆荒振神等乎神讓令給
 比神和和給氏語問之磐根樹立草之片葉毛語止豆皇御孫之尊乎天降寄
 奉支如此久天降所寄奉志四方之國中止大倭日高見之國平安國止定奉
 豆下津磐根爾宮柱太敷立高天之原千木高知氏天之御蔭日之御蔭止
 仕奉豆安國止平氣所知食武皇御孫之尊乃天御舍之內仁坐須皇神等波
 荒備給比健備給比崇給事無志高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食
 豆神直日大直日仁直志給比天自此所波四方乎見霽山川能消地爾遷利
 出坐天吾地止字須波伎坐世進幣帛者明妙照妙和妙荒妙爾備奉豆見明
 物止鏡翫物止玉射放物止弓矢打斷物止太刀馳出物止御馬御酒波豐戶
 高知豐腹滿雙氏米爾穎爾山爾住物者毛乃和物毛乃荒物大野原爾生物
 者甘菜辛菜青海原爾住物者儲廣物儲狹物與津海菜邊津海菜爾至爾
 橫山之如久几物爾置所足氏奉留字豆乃幣帛乎皇神等乃御心毛明爾安
 幣帛乃足幣帛止平久聞食豆崇給比健備給事無之山川之廣久清地爾遷
 出坐豆神奈我良鎮坐世稱辭竟奉止申

○田遊祭祝詞

(古學諄辭集)

掛卷毛畏支某大神乃字豆乃大前爾忌同利清同豆慎美敬比恐美恐毛白
 古支法乃任今日乃生日乃足日仁田遊乃神事奉仕止爲豆大庭爾神乃小
 枝乎折敷豆田所止爲豆種々仁仕奉留神官等群立集豆耕播種子分秧插
 收稻乃狀如須併優奉仕狀乎神隨阿那可笑阿那面白止見行之坐豆大神
 乃御年代乎始豆四方國乃公民等我手肱爾水沫播垂利向股爾泥播寄豆
 取作留與津御年乎暴風洪水爾不令相賜入束穗乃茂穗爾成幸爾賜乎事
 波白毛更利朝夕爾勞支作留陸田種子等山縣爾時留甘菜辛菜爾至迄成
 傷布事无久風雨時節爾協豆農業乃時乎不誤或波野山爾住爾禽獸乃疎
 備荒豆年穀等乎无傷事種々乃病蝗乃災无之彌益々爾立榮延繁利令實
 賜止祈白須事乃由乎平久安久聞食受賜止某月某日爾姓名恐美恐毛白
 須

○火舞祭

(全上)

掛麻久恐支某大神乃字頭乃大前爾姓名慎美敬比畏美畏毛白八十日日
 波雖有此某月某日子吉月乃吉日乃吉時止隨例齋定豆火舞乃神事奉仕
 止爲豆神官等諸平常利與殊爾齋同利大前爾參集波利大宮毛赫久計利爾

庭燎_ヲ焚_ヒ紙_以作_シ花形止折_給乃五十_給止御_巫我_二手_取持_知大
前_ヲ左_往右_往舞_訶那_傳互_火舞_仕奉_狀乎_神隨_見行_坐互_大神_乃敷_坐須_此
郷_ヲ始_互大_八洲_乃國_中波_火神_乃御_心伊_知速_備坐_事无_久根_國底_國自_利
荒_備疎_備來_乎狂_神乃_禍事_无行_事天_下乃_千五_百萬_乃人_等乃_過犯_須事_乃
有_乎變_神直_日大_直日_見直_聞直_坐互_國家_毛火_乃災_不令_有賜_夜守_日
守_爾守_幸賜_止恐_美恐_美毛_白賜_止久_白須

○船玉祭

(祭文例)

船_玉神_止御_名波_白互_稱辭_竟奉_波其_久神_隨毛_吾皇_神乃_御靈_賜互_利船_上波_牀
爾_居如_久水_上波_土乎_行如_久撫_給比_惠給_比海_積乃_澳爾_邊毛_可恐_支風_波
爾_逢世_給受_波吾_大神_等守_給比_幸給_禮代_乃幣_帛乎_捧持_互恐_美恐_美稱_辭
竟_奉止_其久_白

○祈漁獵

(全上)

掛_毛畏_支吾_大神_乃大_前爾_恐美_恐美_白久_某國_某郡_某村_乃海_人何_某我_網
子_調互_引網_爾綿_積乃_緒乃_廣物_緒乃_狹物_乃有_乃盡_漏事_無久_落事_无久_取
得_米之_給比_爾零_風吹_毛止_海幸_逢過_部事_无久_守給_比幸_給禮_代乃_幣帛_乎捧

持_互恐_々毛_稱辭_竟奉_止久_白。

○家に齋き奉る神等の御棚に向ひ

(毎朝神拜詞記)

此_乃神_牀爾_神籬_立互_招奉_里令_坐奉_里互_日爾_異仁_稱辭_竟奉_波伊_勢爾_宮
大_神等_乎始_奉里_天御_神八_百萬_國御_神八_百萬_乃神_等其_從幣_給布_百千_万之_神等_枝宮_々
之_大小_社々_爾鎮_座坐_須千_五百_万乃_神等_其從_幣給_布百_千万_之神_等枝_宮
枝_社之_神等_會富_登神_乃御_前乎_毛慎_美敬_比過_犯須_事乃_有乎_美見_直直_聞
直_志坐_互各_々掌_分坐_須御_功德_乃隨_爾惠_賜比_幸幣_賜互_神習_志米_道耳_功
續_乎合_立賜_用止_畏々_毛拜_美奉_留

○學問の神の御前に向ひ

(全上)

吾_古學_爾幸_聞給_止爾_齋比_奉留_入意_思兼_神忌_部神_皆原_神又_添互_齋比_奉流
荷_田大_人岡_部大_人本_居大_人久_延昆_古命_乃御_前乎_毛慎_美敬_比學_問乃_業爾
悟_深久_彌獎_爾獎_給比_足波_不行_存毛_天下_乃事_共乎_令知_給幣_止畏_美思_毛
拜_美奉_留

○新始祭式

(祭典略)

是_{ヨリ}下_柱立_棟祭_マデ_合セ_テ三_條ハ_ミナ_工匠_ノ祭_ルハ_キ事_ナレ_ドモ

時ニヨリテハ神人ノ行フ事モ有レハ其祭式ヲ記セリ
新始トハ宮ニテモ家ニテモ作始ムル時ノ祭ナリ其ハマツ工作場近キ
所ニ竹ヲ立注連繩ヲ張り薦ヲ敷キ高案ヲ居エ幣ヲ安ンジテ手置帆負
命彦狹知命ノ神座トナシテコレヲ祭ル此ニ柱神ハ高天原ニシテ天照
大御神ノ大宮ヲ造リ給ヒシ神ナレハ工匠等ソノ神恩ヲ蒙リテ遠過ツ
事无ク作り終ヘンコトヲ祈白スナリ云々
神座ノ前ニ神洪神酒太玉串ヲ献ル料ノ案ヲ居エ祭主ノ座ヲ鋪キ其所
ヨリ二三丈モ離レタル所ニ柱ニ作ルベキ材ヲ置キ其側ニ新一口ヲ物
ニ載セテ置キ工匠其前ニ踞居ス工匠敷ナラハ新ヲ其員ニ合セテ置ク
ベシ○次ニ祝詞○次ニ工匠座ヲ立テ神前ヲ拜シ新ヲ執リテ木ノ本中
末ヲ三遍ヅ、削リ新ヲ本ノ所ニ置キ一拜シテ退去ス次々ノ工等ミナ
然リ○竟リテ供物ヲ撤シ幣ヲ納メ直會ス

○同祝詞

(祭文例)

掛毛畏支手置帆負命彦狹知命大前爾畏美畏美白久此度木工姓名我
此神乃御舍手或ハ幣殿拜殿廊御門其餘ノ殿舍ノ名今日乃生日乃足日

爾造初須止如此不容易事波吾皇神等乃廣支厚支御惠爾依之平久安久
功成竟止思議氏禮代乃幣乎捧持且恐美恐美稱辞竟奉止白故如此之狀
乎皇神乃御心爾神隨聞召且今日從利日々爾勞務水木工乃道爾恩願乎
幸爾坐互思慮乃悟波久緩事无久勤利令務給比打都墨繩乃法乃任遠過
事无天之速久令功卒給止恐美恐美白

○柱立祭式

(祭典略)

コレハ柱ヲ立始ムル時ノ祭ナリマツ宮ニテモ家ニテモ中央ノ柱ヲ一
本立テソノ四方ニ竹ヲ立注連繩ヲ張り神座ヲ設ケテ手置帆負彦狹知命
ヲ祭リ此神ノ恩願ニ依リテ法ノ如ク建終シメ給ヘト祈ルナリ中央ノ
柱便惡クハ春ハ東夏ハ南秋ハ西冬ハ北ノ柱ヲ一本立テ其前ニテ祭ル
ベシ

○同祝詞

(祭文例)

掛美恐支手置帆負命彦狹知命大前爾恐美恐美白久木工何某我此神宮
同上ニ作流業乎大神等乃廣支厚支御恩爾依互打都墨繩毛執留手斧毛無
違事無過事柱桁梁乎始其外乃物等乎可有狀爾作訖奴故是乎以且今日

乃生日乃足日爾齋柱建始止_平爲且大前爾大御酒居並稱詳竟奉狀_平平久
安久閉食且今モ往前モ彌益々爾恩賴_平幸用坐且不事過令建訖給止_爾恐
美恐美毛白

○上棟祭式

棟材ヲ引上ル時行フベキ事ナレドモ多クハ既ニ屋之上ヲ葺終リテ後
祭ルナリ

屋脊ニ棚ヲ架ヒ神座ヲ設ケテ手置帆負命彦狹知命ヲ祭リテ宮ニテモ
宮ニテモ事無ク作り終ヘシノ給ヘル奏ヲ致スナリ

○同祝詞

掛毛畏支手置帆負命彦狹知命大前爾恐美恐毛白久先爾木工姓名我此
大宮_平同_上造初流時爾祈申_之如此不容易事_平吾皇神等守給助給_正法
乃任平久安久事成竟_米給止_爾祈白支然_平祈申_之驗久無違事無過事令造
竟給流事_平貴美喜美今日乃生日乃足日爾謝乃禮代止大御酒大御饌_平
几物爾置足_且恐美恐美毛稱詳竟奉狀_平神隨爾召且今モ今モ此大宮_平
同_上安宮止_正殿ノ外ハ此_三吾皇神乃御靈給止且築立_多柱取_多棟桁梁

乃錯此無動鳴事打堅_多釘乃緩昆取_多葺流_多幾乃噪支無久千代常登波爾守
給幸給登恐美恐美毛白

予や不才淺學を願みすこの冊子を編輯す願みて其筆する所を閱
するに粗漏誤謬脱落の點勘らざるは識者の教を待たずして自
ら之を知る然れども卒爾之際之を訂正するの暇を得ず他日再版
するを待ちて其意を達せんとす唯謝する所はこゝに引用せし書
目の編者よ予の粗漏あるを恕せられむことを

神官必携下巻終

附錄

○神官試驗之儀ニ付

明治十五年御省乙第四十六號御達ニ依リ假ニ府縣社以下神官規則別紙寫之通リ伺定履行致來候處學力ノ淺深優劣ニ依リ適當ノ證不相渡候テハ受験者ノ志望ヲシテ満足セシメザル場合モ有之候間最初ノ試驗規則ヲ改正シ別紙學階授與規則ニヨリ試驗証相渡申度右ハ御差支無之候哉此段相伺候也

明治廿三年四月十五日 皇典講究所副總裁從一位久我建通

內務大臣伯爵山縣有朋殿

(別紙)

○學階授與規則

- 第一條 學業ノ淺深優劣ヲ品別スル爲ニ左ノ學階ヲ定ム
學正(自一等至五等) 司業(自壹等至八等)
- 第二條 學正ハ總裁之ヲ授ケ司業ハ副總裁之ヲ授ケ

第三條 學階ヲ受ケタル者ハ本所ノ優待ヲ享クベシ

第四條 何人ニ拘ハラズ學階ノ授與ヲ望ム者ニハ左ノ科目ニ依リ試驗ヲ受ケシム

○試驗科目

第一種

- 六國史(問題)(說明)(書取) 令義解(全上) 延喜式(全上)
- 法曹至要抄(全上) 源氏物語(全上) 考證二題
- 作文三題(宣命體)(物語體)(唐宋文體)

第二種

- 六國史(問題)(說明)(書取) 令義解(全上)
- 延喜式(全上) 萬葉集(全上)
- 考證一題 作文二題(宣命體)(唐宗文體)

第三種

- 日本紀(講義)(書取) 古事記(講義)(書取)
- 令義解(全上) 萬葉集(全上)

作文二題 (祝詞) (通俗文)

第四種

古事記 (講義) (書取)

職原抄 (全上)

土佐日記 (全上)

作文一題 (祝詞)

第五種

古語拾遺 (講義) (書取)

祝詞式 (全上)

作文一題 (祝詞)

第五條 試験第二種已上ヲ學証豫選科目トシ本所ニ於テ之ヲ施行シ

第三種以下ヲ司業豫選科目トシ分所ニ於テ之ヲ施行ス

第六條 試験合格不合格ヲ定ムル法ハ試業定則ニ依ル

第七條 試験合格ノ者ニハ第壹號書式ノ學階證ヲ與ス

第八條 著述編纂書ヲ以テ學力檢定ヲ受ケ相當學階ノ授與ヲ望ム者

ハ之ヲ許ス事アルベシ

第九條 既ニ學階ヲ受ケタル者昇階ヲ望ム時ハ更ニ相當ノ試験ヲ受

ケシム

第十條 試験ヲ望ム者ニハ第二號書式ニ依リ願書學業履曆書ヲ差出

サシム

第十一條 學階ノ授與及昇等ヲ望ム時ニハ試験手数料トシテ金壹圓

ヲ納メシム

第十二條 本所遠隔ノ地ニ居住スル者第二種以上ノ試験ヲ望ム時ハ

分所ヲ經テ出願セシム

第十三條 前條二種以上ノ試験ヲ分所ヲ經テ出願スル者アル時ハ本

所ニ於テ其履曆書ヲ點檢シ相當ノ願ト認ムル時ハ試験科目

ニ依リ問題ヲ下附スベシ

第十四條 分所ニ於テ第三種以下ノ試験ヲ施行シタル時ハ第三號書

式ニ依リ選舉スベシ

第十五條 新ニ學階ヲ受タル者ニハ第四號書式ニ依リ誓約書ヲ差出

サシム

第十六條 左ニ掲グル者ハ學術優等ナルモ學階ヲ受クル事ヲ得ズ

一品行不正ノ者

一 犯罪處刑ノ者
 一身代限ノ處分ヲ受ケ辨償ヲ終ラザルモノ
 第十七條 既ニ學階ヲ受ケタル者誓約書ニ違背シ又ハ前條ノ所業アル時ハ學階ヲ取上ケ公告ノ手續ヲナス事アルベシ
 第壹號學階證書式

氏名

試驗ノ成跡ニ依リ何等學正(司業)ヲ授ク

年 月 日

皇典講究所總裁(副總裁)

氏名

用紙鳥ノ子四ツ切

第二號書式 試驗願書

私儀今般學業ノ試驗相受度(學階昇等致度)志願ス付別紙學業履歷書御點檢の上第何種科目を以て御試驗被成下此段奉願候也

年號月日

族籍住所

氏名 印

年月日生

本所(分所)宛

(別紙)

學業履歷書

族籍住所

氏名 印

年月日生

一 何年何月ヨリ何年何月マテ何學校(塾)ニ入り(何某ニ就キ)何學修業
 一 何々學術上ニ係ル賞狀賞品免許狀卒業證書等ヲ所持スル者ハ其
 與ヘタル藩府縣學校教師及其書面物品員數等ヲ此ニ記載シ別ニ
 書面寫ヲ添フ

一何々學術ヲ以テ選用セラレタル履歴アル者ハ其大概ニ此ニ記載ス
 一何年何月何等學正(司業)ヲ受シ(昇階)ヲ望ム者ハ此一項ヲ加フ
 右之通相違無之候也

年月日

右氏名 氏名 印
 右氏名 學師學友 氏名 印
 證人 氏名 印

第三號書式

司業選舉狀

第何種試驗甲(乙)丙(等)△朱字

族籍住所

氏名 印

年月日生

右之者今般依願別紙學業履歴書ヲ點檢シ試驗施行候處朱書所標之
 通合格ニ付御詮議之上相當之學階御授與相成度此段選舉致候也

年月日

教授 重立 印
 理事 委員 印
 分所長 以上三名 印
 連署 印

副總裁宛

第四號書式

誓約書

私儀今般何等學生(司業)御授與相成候ニ付而ハ今後右學階名稱を汚
 すべし所業不致以勿論本所(分所)諸規則を遵守し御指揮に違背致間
 敷候此段誓約仕候也

年月日

學階 氏名 印
 右氏名 學師(學友) 氏名 印
 右氏名 親戚 氏名 印

氏名 印

副總裁宛
内務省指令甲第三五號

皇典講究所

本年四月十五日伺神官試験之件伺之通

明治廿三年四月廿四日 内務大臣 伯爵山縣有朋

○神官試験ノ義ニ付伺

府縣社以下神官試験ノ義ニ付テハ明治十五年御省乙第四十六號御達之趣有之同年十月試験規則及試験取扱方ノ義伺定メ履行致來候處昨二十三年四月試験規則ヲ改正シ學階授與規則ニ據リ試験施行致度旨伺濟相成候ニ就テハ取扱上區々相成候廉モ有之候間左之通相定メ度候

第一 從前附與セシ假學証ハ兼テ伺濟ヲ以テ授與ノ月ヨリ滿五年ヲ有效期限ト相定有之ニ付右期限經過ノ向ハ總テ學階授與規則ニ據

リ更ニ試験スルモノトス

第二 學階授與規則ニ據リ試験可致ニ付テハ府縣鄉村社祠官祠掌ノ區別ニ依リ左ノ階級ニ準シ試験スルモノトス

- 府縣社 祠官 五等司業相當試験
- 鄉社 祠官 六等司業相當試験
- 府縣社 祠掌 七等司業相當試験
- 鄉村社 祠掌 八等司業相當試験

第三 前項果シテ然ラハ學階所持ノ者ハ同級ノ轉任兼務若クハ高級ヨリ下級ニ轉スル等ハ別ニ試験ヲ要セスト雖モ下級ヨリ高級ニ轉任シ及兼勤スル節ハ其階級ニ依リ試験スルモノトス

第四 成規ノ試験ヲ受ケ落第シタルモノ及他ノ事故ニ托シ試験不相受モノ又ハ學階授與規則第十七條ニ依リ學階取上ルモノ有之節ハ其都度事實ヲ地方廳ニ具申スルモノトス
右御差支無之候哉此段相伺候也

明治廿四年十月十四日 皇典講究所副總裁 久我建通

内務大臣 子爵品川彌二郎

内務省指令甲第四〇號

皇典講究所

本年十月十四日何神官試験ノ件伺之通

明治廿四年十月廿三日

内務大臣 子爵品川彌二郎

○學階試験採用内規

格	第一種試験	第二種試験	第三種試験	第四種試験	第五種試験
	甲	甲	甲	甲	甲
	乙	乙	乙	乙	乙
實	甲	甲	甲	甲	甲
	乙	乙	乙	乙	乙
	丙	丙	丙	丙	丙
階	學正	學正	學正	學正	學正
	學正	學正	學正	學正	學正
	學正	學正	學正	學正	學正
學	一等	四等	一等	四等	七等
	二等	五等	二等	五等	八等
	三等	六等	三等	六等	八等

右内規は皇典講究本所より達せられたる者なり

内務省訓令第四號

北海道廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)

官國幣社神職試験規則左ノ通相定ム

明治二十五年三月十七日

内務大臣 伯爵 副島種臣

官國幣社神職試験規則

第一條 神職試験ハ高等尋常ノ二種ニ分ツ

第二條 官司權官司ハ高等試験合格ノ者補宜主典ハ尋常試験合格ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 高等試験ハ内務省ニ委員ヲ設ケ本省ニ於テ施行ス尋常試験ハ各地方廳ニ委員ヲ置キ施行スヘシ

但高等試験ト雖時宜ニヨリ地方廳ニ於テ施行スルコトアル

ベシ尤問題及試験成績等ハ本省ニ於テ撰定スヘシ

第四條 尋常試験ハ施行前其地方廳ニ於テ問題ヲ取調本省ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 試験合格者高等試験者ハ内務省ヨリ尋常試験者ハ其府縣ヨリ合格證書ヲ付與スヘシ

第六條 宮司權宮司撰舉ノ節ハ高等試験合格證書寫ヲ添へ本大臣へ差出スベシ

第七條 禰宜主典ハ其地方長官限リ申付其都度本大臣へ報告スベシ

第八條 試験科目ヲ分ツ左ノ如シ
高等試験科目
六國史(問題)(説明)(書取)
延喜式(全上)
令義解(全上)
萬葉集(全上)

法曹至要抄(全上)
考證(二題)

作文二題(宣命體)(公文體)
尋常試験科目

古事記(問題)(説明)(書取)
土佐日記(全上)

職原抄(全上)
祝詞式(全上)

作文二題(祝詞)(公文體)
第九條 本試験合格證書所持ノ者ハ官國幣社神職中該證書相當ノ位置へ轉補又ハ再補スルコトヲ得

第十條 左ニ掲グルモノハ試験ヲ要セス直ニ宮司權宮司ニ補スルコトヲ得

一 其神社神統又ハ維新前十代以上該神社へ奉仕セシ重立タル者及ヒ其子孫

二 其神社祭神ノ一族臣下ノ内祭神在世ニ於テ功蹟顯著史乘ニ著名アル統末

三 行政官吏判任官四等八級俸以上滿三年以上奉職セシ者

四 皇典講究所學階一等司業以上ノ者

五 該神社所在地ノ舊務主

六 維新前王事執掌ノ功ニ依リ官ノ褒賞ヲ受ケタル者
但以上六項ニ該當スル者ト雖モ現時ノ性行其他不適當ト認ムルモノハ採用ノ限ニアラス

第十一條 左ニ掲グルモノハ試験ヲ要セス直ニ禰宜主典ニ申付ルコトヲ得
一 維新以前五代以上該神社へ奉仕セシ者及ヒ其子孫

二 行政官吏判任官以上滿二年以上奉職セシ者
三 皇典講究所學階五等司業以上ノ者

但性行其他不適當ト認ムルモノハ前同斷

第十二條 本規則施行前ヨリ在職ノ者ハ試験ヲ要セス其現職ニ在ル
コトヲ得

第十三條 官幣小社波上宮別格官幣社靖國神社神職ハ本規則ニ不拘
從來ノ取扱ニヨル

第十四條 採用スヘキ人員及職名試験期日等ハ其時々官報又ハ新聞
紙其他便宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第十五條 本規則ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

內務省訓令第五號

應府縣(沖繩縣ヲ除ク)

府縣社以下神官ノ儀ハ自今左ニ攝クルモノニシテ性行其他適當ト
認ムル者ハ皇典講究所學階試験ニ不拘神官タルノ認可ヲ與フベシ
明治二十五年三月十七日 內務大臣 伯爵 副島種臣

祠官

一 維新前五代以上其神社ニ奉仕セシ者及ヒ其子孫

一 明治十五年八月以前ヨリ奉職勤績ノ者

但 現職祠掌ヨリ祠官ニ撰奉スルハ此限ニアラス

一 有位者又ハ判任官以上滿二年奉職セシ者

一 該神社所在ノ府縣ニ於テ一箇年直接國稅十圓以上納ムル者

祠掌

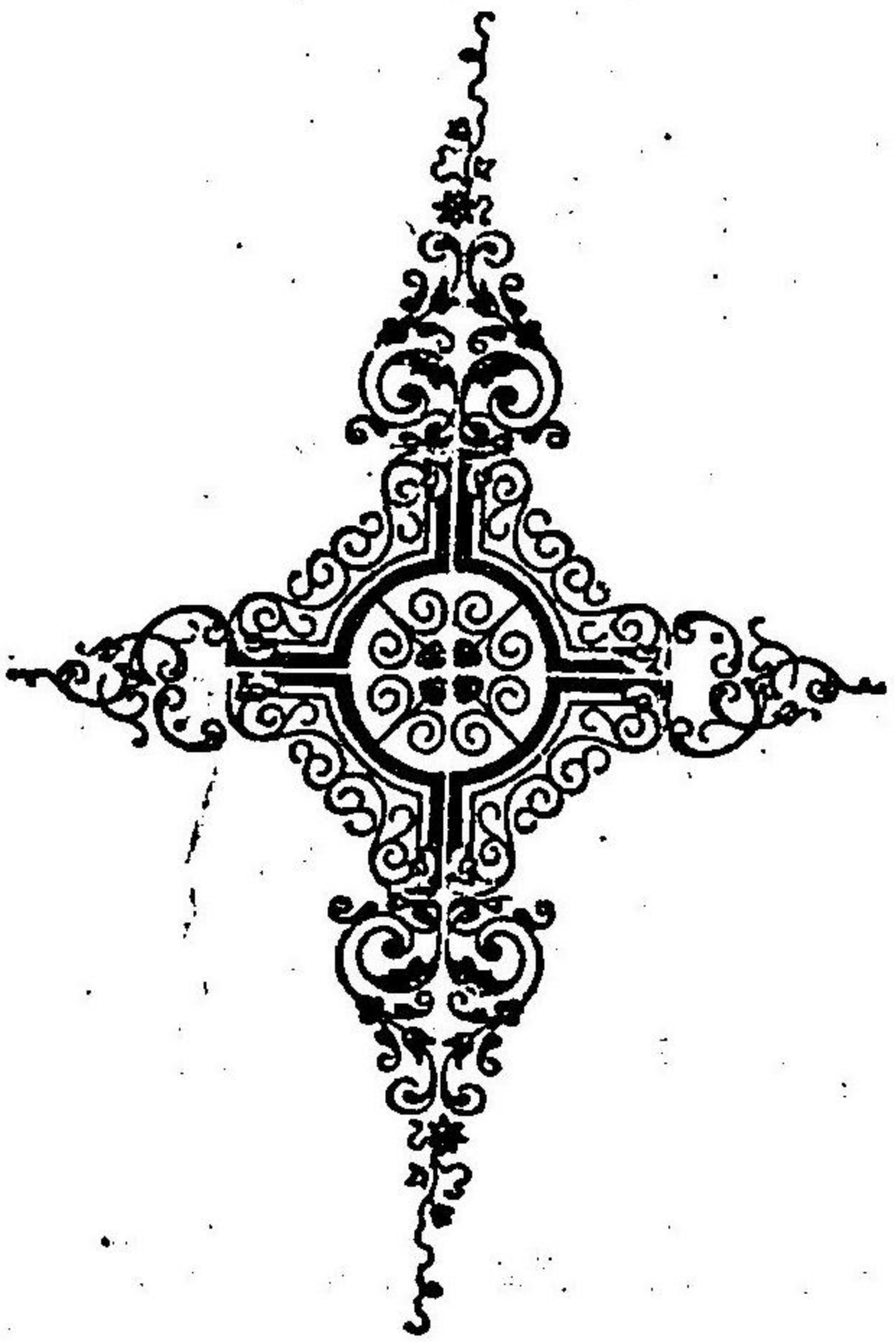
一 維新前五代以上其神社ニ奉職セシ者及ヒ其子孫

一 明治十五年八月以前ヨリ奉職勤績ノ者

一 該神社所在地ノ町村長三年以上奉職セシ者

附錄終

神宮小書



明治二十五年十一月廿五日印刷
同年同月廿六日出版

(定價金三十拾五錢)

此印章無半

者ハ偽版也



編輯者兼

三重縣士族

伊藤左門

伊勢國鈴鹿郡川崎村
大字川崎八十三番屋敷

印刷者

三重縣士族

加藤五百記

伊勢國鈴鹿郡龜山町
大字東九拾番屋敷

發行所

玉 鉾 舍

伊勢國鈴鹿郡川崎村
伊藤邸宅

